



台湾「同志文学」における日本

劉，靈均

(Degree)

博士（文学）

(Date of Degree)

2020-09-25

(Date of Publication)

2022-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第7832号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007832>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



博 士 論 文

令和2年7月7日

台湾「同志文学」における日本

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

劉 靈 均

博士論文
台湾「同志文学」における日本
目次

序章

日本で台湾「同志文学」を考える	1
-----------------	---

第1章

白先勇『孽子』における日本表象： 「同志文学」における多文化共生	10
-------------------------------------	----

第2章

日本にいる台湾「同志」： 呉継文『天河撩乱』における日本描写	26
-----------------------------------	----

第3章

日本語の「台湾同志文学」の誕生： 李琴峰『独り舞』論	38
-------------------------------	----

第4章

マレーシア華人系「同志文学」を考える： 楊邦尼「毒薬」の「当事者性」論争を手掛かりに	50
---	----

終章

ハブとしての「台湾同志文学」	67
----------------	----

参考資料

71

初出一覧

77

博士論文

台湾「同志文学」における日本

序章：日本で台湾「同志文学」を考える

0.1.はじめに

台湾は、2019年5月に、アジアで初めて同性婚が法制化された国となった¹。これは1987年、即ち中国国民党がそれまで台湾に敷いていた「戒厳令」を解除した年の前後から、現在に至るまで約30年にわたって展開されてきた女性解放運動や性的マイノリティ運動などの一つの成果として考えられる²。そしてその背後には、「同志文学」という社会性の強い文学ジャンルが存在している。「同志文学」と性的マイノリティの社会運動はお互いに支え合いながら、豊富な文化コンテンツの蓄積と平等権の獲得という確実な結果を実らせ、さらには中国語圏の他の地域とも相互に影響を与え合うにまでなった。本章では、台湾において「同志文学」というジャンルが形成されてきた経緯とその内容について説明し、例として代表的な二つの作品を紹介したうえで、日本で「同志文学」を考えることの意味および本論文の問題意識および方向性を示すことにしたい。

0.2.これまでの「同志文学」

0.2.1 なぜ「同志文学」と呼ばれるのか

同性愛者などのセクシュアル・マイノリティをテーマとする「同志文学」は、台湾文学における大きなキーワードである。

しかし、なぜLGBT（性的少数派）の人々は中国語圏において「同志」と呼ばれるのだろうか。言うまでもなく、「同志」という言葉は同じ思想、同じ志（主に共産主義）を持つ人々が互いを呼ぶ呼称だったのだが、「同」という漢字が入っていることから

「同」性愛者の隠語にもなっていた。もちろん、戦後から共産党を忌避してきた非中国の中国語圏地域からこのような言い方が生まれたことを考えれば、それはやや自虐的にも聞こえる。

¹ 鈴木賢「判例時評 アジアで一番乗り、台湾で同性婚実現へ：台湾司法院大法官第748号解釈を読み解く」『法律時報』89巻9号、2017.8.、4-6頁、および弘末和也「同性婚を支持した台湾司法院判断の分析」『函館短期大学紀要』44号、2017.10.、85-91頁に詳しい。勿論厳密に言うと、同性婚が法制化されたのは、2019年末現在世界中の十数ヶ国にしか認められていない「中華民国」である。

² 台湾のLGBT運動に関しては、拙稿「性的マイノリティ運動 戒厳令解除以後の道のり」赤松美和子・若松大祐編『台湾を知るための60章』（東京、明石書店）、172-176頁に詳しい。

正式に「同志」という言葉を性的マイノリティの呼称にしたのは、香港出身のエッセイスト邁克と、同じく香港の劇作家の林奕華と言われている。彼らは 80 年代後半にそれぞれ「queer」と「lesbian and gay」を「同志」という言葉で訳出した³。この言葉は後に台湾でも定着し、90 年代以後は、中華人民共和国を含めた中国語圏で広く定着した。

一方、性的マイノリティを語る場合、現在の日本ではやはり「LGBT」という四文字のイニシャルが想起される。「LGBT」とは四つの「代表的」な性的マイノリティのカテゴリーの頭文字であるが、性的要素は元々複雑なもので、四つだけでは到底分類しきれず（「LGBTQ」「LGBTI」「LGBTIAQQ」などさらなる多くの頭文字で表す場合もある）、その「志」も実際には多種多様である。しかし一方で、これらの当事者が団結一致して戦わなければ、特異な少数派の個体として矮小化され、ヘテロセクシュアル社会に飲み込まれることも考えられる。この側面から見ると、中国語圏の人々が「同志」という言葉を転用したのも頷けるだろう。

1987 年の戒厳令の解除に伴い、それまで忌避されてきた同性愛者に対する描写が可能になり、またアカデミズムの世界でも、フェミニズム、ゲイ・リブ、クィア理論などのジェンダーに関わる新しい理論が一気に紹介された。その結果、1990 年代に、「同志」を書く文学作品が各文学賞の受賞作の中に見られるようになり、「同志文学」というブームが一気に花開いた。

それでは「同志文学」とは、一体どのようなものだろうか。「同志」を描くものなのか、あるいは「同志」が描くものなのか。現実社会の人間にせよ、文学作品の登場人物や語り手にせよ、性自認、性的指向、体型、容貌ないし気質など、セクシュアリティやジェンダーに関わる要素は、「男」と「女」あるいは「同性愛」と「異性愛」という形のみでは分類しにくいものである。また「同志」たちは社会的に抑圧される不利な位置にあるために、自分自身のアイデンティティを公開——つまり「カミングアウト」することを憚り、結果的に同性愛的な感情を直接表現することができないことも多かった。一方、社会の進歩に伴い、近年ではカミングアウトする作者も多くなっており、そうした彼女／彼の作品は必ずしも性的マイノリティに関わる内容を描く訳ではないものの、その作品の中に「同志」の視点から見た世界観を読み取ることもまた可能なはずである。また非当事者やカミングアウトしていない当事者も当然、「同志」を描くことができ、「同志」に対する認識を読者と共有することができる。

以上の状況を踏まえ、『同志文学史——台湾的発明』（2017）などの専門書を出版し、自身もオープンリーゲイである重要な作家・紀大偉は、「同志文学」とは「同

³ 許維賢『從豔史到性史：同志書寫與近現代中國的男性建構』（桃園市、中央大学出版社、台北市、遠流）、27 頁。

志」を感じ取れるもの⁴」であるという「暫定的な定義」を下しており、またそれは作家や作品だけではなく、読者の意識的な「同志」についての読みをも要求するものであるとしている。このような定義はおそらく「同志文学」の読者と作家たちの理解の公約数であり、まさに「同志」というアイデンティティと「同志文学」というジャンルの定義の曖昧模糊とした状況を説明するものである。また同時に、現実社会よりも遥かに強い文学世界の包容力を示したものであるとも言えよう。

時代状況を考えると、「同志」が性的マイノリティの呼称として定着したのは1980年代後半であるが、「同志」を感じ取れるもの」は、すでに1950年代に現れており、また日本統治期末期の1940年代にも、楊千鶴「花咲く季節」や巫永福「慾」など、同性愛者的な感情や欲望が見られる作品がすでに出現していた⁵。さらに、紀が「多くの同志文学とは見なされていない作品も、台湾文学の発展の過程において、知らぬ間に一般人の同性愛者についての認識、理解、そして想像を助けてきた」⁶と述べているように、検討すべきテキストの量が、従来の認識よりも多いことに気を配る必要がある。ただし本稿では、まず広く認識されているカノンの作品について考えていきたい。

0.2.2.罪の子の王国で：白先勇『孽子』の意義

台湾の「同志文学」を語るとき、何よりもまず『孽子』という名作を創作し、のちの「同志文学」に多大なる影響を与えた白先勇（1938-）から始めなければならないだろう。

1983年に刊行された白先勇の長篇小説『孽子』は、大きな反響を呼び、のちに映画、テレビドラマ、舞台劇に改作されても好評を博し、中国語圏の「同志文学」のカノンとなった。時は1970年、中国大陆から撤退してきた下層軍官の父と台湾人の母の間に生まれた主人公・李青は、高校生のときに学校の職員との性行為が見つかり、退学処分を受ける。彼は家を追い出され、男性同性愛者が出会いを求める場所である台北新公園（現・二二八和平公園）へと向かう。するとそこにいたのは、年齢、職業、エスニシティ、経済力の異なる、自分と同じく男に性的欲望を抱く男たちであった。そしてそこから、一人のゲイ少年の社会的冒険が始まる。彼の公園についての語りは、以下のような言葉から始まる。

⁴ 紀大偉『同志文学史：台湾的發明』（台北、聯經、2017）、57頁。

⁵ 紀大偉『同志文学史：台湾的發明』、108-110頁。

⁶ 紀大偉『正面與背影—台湾同志文学簡史』（台南市、国立台湾文学館、2010）、282頁。

原文：「許多並不能夠算得上同志文学的文本，在台湾文学發展的過程中卻有意無意地幫助社會大眾認識、瞭解、想像同性戀。」

我々の王国には闇夜があるだけで、白昼はない。夜が明けるや、我々の王国はたちまち姿を隠す。極めて非合法的な国だからである。⁷

これはもちろん前述の台北新公園のゲイたちの世界だが、『孽子』の創作が始まったのが（実質上台湾を代表していた）中華民国が国連を脱退した 1971 年の前後であることを考えると、社会に排除されていく男性同性愛者たる「我々」の台北における悲惨な状況は、国際社会に排除されていく中華民国の境遇と重ねて考えることができる。

さらに、「我々の王国」に登場する人々には、白先勇のような外省人（終戦後に大陸中国から台湾に行った人）だけでなく、本省人（終戦より前に台湾に定住した漢民族）、原住民（漢民族より早く台湾に居住し始めたオーストロネシア系の先住民族）、さらに台湾人と日本人やアメリカ人との間の「混血児」（原文ママ）もいる。従って、銃を持つ父親に家を追い出されたゲイの子供は、中国を追い出された中華民国政府のように、植民地台湾の人々と手を繋ぎながら、新しい「王国」を作らなければならない、という読み方も可能である。

エスニシティ間の衝突が激しい時代の作品であることを考慮するならば、エスニシティの壁を越えて、ジェンダー的弱者がお互いに助け合うというユートピア的な思想を示唆している『孽子』は、実は同性愛者のための作品であるだけでなく、亡国の憂いに悩まされている台湾にとっても寓話的な作品である。

だが白先勇はなぜ戒厳令下にある台湾で、このような同性愛者の解放に前向きな作品を書けたのだろうか。それは彼が同性愛者が比較的に自由に生活できるアメリカと日本で見聞したことがあるからだ。彼は 1960 年代にアメリカに赴き、定年退職するまでカリフォルニア大学サンタバーバラ校にて教鞭をとっており、アメリカのゲイ・リブ運動に影響されたということは十分に考えられる。一方で、彼は 1970 年に来日した際に東京・新宿のゲイタウンなどを見学したこともあり、その見聞の一部をそのまま『孽子』のなかで綴っていたのであろうこともまた推測される。

『孽子』の成功は、同性愛者を描写する手法を更新しただけでなく、歴史問題、水商売、「混血児」問題、貧困問題、海外への密入国、性伝染病など複数の社会問題を取り上げ、読者と共有することで、のちの「同志文学」だけではなく、台湾文学全般的に影響を与えたところにある。

0.2.3. 自死するレズビアンたち：邱妙津の影響力

レズビアンの文学作品については、邱妙津による作品が、1990 年代後半から現在に至るまで絶大な影響を及ぼしている。1995 年に 26 歳の若さで他界した彼女が残した作品

⁷ 白先勇著、陳正醒訳『孽子』（東京、国書刊行会、2006）、13 頁。

には、自伝的要素の強い名作『ある鰐の手記』（原題「鱷魚手記」、1994）、『モンマルトルの遺書』（「蒙馬特遺書」、1996）などがある。主人公とその周りの人物は、自分のジェンダー観や純粋さを求める恋愛観が社会と相容れずに深い孤独と憂鬱に陥り、自傷ないし自死によってその苦しみを解消しようとする。邱妙津本人が留学先のパリで自殺を遂げたこともあり、その後のレズビアン文学には、憂鬱や自傷行為をモチーフとするものが多く見られた。レズビアンであることを公言している作家李屏瑤が、「レズビアンが自殺しない小説を書きたい」⁸と自分の小説『向光植物』（2016）の帯で宣言したのも、そういった状況に立ち向かう姿勢の表れであろう。

ただ、邱妙津が世界との繋がりを絶ってしまう前に、レズビアンとして社会と繋がろうとしていたことも作品から窺える。前述『ある鰐の手記』では、主人公の大学生のレズビアンとしての苦悶が描かれる。時は戒厳令が解除されて間もない1990年前後、名門・国立台湾大学に入学した「拉子」は、異性愛社会に絶望しか感じず、女性の友人たちとの恋愛関係に苦しむ。「拉子」だけではなく、女性の友人たち、ゲイや両性愛者の友だちも、性と恋の苦悶に苛まれて運命の輪を狂わせる。一方、「拉子」は学校内の政治系サークルに参加したり、友人たちと明るいジョークを交わしたり、時にはユーモアを混ぜながら社会や国家政治に対して痛烈な批判をしたりしている。

『ある鰐の手記』では、個人の内的苦痛が延々と描写されるが、性的マイノリティの問題と（異性愛者が牛耳っている）国家、政治との関係性もまた強く示唆されており、そこには自己愛的だけではなく他の社会的弱者と連帯する意欲も読み取ることができる。このような内的苦痛と、社会に繋がろうとする希求の巨大なギャップは、結局主人公たちに苦痛をもたらすが、この作品は単に一人のレズビアンの文学作品であることを越えて、「同志文学」のカノンとして性的マイノリティ、そして非当事者の読者にも広く読まれ、時に引用され、想起されるようになった。「同志文学」というジャンルが複数のイシューを共有し、当事者と非当事者を「同志」にする力があることがここからもわかる。

いっぽう、『ある鰐の手記』の冒頭文から、日本の影響が見とれる。卒業証書が風に飛ばされた主人公は、まるで揶揄うように、人々に声をかけられる。

「来る時に、何かおもちゃ持ってきてくれない？」と鰐が言う。

「いいさ。僕が縫ったお手製の下着を持って行ってあげよう。」と太宰治。

「世界一美しい額縁というのはどうだね。」これは三島由紀夫。

⁸ 李屏瑤『向光植物』（桃園市、逗點文創結社、2016）、帯。

「ボクの早稲田の卒業証書のコピー百枚をキミのトイレに貼るってのはどうかな。」と村上春樹。⁹

太宰と三島は自死しており、そして三島は言うまでもなく同性愛者作家として有名で、邱妙津はしばしば小説のなかで言及している。村上春樹は、『ノルウェイの森』でレズビアンとの恋と自死を描いたことがあり、中国語圏のレズビアンの当事者に影響を与えていたとされている。邱妙津が自分の最初の長編小説の冒頭でこのような引用をしていることから、彼女自身はある程度台湾で翻訳された日本文学に影響を受けたことがわかる。

0.2.4. トランスジェンダーの不在

このような流れに対して、「LGBT」という言葉のうち、唯一性的指向ではなく性自認に関わる「T」、つまりトランスジェンダーについての描写は数が少ない。

1970年代以来、トランスジェンダー的な描写に富む日本のサブカルチャー作品や、吉本ばなな『キッチン』などの文学作品が大量に台湾に紹介され、愛読されてきた。それにもかかわらず、一部の演劇の異性装俳優を描く作品とSF系作品以外、トランスジェンダーを描く作品は非常に少ない。一番有名なトランスジェンダーの小説の登場人物はおそらく、呉継文『天河撩乱』（1998）における性転換を行なった、主人公の「伯母」であり、その描写の一部は日本語で読むことができる¹⁰。日本への留学経験を持つ呉継文は、少年愛や両性具有などをテーマに作品を書く須永朝彦に影響を受けつつ、吉本ばななの初期作品を台湾に紹介した翻訳者でもあり、もっとも日本文学の影響を受けているユニークな作家である。

確かに、台湾の「同志運動」には、トランスジェンダーの当事者が顔を出す場面が少ない。もちろんトランスジェンダーも尊重されるべきだと考えられ、「同志運動」の団体にも当事者が存在している。しかし2003年に「GID特例法」¹¹を制定し、テレビには一部のトランスジェンダーの芸能人が見られ、ある意味で「容認」されている日本に対し、台湾の社会における認知度はまだ低く、スティグマも強いいため、公に発言できる人が少ない。そのような現状は、まさに文学作品の世界にも如実に反映されている。

⁹ 邱妙津著、垂水千恵訳『ある鰐の手記』（東京、作品社、2008）、7頁。なお同書では「額縁（原文：畫框）」の訳は「書架」とされているが、誤訳である。

¹⁰ 佐藤普美子訳「天河撩乱：薔薇は復活の過去形」、許佑生ほか著、池上貞子ほか訳、白水紀子編『台湾セクシュアル・マイノリティ文学3 新郎新“夫”（ほか全六篇）』（東京、作品社、2009）所収。

¹¹ 平成15年7月16日法律第111号。全名は「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」。

台湾の「同志文学」からも影響を受けてきたマレーシアの華人系の「同志文学」では、トランスジェンダー的な表象が比較的多く、内容も豊かである¹²。この点は東南アジアという地域のジェンダー文化の多様性を反映していると言えるだろう。

0.2.5.日本へ越境する「同志文学」

「同志文学」というジャンルはすでに台湾文学と中国語圏文学において重要なキーワードになっているが、更に驚くべきことに、同ジャンルは越境して日本にも渡ってきている。

2017年、台湾人女性作家李琴峰は「独舞」（のち『独り舞』に改題）で群像新人文学賞の優秀作を受賞した。「独舞」は日本在住の台湾人レズビアン半生の半生を描いた作品で、作中では邱妙津、陳雪ら「同志文学」のレズビアン作家に言及している。また李琴峰はインターネットで漢詩の創作も発表しており、小説の中にも自作の漢詩を織り込んでいる。李琴峰は『独り舞』の出版を記念して、次のような詩を詠んでいる。

誌小説獨舞付梓二首 之二

未有白翁蒼浩筆、 未だ 白翁の 蒼浩たる筆有らず、
也無邱女冷纖魂。 また 邱女の 冷纖たる魂も無し。
孤琴偶得周郎顧、 孤琴 周郎の顧みるを 偶に得たれば、
漢柱和絃究道源。 漢柱と和絃もて 道源を究めん。¹³

この詩は、中国語圏文学の影響を受けながら日本語で書かれた自分の作品が、日本で知音を得たことに対する感慨の情を述べたものだと考えられるが、その中の「白翁」と「邱女」は、明らかに前述の白先勇と邱妙津を指している。後述するが、李琴峰自身は作家として積極的に日本のLGBT運動に参加しているところから、日本語で創作を行っているが、その本質はやはり台湾「同志文学」に影響を受けているのだと言えよう。

また、同じく2017年に短歌研究新人賞を受賞した歌人小佐野弾は、最初のオープンリーゲイの受賞者であると報じられているが、その数年前に実業家としてゲイであることを公表し¹⁴、台湾プライドパレードに対する支援活動を行なっている。アクティビスト

¹² 2018年、マレーシア華人系作家楊邦尼氏を電話で行ったインタビューより。なお、マレーシア華人系作家の文学誌『蕉風』第512期（2018年6月号）は全誌「トランスジェンダー小説特集」であり、台湾の文学雑誌ではほとんどトランスジェンダーをテーマとする文学作品が見当たらない。

¹³ 李琴峰のブログによる。https://note.com/li_kotomi/n/n4152038acae4、2018.7.13.、最終閲覧2020.7.1.

¹⁴ 楊佳嫻編『2019 臺北詩歌節詩選 牆與啄木鳥』（台北市、台北市文化局、2019）、15頁。

の一面も持つ小佐野のこれまでの作品には、直接的には台湾の「同志文学」との影響関係は見当たらない。しかし台北在住の彼が「革命を夢見た人の食卓に同性婚のニュースはながれ」¹⁵などと詠むことが、台湾の同志運動と無関係であるとも言い難い。小佐野はのちに『車軸』で小説家としてもデビューしたが、主人公の女性を中心とする三人の関係は台湾の同性婚推進派が唱えている「多元なる家族」の概念にも近く、またこの三人の関係を触発するのが主人公の友人の台湾人女性であることも、作者が台湾で受けた影響を象徴しているのかもしれない¹⁶。

これらの作品は、「同志文学」の連帯の思想が言語の壁や国境をこえて日本に伝わっていることを物語ると同時に、その思想が日本の小説、漢詩や短歌というジャンルにも伝わったことを証明している。一方で前述の通り、台湾の「同志文学」は、もともと日本に影響を受けたところも多く、1990年代以前、言論自由がほとんどない東アジアにおいて唯一自由自在に性的マイノリティを語ることでできた国は、日本であったと考えられる。日本から台湾の「同志文学」を考えてみても、やはりこのような事実に向けることはできない。

0.3.本論文の問題意識と章立て

前述したように、台湾同志文学というジャンルは日本との関係性が非常に複雑であるにも関わらず、これまでの先行研究のうち日本に言及したものは極めて少ない。また言及がなされる場合でも、日本は「可視性が低い」¹⁷と断言されたり、あるいは「東方」についての描写¹⁸の一部だと見なされたりしている。欧米の影響以外だと、近代中国の女性の同性間における性的欲望¹⁹や近代中国の男色²⁰との関係には注目が集まっているのに対し、日本との関係については、垂水千恵が邱妙津作品と安部公房、村上春樹作品の関係性²¹、そして紀大偉の小説と大島渚の映画の関係性²²についての研究を提出しているものの、これまで系統的な研究はなされていない。しかし、終戦まで五十年も台湾を植

¹⁵ 楊佳嫻編、前掲書、20頁。

¹⁶ 小佐野弾『車軸』（東京、集英社、2019）

¹⁷ 紀大偉『同志文学史：台湾的發明』、100頁。

¹⁸ 曾秀萍『台湾小説中同志／跨性別書寫的家国想像』（台北市、国立政治大学中国文学系博士学位論文、2012）、137頁

¹⁹ Tze-lan D. Sang, *The Emerging Lesbian: Female Same-Sex Desire in Modern China*, Chicago: University of Chicago Press, 2003

²⁰ 許維賢、前掲書。

²¹ 垂水千恵「邱妙津作品における「鰐」という表象の源泉をめぐって—台湾現代文学における日本文学の「引用」—」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』20号（2012）、1-15頁。

²² 垂水千恵「紀大偉は如何に大島渚を受容したか—儀式を中心として—」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』21号（2013）、53-71頁。

民地として統治し、戦後も様々な文化を台湾に輸出してきた日本が、性的マイノリティの文化という文脈においては欠席するというのは、いかにも不自然である。

本論文では前述した台湾「同志文学」と日本の複雑な関係性に目を向けながら、四人の作家の作品を例として、日本との関係性と、これからの「同志文学」の発展性について考えていきたい。

第1章「白先勇『孽子』における日本表象：「同志文学」における多文化共生」は、「同志文学」のカノンとされてきた白先勇『孽子』（1983）における「日本」表象について分析する。

第2章「日本にいる台湾「同志」：呉継文『天河撩乱』における日本描写」は、台湾の90年代「同志文学」作家の中で日本から受けた影響が最も強い呉継文の小説『天河撩乱』（1998）を中心に、その性的マイノリティの人物設定や日本に関する描写を分析する。

第3章「日本語の「台湾同志文学」の誕生：李琴峰『独り舞』論」は、前述の李琴峰のデビュー作『独り舞』（2017、単行本は2018）における、邱妙津と頼香吟の作品を中心とした台湾の「同志文学」関連作品の影響を分析し、同作品の「同志文学」的側面、および同作品が日本（語）文学に与え得る影響とその可能性について論じる。

第4章「マレーシア華人系「同志文学」を考える：楊邦尼「毒薬」の「当事者性」論争を手掛かりに」は、マレーシアの華人系作家楊邦尼の、文学賞を受賞したエッセイ「毒薬」（2010）に関わる論争を取り上げる。ゲイとHIV／エイズに関する話題を扱う際、台湾とマレーシアという異なる場所ではどれほどの差異が生まれるのか、そしてマレーシア華人系文学と「同志文学」という二つのマイノリティの文学ジャンルはお互いにどのような問題を照らし合わせるのかという点について検討し、また合わせてその日本との共時性についても考えてみたい。

終章では、各章の議論を通じて浮かび上がった問題を整理したうえで、「ハブとしての台湾同志文学」という概念を提示する。

第1章 白先勇『孽子』における日本表象：「同志文学」における多文化共生

1.1.1.序言

序章で述べたように、ゲイやレスビアンは1950年代の時点ですでに中国語の純文学文壇に登場している。1987年の戒厳令解除を経て、1990年代半ばに入ると、同性愛者向けの雑誌の発刊、BBS（インターネット掲示板）における同志文学の創作も盛んになり、セクシュアル・マイノリティを題材とした小説が主要な文学賞を受賞するようになった²³。紀大偉がこの時期を「同志文学の発展期」として位置づけたのは、同性愛者に関する大量の作品が発表されたからだ。

曾秀萍によれば、1990年代半ば以後から21世紀初頭にかけて、「同志文学」において「西洋化」というブームが起こった。それはグローバル化、資本主義化やデジタルメディア、映像メディアなどの影響を受けつつ、精神的にはアメリカのクィア理論に依拠し、空間的には世界のメトロポリス（特にニューヨーク）を異国のユートピアとして想像するものである。そしてこのようなブームの中では、「東方への転向」というもう一つの叙述スタイルも発展し、呉継文の長編小説『世紀末少年愛読本』と『天河撩乱』がその先駆けに当たると、曾は主張している²⁴。ここで曾がいう「東方への転向」とは、呉継文『世紀末少年愛読本』（1996）と『天河撩乱』（1998）における「中国的男色の再創造」、「アジアと海洋への視野の展開」、「仏教的時間観念に基づいた弱者への関心」²⁵などを指す。

「中国的男色の再創造」というのは、おそらく『世紀末少年愛読本』における清代男色小説『品花宝鑑』の改作を指しており、また「仏教的時間観念に基づいた弱者への関心」というのも、二作共通の仏教的要素からたやすく窺える。これらに関してももちろん未だ論議すべき箇所は多いが、ここで注目すべきところは、「アジアと海洋への視野の展開」である。この点について、曾は海や湖のイメージの多用や、舞台が大陸、日本、台湾の島々に設定されていることを挙げている。しかし実際に『天河撩乱』を繙くと、その主な舞台となるのはやはり台湾と日本である。

ただし日本が物語の背景、もしくは重要な要素として台湾の「同志文学」に用いられた例としては、有名な作品だけでも、前述の白先勇『孽子』（1983）、朱天文『荒人手記』（1995）などがある。「同志文学」の先駆的な作品である長編小説『孽子』には、すでに日本についての描写がある。主人公の知人「小玉」は日本へ行く「サクラ・ドリーム」を夢見ており、物語の終盤にようやくその夢を叶え、日本の華僑「林様」を探し

²³ 紀大偉、『正面與背影—台湾同志文学簡史』、282頁。

²⁴ 曾秀萍、前掲書、137頁。

²⁵ 曾秀萍、前掲書、172頁。

に横浜へ向かう。主人公たちが働くレストランも、インテリアから女中の化粧まで日本風である。また『荒人手記』は男性同性愛者の物語であるが、日本的要素が多く使われ、舞台の一部にも東京が書き込まれている。その他、紀大偉や洪凌が創作した「クィア SF 小説」においても、舞台を日本にしたり、明らかに日本の漫画やアニメの世界観の影響が見て取れたりする作品が散見される²⁶。以上のことから明らかなように、呉継文の作品はテキストの中に「東方」の要素を用いた「先駆け」とは言えず、「同志文学」における日本的要素は、それ以前から存在したのだと考えられる。

1.2. 『孽子』について、そして本章の問題意識

以上の文脈を踏まえ、まずは「同志文学」のカノンとされてきた『孽子』における日本表象を分析してゆきたい。白先勇（1937-）の代表作『孽子』²⁷は、「同志文学」のみならず、戦後の台湾文学を語る上で欠かすことのできない作品である。

現在では中国語圏における「同志」という言葉は、性的マイノリティ（LGBT）を指す総称になっているが、『孽子』が創作された 1970 年代後半から 1980 年代前半の時点では、同性愛者を「同志」と呼称することはまだ一般的ではなく、もちろん「同志文学」という言葉も存在していなかった。これらの語が広く文化界で使われるようになったのは 1980 年代後半であり、「同志文学」が文学的なブームになったのはそのあとの 1990 年代であった²⁸。同性愛者をテーマとする小説作品はすでに存在していたが²⁹、1978 年に連載が始まり、1983 年に出版され、さらに映画、テレビドラマ、舞台劇へと改

²⁶ 例えば、紀大偉「儀式」（1993）は明らかに大島渚の同名映画『儀式』の影響を受けており、洪凌『宇宙のオデッセイ』（『宇宙奥狄賽』、1995）は本文の前に日本のマンガ単行本と同じように登場人物の設定とイラストを寄せ、さらにイラストと表紙の絵は日本の少女漫画に深く影響を受けた台湾のマンガ家高永が担当している。紀大偉「儀式」に関しては、垂水千恵「紀大偉は如何に大島渚を受容したか—儀式を中心として—」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』21 号に詳しい。

²⁷ ここでは白先勇『孽子』初版（台北市、遠景出版、1983）を参照している。現在最も広く流通しているのは允辰文化の「新版増修一版」（台北市、允辰文化、新版増修一版 1990）である。両者の間には内容の変動が若干あるため、変動する部分については引用の中で説明する。また日本語訳の引用は、白先勇著・陳正醒訳『孽子』（東京・国書刊行会、2006）によるもので、そのほかに英訳本 Pai Hsien-yung, *Crystal Boys*, Translated by Goldblatt, Howard. San Francisco: Gay Sunshine Press, 1990 も参照している。

²⁸ この点については拙論「日台間における性的マイノリティ文化の相互交渉—台湾の「同志文学」を手がかりに」陳來幸・北波道子・岡野翔太編『交錯する台湾認識』（東京、勉誠出版、2016）、154-156 頁にて言及したことがある。「同志」という言葉の起源とそれに関連する議論については、許維賢『從豔史到性史：同志書寫與近現代中國的男性建構』（桃園市・國立中央大學出版中心、2015）、20-30 頁を参照のこと。

²⁹ 紀大偉『同志文學史：台灣的發明』（台北、聯經、2017）、36 頁。

編され、幾度も社会現象を巻き起こした本作は、今でも台湾社会における性的マイノリティの当事者に対する考えに影響を与えている³⁰。

またこれだけではなく、『孽子』はしばしば台湾へと逃れた中華民国のメタファーとしても理解される。国家に疎外された男性同性愛者の運命とは、まさに1971年に国連を脱退し、1972年に日本と国交断絶、1975年にアメリカ合衆国と国交断絶し、国際社会に疎外されてきた中華民国の運命そのものである。小笠原淳も、『孽子』に関する研究動向は、主に「中国の家父長制がもたらす父子の確執や語り手の少年李青らが依存するセクシュアル・マイノリティグループの様相、「異国」離散及びエスニック・アイデンティティの問題」に集中しており、台湾文学の文脈における「空間性」の討論は比較的小さいことを指摘している³¹。

ただし本論文の着眼点は、これまで注目されていなかった「日本」の表象にある。

『孽子』は白先勇の作品において、唯一日本的要素が確認できる作品だが、1937年に中国の広西に生まれ、1952年にようやく台湾にやって来た白先勇は、当然ながら台湾における日本の植民地統治を体験したことがない。それではこの作品における日本的要素は、写実主義的な意義のほかに、どのような象徴的意義を持っているのだろうか。『孽子』の日本的要素がどのような台湾像を投影し、どのような「空間性」を作り出し、同性愛者の主人公（そして作者）の存在にどのような意義を獲得させたのかが、本章の問題意識である。

1.3. 白先勇と『孽子』

1.3.1. 白先勇の生い立ち

まず白先勇の経歴を紹介しよう。白先勇は1937年に中華民国広西省（現在の中華人民共和国広西チワン族自治区）南寧で生まれた。父親は中華民国の軍閥である新桂軍の名将・白崇禧（1893-1966）である。太平洋戦争期に生まれた彼は、戦争期から戦後の国共内戦期にかけて中国各地を転々とし、香港で中学校教育を受け、1952年に台湾に渡る。名門の公立男子高である台北市立建国中学を卒業した後は台南の国立成功大学水利工程学科に入学したのち退学し、国立台湾大学外国語文学科に入り英米文学を学ぶ。文学創作に関しては夏濟安に師事し、在学期間に同級生たちと月刊誌『現代文学』を創刊、自身も多数寄稿していた。1963年に母親が他界したあと渡米し、アイオワ大学（University

³⁰ 白先勇『孽子』が改編された際の性的マイノリティ言説の変化については、八木はるな「白先勇『孽子』の映画・テレビドラマ・舞台劇への改編にみる、台湾セクシュアル・マイノリティ言説の変容」『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第19号（東京・東京大学文学部中国語中国文学研究室、2016.11）が詳しい。

³¹ 小笠原淳「白先勇『孽子』と台北—移ろいゆく都市の記憶」緒形康編『アジア・ディアスポラと植民地近代 歴史・文学・思想を架橋する』（東京、勉誠出版、2013）、292-293頁。

of Iowa) で修士号を取得した後、カリフォルニア大学サンタバーバラ校 (University of California, Santa Barbara) で中国語と中国文学を教えた。定年退職した後は、父親に関する回想録などを書く傍ら、中国の伝統戯曲である崑曲の復興にも力を入れている。

白先勇の文学創作は高校時代に始まったが、本格的な創作と発表は、やはり『現代文学』の創刊と投稿以降のことだと考えられる。唯一の長編小説『孽子』を除くと、残った短編小説は「台北人」と「^{ニューヨーカー} 紐約客」という二つの作品群に大きく分けられる。「台北人」では、国共内戦後に中国大陆から台北に逃げた人々、つまり「外省人一世」が、大陸にいた際の栄光を偲ぶさまが描かれる。また「紐約客」は、台湾からアメリカに留学し、アメリカに定住するようになる「外省人」の物語である³²。この二つの作品群は、中国から台湾へ逃げ、さらにアメリカに移ったという作者白先勇の経歴に重なるものである。

1.3.2.『台北人』におけるエスニシティの問題

1971 年に出版された『台北人』³³は、14 の短編小説を収録している。前述したように、各作品の主人公は、全員台北に逃亡した中国大陆出身者である。逃亡先での不安の具現化のように、作品中に登場する「本省人」や台湾の風土は、ほとんど主人公たちに不安を感じさせる存在³⁴、ないし主人公が対抗する対象³⁵であり、また台湾の景色も往々にして悲惨な現実を象徴している³⁶。このような描写は当時の外省人の心境を物語るものであり、本省人と外省人のエスニシティの対立が表れたものだと見做すことができる。

しかし『台北人』収録短編の中にも、人々がエスニシティの壁を乗り越えて、お互いに助け合うような作品が見られる。例えば「最後の夜 (原文：金大班的最后一夜)」において、上海出身の主人公・金兆麗がダイヤモンドのリングを苗栗出身の客家人ダンサー・朱鳳に贈るのは、彼女を田舎に帰らせ、香港の華僑学生との私生児を生ませるため

³² 陳芳明「第十五章 一九六〇年代台灣現代小説的藝術成就」『台灣新文學史』（台北、聯經出版、2011）、387 頁。

³³ 本論文では、白先勇『台北人』晨鐘出版社第 15 版を参照している（1971、第 15 版 1976）。

³⁴ 「血のように赤いつつじの花 (原文：那片血一般紅的杜鵑花)」において、主人公・王雄をからかう女性・喜妹など。白先勇「那片血一般紅的杜鵑花」『台北人』、82-83 頁。

³⁵ 「永遠の尹雪艷 (原文：永遠的尹雪艷)」において、尹雪艷がもたらした不幸のために夫を呪い殺された徐壯図の夫人。白先勇「永遠的尹雪艷」『台北人』、10-17 頁。

³⁶ 「遊園驚夢」では、宴会の最後に女性たちは椰子の木を「泣かせた」風の中で夢から覚める（〈遊園驚夢〉『台北人』195 頁）。また「血のように赤いつつじの花」には、主人公・王雄が台湾人女性・喜妹が台湾語の歌を歌い始めた途端に、すぐその場から離れるという場面もある（「那片血一般紅的杜鵑花」『台北人』83 頁）。

である³⁷。また「孤恋花」において、同じく上海出身の雲芳は、薬物乱用と悲劇的な運命から宜蘭県蘇澳出身の妓女・娟娟を救おうとするが、それは結局叶わない³⁸。「満天に輝く星（原文：滿天裏亮晶晶的星星）」では、中国大陆の外省系、台湾の漢民族、原住民（原文：山胞）など、出身は異なるが同じく男性に性的興味を持つ男性同性愛者たちが、台北新公園（現・二二八和平紀念公園）にて交流する場面が描かれる³⁹。『台北人』の14の短編において、外省系の主人公はほとんど台湾の風土や本省人と対抗的な関係にあるが、これらの三作だけでは、本省人がポジティブに描写され、本省人たちと主人公たちはエスニシティの間の衝突という時代背景を超えて、お互いに助け合うことが可能となっている。またこれらの三作品における主人公は、いずれも社会階層の高くない性的産業の労働者（「永遠の尹雪豔」や「遊園驚夢」における女性たちとは対照的）である。そして「孤恋花」では女性同性愛者の恋が描かれ、「満天に輝く星」では男性同性愛者の間の交流が描かれる。性的少数派とセックスワーカーなど性的弱者が、エスニシティの壁を越えて助けあえる、という作者の考えも窺える。

また1971年に発表された「満天に輝く星」がその後リライトされ、その12年後に『孽子』として出版されたという事実から、『台北人』の三作品のポジションを確認することも、『孽子』を理解するためには役に立つのではないかと考えられる。

1.3.3.『孽子』の構造とあらすじ

『孽子』は「放逐」（2章からなる）、「我々の王国で」（原文：在我們的王國裏、33章）、「安樂郷」（30章）、「青春鳥たちの旅立ち」（原文：那些青春鳥的行程、2章）という4つの部分に分けられる⁴⁰。「放逐」と「我々の王国で」では、本省人の母親と四川出身の軍人の父親を持つ「私」こと男子高校生の「阿青」（本名・李青）が、学校の職員と「猥褻行為」を行なったために退学処分を受けて父親に家を追われ、台北新公園にある「我々の王国」（性的な誘惑を求めるゲイの集散地）へとたどり着き、若い友達と一緒に体を売りながらも⁴¹、最終的にはトラブルのために公園を離れなければならないまでが描かれる。「安樂郷」はその物語の続きであり、若いゲイたちは年長の「楊師範」に率いられ、台北・南京東路の裏道にあるゲイバー「安樂郷」で働くようになるが、新聞記者による「遊妖窟」というタイトルの猟奇的な記事により、店は休業へと追いこまれ、若い「青春鳥」は再び四散しなければならない。そして最後の「青春鳥たちの旅立ち」では、手紙の形式により若い「青春鳥」のその後の話が続けて

³⁷ 白先勇「金大班の最後一夜」『台北人』63-67頁。

³⁸ 白先勇「孤戀花」『台北人』117-131頁。

³⁹ 白先勇「滿天裡亮晶晶的星星」『台北人』159-166頁。

⁴⁰ 允晨文化版では、これら4つの部分の標題前にそれぞれ「第一部」～「第四部」という表記が小さい字で記されている。

⁴¹ 「在我們的王國裡」第4章、34頁。

語られる。そこには日本に密入国して実父を探す人もいれば、窃盗罪で刑務所に行く人もおり、そうした中で主人公阿青は公園へと戻り、自分より若い「青春鳥」の世話をするようになる。本書は1976年から連載が始まり、1983年に単行本として出版されたが、その後作者の白先勇は1988年のインタビューにて、自分が同性愛者であることを告白した⁴²。そのことから、物語の内容はある程度自身や他の当事者の体験に基づいたものであることが想像される。

前述したように、ゲイ文学のカノンとされてきた『孽子』に関する分析はすでに多くの蓄積があるので、ここからは作品における「日本」表象に的を絞って分析してゆくことにしたい。

1.4. 『孽子』における日本表象

1.4.1. 人的交流：日本華僑と台日「混血児」

これまでの『孽子』における人的交流に関する分析は、主人公の阿青と恋に落ちた登場人物・王夔龍のニューヨークの旅に集中している。小説に描かれたニューヨークのセントラルパーク（Central Park）と台北新公園は類似しており、またアメリカの大学で奉職していた白先勇自身とも関連がある。一方、日本に関わる人的交流はほとんど注目されてこなかった。まず以下の段落から見ていきたい。

「おお、こいつは桃太郎と言ってな、ご覧、どこか小林旭に似ておらんか？
こいつの父さんは日本人でな、フィリピンでの戦争で死んだのじゃ。容貌は端正じゃが、気性は火の塊のようだ。どうしてだかわからんが、こともあろうに西門町の『紅玫瑰』⁴³の美容師十三号と惚れ合ってしまった。二人は連れ立って台南まで逃げたが、十三号にはもともと親の決めた相手がおって、結局家の者が見つけて連れ戻し、無理やり結婚させた。結婚の当夜、桃太郎は祝宴の酒を飲みに行った。飲んで上機嫌になって、新郎と二人、差しでとことん酒を酌み交わした。ところがやつは祝宴が終わると、一人で中興大橋まで行って、身を躍らせるや淡水河に飛び込んだのじゃ。死体を引き上げることもできなかった。十三号は毎日淡水河のほとりに供養に行ったのじゃが、桃太郎はとうとう浮き上がってこなか

⁴² 蔡克健「訪問白先勇」『PLAYBOY』国際中文版1988年7月号、ここでは白先勇のエッセイ集『第六隻手指』（香港、華漢文化事業公司、1988）、268-290頁による。なお『孽子』初版の裏表紙にはすでに「作者の長い間の心境の記録」との記述が見られる。

⁴³ この理髪店の店名「紅玫瑰」は、初版では「百樂門」、允晨文化版では「紅玫瑰」となっている。「紅玫瑰理髮廳」は実在する台北西門町の老舗理髪店であり、現在もなお営業している（台北市万華区長沙街二段56号）。

った。みな、あの男の恨みが強過ぎたために、川底まで沈んでしまって浮かび上がることができないのだと言っておる……」⁴⁴

これは台北新公園に出入りしている年長のゲイのカメラマン「郭老」が、自殺したゲイ「桃太郎」の物語を阿青に話した段落である。「桃太郎」は台日の「混血児」で、顔は日本の大スター小林旭（1938-）に似ている。このような登場人物は、白の他の作品には見当たらない。

また阿青の大親友である「小玉」は、以下のように自分の生い立ちを説明している。

「（前略）俺は今までおやじの顔を見たことがないし、その男が誰なのかも知らない。俺の名字は王じゃない。王ってのはおふくろの姓だ。おふくろは俺に、父さんは日本の華僑で、名字は林、林正雄という名だと教えてくれた。その男には中島という日本名があって、お袋はそいつのことを『ナカジマ（原文：那卡幾麻）』って言っていた。俺の身分証には、父親の欄は『歿』と記してある⁴⁵。他人に『お父さんは？』と訊かれたら、『死んじゃった』とか『とうに死んだよ』とか答えて、全然気にしてないってふりをするんだ——」小玉は軽く肩をすくめた。「だけど俺は胸の内ですっとうろく思っている。あのバカヤローめは今どこにいるのかしらん？ 東京か？ 大阪か？ それとも太平洋に消えちゃったのか？ 当時、あの男は商売をしに台湾に戻ってきた。資生堂の化粧品のセールスをするためにな。やつは飲み屋に飲みに行って、東雲閣でおふくろと出会った——二人はそうして同棲し始めた。おふくろの話じゃ、おふくろはあのバカヤローめにまんまと一杯食わされたんだ。やつは日本に戻ったら、一か月以内におふくろを迎えにやってくるって約束したんだ。おふくろはもう俺を身ごもっていた。ところが、やつの東京の住所なんて、でたらめだった。出す手紙出す手紙、みんな送り返されてきた。（後略）」⁴⁶

日本でビジネスを展開している「華僑」（台湾出身であるかも知れない）が、台湾でビジネス活動を行い、水商売の場で台湾人女性と性的関係を持ち、子供を産ませる（そ

⁴⁴ 白先勇「在我們的王國裡」第9章『孽子』76頁。訳文は日本語版、103-104頁による。振り仮名は省略する。

⁴⁵ ただし、1965年以後の中華民国の国民身分証（第三版から）では、親が死んでもその空欄に「歿」とは書かない。ここでは「小玉」が大袈裟に言ったのだと考えるか、もしくは当時すでに海外にいた作者がこのことを知らなかったのだと考えるのが妥当だろう。

⁴⁶ 白先勇「在我們的王國裡」第12章『孽子』90頁。訳文は日本語訳、121-122頁による。ちなみに「東雲閣」は明らかに「日本風」の命名である（水商売の場の「日本」風情については後述）。

して見捨てる) というのは、おそらくありふれた話であっただろう。本作には、アメリカ駐在軍の軍人と台湾人女性の間で生まれた「ジョニー・ジュニア (原文: 小強尼)」も登場する⁴⁷。ここで注目すべきは、小玉自身も日本人に憧れを持っており、台湾で会社を経営する日本華僑「林様」に積極的に接して日本まで連れて行って貰おうとし、更に小説の終盤になると、父を探すべく、「林様」の助けなしに直接日本へと密入国までしているという点である。

白先勇の小説において、「台日混血児」、「日本華僑の子」、「日本人と恋に落ちる人」、「台米混血児」などの日本と関わったり、ルーツが複雑だったりする人物が登場するのは、『孽子』のみである。また台湾の原住民族に関しても、『孽子』とその前身である「満天に輝く星」に登場する「原始人」⁴⁸のみである。前述の通り、白先勇の同時期の作品において、本省人は往往にして外省人の主人公が嫌がる存在として描かれているが、『孽子』では彼のそれまでの作品には類を見ない複雑なエスニック・アイデンティティが見受けられ、また性的産業の労働者や消費者たちが常にお互いに助け合うさまも描かれている。

そして、白先勇小説における本省人のイメージが「外省人の嫌がる存在」から「助け合う存在」へと変化したことが、ちょうど彼が社会階層の高くない人々に関心を配った作品 (前述の『台北人』の三作品) と重なるという点からは、白先勇のエスニシティ、社会階層、ジェンダーなどの問題に対する考えを窺うことができる。優越感を抱く人々が『台北人』の他の作品において示した攻撃性、郷愁の感情、切なさとは対照的に、弱者たちのお互いに対する助け合いの気持ちは、前述の作品における感動的な恋と友情を完成させたのである。

1.4.2. 日本のエンターテインメントの要素

前の引用の「桃太郎」の物語では、郭老は語り初めるや否やすぐに阿青に写真の中の「桃太郎」は「どこか小林旭に似ておらんか」と聞いている。このことは、おそらく小林旭が当時の台湾のゲイの間では誰でも知っているスターであり、しかも「容貌端正」で好まれていたことを物語っている。

また、「日本華僑」の子供を自称する小玉と主人公・阿青の間では、以下のような会話が交わされている。

「『好色一代男』を見たことがあるか、阿青？」

「いいや、日本映画はほとんど見ない」

⁴⁷ 白先勇「在我們的王國裡」第4章、『孽子』35-36頁。

⁴⁸ 言うまでもなく今は「原住民」と呼称されている先住民族への差別が見られる。

「池部良が本当にかっこいいんだ！ 真っ白い和服を着て、桜の木の下に立って—俺、東京に行ったら、ああいう真っ白な服を着て桜の木の下で写真を撮りたい」

「お前が和服を着たら、マジ、浅丘ルリ子そっくりだと思うぜ」

「知ってるだろ、阿青。『好色一代男』は、おふくろが見に連れてってくれたんだ。おふくろは自分じゃ五、六回は見た。おふくろの言うには、資生堂の化粧品を売っていた俺のおやじは、和服を着ると、間違いなく映画の中の池部良にそっくりだったってさ。」⁴⁹

四川省出身の軍人の父親と本省人女性の母親を持つ阿青は「日本映画はほとんど見ない」と言うものの、小玉が自分の父親が池部良（1918-2010）に似ていると自慢げに紹介すると、彼はむしろ浅丘ルリ子（1940-）に似ているのだと皮肉を發することができると。「日本華僑」の父親と本省人の母親を持つ小玉はこれらの映画について阿青よりも詳しいと見え、彼の母親は驚くことに5、6回も映画『好色一代男』を見たことがあるのだと述べている。もちろん、池部も浅丘も増村保造監督『好色一代男』（1961）には登場していないのだが、ここからは日本の映画や俳優が、台湾本省系のルーツを持つ少年たちに共通の記憶であったことが見て取れる。

また、前述した小玉の母親が仕事をする飲み屋の名前は「東雲閣」、阿青の母親が男と駆け落ちして共に向かった先は「小東寶歌舞團」⁵⁰であり、ゲイバー「安樂郷」のミュージシャン「楊三郎」は「日本占拠時代」には有名だったとある⁵¹。また小玉が日本に密入国したあと（1972年前後）に阿青に書いた手紙には、「森進一は日本で今一番人気のある男性歌手で、ここのゲイ・バーの人たちはみんな彼のファンなんだ」⁵²という記述も見られる。これらの記述から明らかなように、日本のエンタメの要素は頻繁に小説の世界（における水商売の場面）に出現する。もちろん、これは白の他の作品では類を見ない特徴である。

1.4.3.水商売の風景：台湾と日本の対照

小説における水商売の場面も、注目に値する。小説の前半で、阿青は自分の性的交渉の場面について、次のように綴っている。

⁴⁹ 「在我們的王國裡」第22章『孽子』146頁。訳文は日本語訳、192頁による。

⁵⁰ 「在我們的王國裡」第5章、『孽子』47頁。下線は筆者による。

⁵¹ 「安樂郷」第3章『孽子』243頁。楊三郎は実在の人物だが、視覚の不自由な人物ではなかったと考えられる。前述の「孤戀花」『台北人』にも目の不自由な「林三郎」という登場人物がおり、小説の中で（楊三郎作詞作曲の）台湾語の歌「孤戀花」を歌っている。（白先勇「孤戀花」『台北人』、117-131頁参照）。

⁵² 「那些青春鳥的行旅」第1章『孽子』384頁。

万華で、円環で、三水街で、または中山北路で——あちこちのじめじめした袋小路にこそそと潜り込み、日本統治時代（原文：日據時代）から残されてきた、どす黒くまた腐り果てたここそこの旧式旅館の中にひらりと身を躲す。⁵³

また華僑の「林様」が宴会を開く中山北路のレストラン「梅田」に関しては、次のような描写がある。

梅田は、果たしてなかなかムードのある店であった。内装は和風（原文：東洋風）で、入り口に小さな橋がかかっている。橋の下には水たまりがあつて、水がさらさらと流れていた。橋の向こうには真正面に築山があり、（中略）四周の壁には扇形の壁灯が嵌め込まれ、赤い明かりがぼんやりと点って、仲居たちの笑顔がみんなうっすらと紅を塗ったかのように見えた。⁵⁴

店内のインテリアは「和風」であり、また女性店員が注文を受けるときには、「ハイ（原文：嗨）」⁵⁵と答えている。以上の描写から、この空間が、装置からサービスに至るまで、「日本」的風情を提供しようとしていることは明らかである（もちろんそれ本当の日本なのかという点は別の話である）。

また、名門の跡取りである王夔龍と阿青が二回目に性的関係を持つ場所と、阿青たちの世話をする傅老人（元高級軍人）が住むところは、両方とも「日本占拠時期」の屋敷である⁵⁶。国民政府が台湾に移ってすでに二十余年とは言え、権力を持つ人物は日本統治期と同じく台北の東にある日本式官舎に住んでいたものであり、都市空間は日本統治期から変わっていなかったと言える⁵⁷。

⁵³ 「在我們的王國裡」第4章『孽子』35-36頁。訳文は日本語訳、51頁より。

⁵⁴ 「在我們的王國裡」第13章『孽子』94頁、訳文は日本語訳、126頁より。

⁵⁵ 「在我們的王國裡」第13章『孽子』96頁。

⁵⁶ 王夔龍の父が残した住居は南京東路三段の裏道の「日本占領時代に建てられた」「古めかしい屋敷（原文：官邸）」である（「在我們的王國裡」第16章、『孽子』111頁、訳文は日本語訳、147頁）。傅老人の屋敷は松江路からほど近い、南京東路のとある路地の中にあり（この描写から前述王宅からは遠くない）、「それは和風の木造家屋で、建物はかなり古びていた」（〈安樂郷〉第2章、『孽子』231頁、訳文は日本語訳、296頁）。

⁵⁷ 阿青の母親が死ぬ前に住んでいた「南機場克難街」（現在の台北市万華区・青年公園近辺）のボロ屋敷も「日本が軍隊の駐屯に使っていたそうだ」（「在我們的王國裡」第6章、『孽子』51頁、訳文は日本語訳、73頁）とある。小笠原淳はこのスラムの描写は、如実にその様子を描写するだけでなく、「李青の母の終焉の地を都市の最底辺に設定することで、母子が背負った「罪孽」の痛ましさをその空間表象を通じて表現したのだ」と指摘している。小笠原淳、前引文、310-313頁。

一方で、現実として存在する日本はどのように扱われているだろうか。小玉はレストラン「梅田」で「林様」を接待する際、自分は東京の地図を持っており、道順を全部覚え、新宿の番衆町のゲイバー「一番館」の着物を着るボーイ達に会いたいのだと言う⁵⁸。ゲイバー「一番館」は実在せず、「番衆町」という地名も1978年の住居表示実施により現在では新宿区新宿五丁目の一部となっているが、当時は男性同性愛者の活動地域であった⁵⁹。この時の小玉はまだ日本に行ったことがないにもかかわらず、日本のゲイタウンの情報を入手できていたことがわかる。また、日本の伝統服である着物を着ることが、彼にとっては性的魅力を引き起こしていたこともわかる。

物語の終盤では、小玉は「父親を探す」ために日本に密入国し、阿青と手紙で連絡を続けている。彼の東京における「ゲイライフ」は以下の通りである。東京の中華料理店「大三元」でアルバイトする小玉が、最初に覚えた日本語は「塞股死」（「セックス」）⁶⁰であった。東京各地には百軒以上のゲイバーがあり、新宿歌舞伎町のゲイ達は「街じゅうをやたら飛び回って、警察なんか怖がっていないんだ。酒場でも踊ったりキスをしたり、何でもありだ」。横の新宿御苑では、「かくれんぼをすれば、やっぱり俺たちよりずっと好き勝手ができる」⁶¹。台北新公園では警察を避けねばならず、ゲイバーの中の雰囲気も比較的に保守的である。また阿青と関係を持っている王夔龍が体験したニューヨーク・セントラルパークのゲイライフでは、性的営みはできるとは言え、安全性も低く、警察に逮捕されたり、窃盗されたりする可能性があった⁶²。東京・新宿でのゲイライフは、日本語がほとんどできない小玉にとっても、とても安全で自由であり、台北やニューヨークよりもパラダイス的な存在であったことが伺える。

白先勇が『孽子』の日本語訳のために書いたまえがきでは、彼は1963年と1970年の2回、東京に行ったことがあり、2回目にはゲイバーで飲酒したことがあるとの説明がある⁶³。『孽子』の前身である「満天に輝く星」がその後間も無くの1971年に発表されていることを考えると、彼が自分自身とも関わる台北のゲイについての題材を描けるよう

⁵⁸ 「在我們的王國裡」第13章『孽子』102-103頁。

⁵⁹ ゲイタウンである新宿二丁目近辺の変遷については、砂川秀樹『新宿二丁目の文化人類学：ゲイ・コミュニティから都市をまなぐ』（東京、太郎二郎社エディタズ、2015）、208-210頁が詳しい。

⁶⁰ 「那些青春鳥的行旅」第1章『孽子』376頁

⁶¹ 「那些青春鳥的行旅」第1章『孽子』379頁。新宿御苑の一帯でゲイによる性的な行為が行われたのかについて、ゲイ向けの会員制雑誌『GREEN LETTER』14号（東京、アドニス経済研究所、1975）、2頁には、当時開放的であった明治神宮外苑の公衆トイレは男性が密かに性的営みを行うことのできるいわゆる「発展トイレ」であるとの記載がある。両者の地理的な位置関係を鑑みれば、外国人にとってその境界線は曖昧なものであったかもしれない。また当時は現在のように監視カメラがなかったため、深夜に新宿御苑に入りこみ性的営みを行うことができた可能性もなくはない。この点はLGBT蔵書家小倉東氏（ドラッグクィーン「マーガレット」）のご指摘による。

⁶² 「在我們的王國裡」第16章『孽子』111-112頁。

⁶³ 白先勇著・陳正醒訳『孽子』日本語訳、1-2頁。

になったことには、おそらく日本で滞りが関係していたのだと推測される。小玉が感じた「台北より面白く、自由で安全なゲイライフ」と言うのは、おそらく白先勇自身の感想でもあったのだろう。もちろん、白先勇も、東京の街にも台北と同じく、「寄る辺のない子供」がいることを知ってはいたのだが⁶⁴。

1.5. 『孽子』における「日本」の意味

ここまでは、『孽子』における「日本」関連要素を整理してきた。最後の小玉の手紙の内容を除いて、「日本」という要素は物語の中に直接登場するわけではなく、背景の一部として隠れており、時折背景から顔を出すのみである。そしてこれらの日本的要素は、白先勇文学においては、前述した通り『孽子』でしか見られない。よって、「日本」関連要素は、以下の意味を持っていると推測できる。

1.5.1. 歴史的意味

1937年に中国広西省に生まれた白先勇は、日本統治期の台湾を体験し得たはずがない。また本省人のように深く日本のエンターテインメントなどに接する機会もなかったと推測される。しかし小説における台北に関する描写からは、彼が当時の台北にまだ残されていた日本統治期の建物に注目していたことがわかる。また日本華僑、台日「混血児」、（男女問わず）日本人や日本華僑に恋に落ちる人々など日本に関わる登場人物たちは、外省人を描写の中心としてきた白先勇の作品の中にはほとんど登場しない人物である。これらの登場人物は、様々な同性愛者の姿を表象しただけでなく、さらに立体的に戦後台湾社会を物語るものでもあった。以上の描写からは、作者白先勇が戦後の台湾の歴史と文化のリアリティに正面から向かいあった形跡を見て取ることができる。

1.5.2. 日本からの文化の影響

日本からの文化の影響は戦後の中国国民党のいわゆる反日教育に抹殺されることなく、依然として台湾に輸入され続けていた。このことは戦後に流行っていた映画や芸能人などが登場人物の会話に現れることから窺える。事実、視野を東アジアまで広めてみても、日本が領土を拡張し始めた20世紀初頭から戦後に至るまで、国境線の変動は頻繁に起こったものの、文化の交流が中断したことはほとんどない⁶⁵。石計生によれば、日本統治期から1960年代までの間、西門町、大稻埕、艋舺ら「台北三市街」では、中国大陆（北京、上海）と日本からの歌謡曲、伝統劇、新劇などが同時に並存しつつ、台湾

⁶⁴ 白先勇著・陳正醒訳『孽子』日本語訳、2-3頁。

⁶⁵ 例えば、流行歌の東アジアにおける流動については、貴志俊彦『東アジア流行歌アワー』（東京、岩波書店、2013）を参照のこと。また流行歌の台湾における流動については、石計生『時代盛行曲：紀露霞與台灣歌謠年代』（台北、唐山、2014）を参照のこと。

のエンターテインメントに影響を与えており、そこでは戦後日本の文化も絶えず影響を与えていた⁶⁶。『孽子』前半において若いゲイ達が居住し活動するエリアもおおよそこの近辺か、橋を渡った先の「三重鎮」⁶⁷（現・新北市三重区）である。小説に登場する若いゲイたちのほとんどがエンタメに強く影響を受ける水商売に従事していることを鑑みれば、スターや歌謡曲などの存在意義はより強いものであると言えるだろう。

1.5.3.1970年代の「東京」の意味

東京のゲイ文化に関する情報は、小玉が日本に行く前に、主に日本と往来する人々（華僑の客）やエンターテインメントの情報がもたらした幻想であった。日本に密入国した後の彼は経済的には豊かではないとは言え、精神的には解放され、また人身の安全も保障された生活を送れるようになった。

東京の存在は、ここでは台北とニューヨーク以外のもう一つの大事な対照的存在である。小説の中で描かれる三つの都市、地域と公園（「台北：台北ダウントウン：新公園」、「ニューヨーク：マンハッタン（Manhattan）：セントラルパーク」、「東京：新宿：新宿御苑」）からは、三種類のゲイライフが描かれる。台北ではよく警察に取り締まられ、新聞紙に不本意に暴露され、ニューヨークでは治安や人種差別の問題に悩まされるが、東京のゲイライフは来ただけで言語が通じない小玉にとっては、むしろきわめて寛容的で開放的なものである。

白先勇には前述の通り日本に訪問した経験があることから、それはリアルな描写でもあったと考えられる。しかしそれだけではなく、この部分の描写は、同性愛行為に比較的に開放的でかつ植民地時代に残された郷愁をも感じさせ、戦後にも密接に経済と文化の交流を持つ日本が、ゲイにとってはユートピア的な存在であったことを暗示しているのであろう。そのように考えれば、台湾の社会に疎外されてきたゲイたちが比較的にオープンな東アジアの大都会東京に身を投げることも、全く想像できないものではなくなる。これらの描写は、台湾の人々に、アメリカ以外の「外国」に新たな想像の可能性を持つようにさせたのである。

さらに言えば、小説の中でゲイバー「安楽郷」について暴露する新聞記事のタイトル「遊妖窟」からも手がかりを得ることができる。李爽学がすでに指摘しているように、この記事のタイトルは明らかに中国唐代の張鷟（658-730）の狎妓小説（妓女をテーマとする小説）『遊仙窟』から取ったものであり、加えて『孽子』と『遊仙窟』における水

⁶⁶ 石計生「台灣歌謠作為時代盛行曲：音樂台北的上海及諸混血魅影，1930-1960」『時代盛行曲：紀露霞與台灣歌謠年代』、134-166 頁。

⁶⁷ 允晨文化版は「三重市」としている。

商売の場面は両方とも「国際的」（原文：「有國際氣象」）なものである⁶⁸。また張鷟は当時の大唐国だけではなく海外でも文名が高く、「新羅、日本東夷諸番は尤も其の文を重じ、必ず金貝を重出し、以て其の文を購ず」⁶⁹と言われたほどであるが、その後『遊仙窟』は中国で発禁を受けて失われ、清代になってから日本で発見された⁷⁰。このような事情は、日本が性的ユートピアであることを暗喩しているのではないかと考えられる。

1.6.結びに：『孽子』における「日本」と多文化共生の台湾

小笠原淳が指摘しているように、『孽子』のテキストでは「空間によって人物の形象が表現され、空間が物語内容を決定している」⁷¹。「日本」と関わる要素は絶え間なく『孽子』の背景とする空間に登場することから、これらの要素を検討することによって、この作品に対する理解をさらに深めることができる。

重要な作品のほとんどをアメリカで書いた白先勇が、アメリカの環境に影響を受けていることは明らかで、アメリカのゲイカルチャーもまた体験していたはずである。彼の小説の中では、アメリカも常に「中国人」（戦後の中華民国国民＝台湾人）の逃げ場として存在している。しかし前述の『孽子』に対する考察からわかるように、日本に関わる描写も同様に複数確認できる。これは白先勇の作品の中では非常に際立ったものである。

『孽子』における日本に関わる描写からは、以下の特徴を見て取ることができる。

まず、作者は『孽子』にて日本関連の要素を描写することにより、台湾の複雑な歴史と文化に近付くことが出来た。白は「台湾」という地で失われた「中国」を描こうとしてきたが、『孽子』では「日本」の要素を入れることにより、具体的かつポジティブに本省人を描いた。結果として、『孽子』では日本的要素が使われることにより、さらに台湾の環境に近づくことが可能になり、主人公・李青たちも多元な（エスニシティとジェンダーの）文化を理解することのできる優しい人格を持つこととなった。

そして、この作品の分析を通じて、男性同性愛者の文化においても、日本の影響が強く見られることが明らかになった。従来、性的マイノリティの文化は、欧米の影響が強いと考えられてきたが、小説の中のゲイたちは、多かれ少なかれ日本からの文化的影響

⁶⁸ 李爽學「人妖之間：從張鷟的〈遊仙窟〉看白先勇的《孽子》」『三看白先勇』（台北、允晨文化、2008）、147-179 頁。

⁶⁹ 劉昫等撰『舊唐書・卷一百四十九・列傳第九十九・張鷟傳』。ここでは中華書局 1997 年復刻版、4023-4024 頁。類文も歐陽修・宋祁撰『新唐書・卷一百六十一・列傳第八十六・張鷟傳』、中華書局 1997 年復刻版、4979-4980 頁に見える。

⁷⁰ 葉慶炳『中國文學史』（台北、台灣學生書局、1987）、485-486 頁。魯迅「唐之傳奇文」『國立西北大學、陝西教育廳合辦暑期學校講演集（二）』（1925）、ここでは『魯迅全集』第九卷（北京、人民文学出版社、1981）、313-314 頁による。

⁷¹ 小笠原淳、前引文、313-314 頁。

を受けている。それはゲイたちが関わる水商売の文化には、日本統治期から現代に至るまでの、日本の水商売文化やエンタメ文化の影響が濃くあったためである。白先勇の他の小説はで見られないものの、同時代の水商売を描いた小説——例えば王禎和『玫瑰玫瑰我愛你』（1984）——の中にも、日本からの影響を見て取ることができる。

最後に、日本はアメリカ以外で詳しく描かれた数少ない「外国」であり、加えて台湾文化と比較されるもう一つの対照点となったという点を付記しておきたい。前述のように、白先勇は「台北人」シリーズの作品において、当時の台湾と昔の中国大陆を比較し、「ニューヨーカー」シリーズではアメリカでの生活と昔の中国や台湾の生活を比較している。このことはまさに、1970年代から1980年代までの台湾におけるアメリカに留学、移民するブームと重なっている。ただし、これらの描写において、台湾にいる登場人物は全員がアメリカに憧れを持っているものの、アメリカにたどり着いた登場人物は往々にして夢破れて辛い生活を送っており、そのいずれもが現在の生活に対する不満を抱えている⁷²。それに対して、日本はオルタナティブなユートピアとして存在している。

これまでの台湾「同志文学」の研究において、諸外国に対する描写は、アメリカ以外についてはほとんど注目を受けてこなかった⁷³。しかし、『孽子』における「日本」は副次的エピソードとはいえ、一種のユートピア的な存在として描かれている。

また冒頭ですでに述べたように、白先勇が1971年から1983年まで『孽子』の創作と連載を行った際、同性愛者や性的マイノリティの当事者を「同志」、彼女／彼らを描く作品を「同志文学」とする呼称はなかったし、『孽子』が出版された時点で白はまだ「カミングアウト」していなかった。しかし紀大偉の言葉を借りれば、この長く注目を集めてきたこの作品は、少なくとも読者たちに「同性愛を感じさせた」⁷⁴。本章で「日本」に関わる要素について詳しく分析することで明らかになったように、白先勇は「台湾における日本的要素」を描くことにより、戦後もなお日本的要素が存在し、また新たにやってきた（大陸）中国の要素およびアメリカの要素も存在する台湾を如実に描き出し、さらに「当時の日本」を描くことにより同性愛者のユートピア的な存在を描き出した。白はこのような文化的ダイバーシティを有する環境の中で、複雑な東アジアの近代

⁷² 台湾文学におけるアメリカ留学ブームに関する研究には多くの蓄積があり、例えば通俗的な恋愛小説を多く執筆した瓊瑤の1970年代から1980年代の作品において、主人公たちはアメリカへの留学を成功への道と見なしている。瓊瑤作品におけるアメリカ留学生については、張文菁「郷愁から憧憬へ——瓊瑤作品に見る臺灣民衆の意識轉換」『中國文學研究』33号（東京、早稲田大學中國文學會、2007.12.）、28-43頁を参照のこと。

⁷³ 曾秀萍『台灣小説中同志／跨性別書寫的家國想像（1990-2010）』（台北市、政治大學中國文學系博士論文、2012）、137頁。紀大偉『同志文學史：台灣的發明』、100頁。

⁷⁴ 紀大偉『同志文學史：台灣的發明』22頁。

性を読み取った。これは白先勇のその他の作品や同時期の他の「同志文学」作品には類を見ないものである。

「同志文学」の全盛期（紀大偉曰く「発展期」⁷⁵）である 1990 年代には、日本に関わる描写は更に多く見られるものの、今の時点では体系的な研究は存在しない。本章では「同志文学」黎明期の重要作品における「日本」的要素の重要性を見出したが、このような「日本」的要素がその後の台湾の「同志文学」においてどのように発展し、変化し、さらに多元的で複雑な東アジアの近代性を表現したのかという点については、これから考えていかなければならない。

⁷⁵ 紀大偉『正面與背影：台灣同志文學簡史』（台南、國立台灣文學館、2010）37 頁。

第2章 日本にいる台湾「同志」：呉継文『天河撩乱』における日本描写

2.1. まえがき

すでに説明したように、呉継文は台湾同志文学の「日本」描写の代表とされてきたが、彼の作品にはすでに白先勇、朱天文などの作品が先行している。しかし、実際に数年にわたる日本での留学や生活の経験を持ち、また日本文学作品を数多く中国語に翻訳した呉継文は、それまでの「同志文学」作者の中で最も日本との関係が深い人物だと考えられる。『天河撩乱』において、東京は物語の主要な舞台として前出のどの作品よりも詳しく描写されている。曾論文は仏教思想や哲学等の面からのアプローチが主であり、物語の文脈については詳しく論じておらず、もちろん日本の描写についても同様である。このため、日本という背景が呉継文作品の中でどのように位置付けられているのか、文脈や描写から究明する余地が残されている。

本章では、呉継文の代表作『天河撩乱』を精査し、まず登場人物たちの東京での体験、歴史上の出来事、また主な舞台である「東京」の描写について整理する。次に作者が描こうとする異国の町「東京」の姿、そして「同志」と「東京」を同時に描く意味について考え、呉継文『天河撩乱』における「同志」と「日本」がどのように表象され、想像されたかについて明らかにしたい。すなわち、本章の問題意識は、『天河撩乱』においてセクシュアル・マイノリティと日本の関係がどのように書かれ、そしていかに作者・呉継文の主体性が反映されたかということにある。

2.2. 『天河撩乱』の成立

2.2.1. 作者・呉継文について

呉継文は1955年に、台湾の南投県に生まれた。台湾・東呉大学中国文学系を経て、広島大学大学院にて中国古代神話の研究者御手洗勝に学び、修士（哲学）の学位を取った。台湾主要紙の一つ「聯合報」の副刊編集、時報文化出版社編集長、台湾商務印書館副編集長などを経て、2019年現在は創作や翻訳に専念している。著書には小説『世紀末少年愛読本』と『天河撩乱』のほかに、舞台劇台本『公園1999的一天』（1998）がある。さらに訳書に吉本ばなな『哀しい予感』『キッチン』『ハネムーン』『白河夜船』『とかげ』『TUGUMI』『N・P』、河口慧海『チベット旅行記』、井上靖『わが母の記』などがあり、死と家族愛をテーマとする作品が多いと言えよう⁷⁶。

⁷⁶ ここは佐藤普美子による呉継文と『天河撩乱』についての紹介を参照した。許佑生等著、前掲書、151-152頁。

2.2.2.デビュー作『世紀末少年愛読本』

デビュー作である『世紀末少年愛読本』は、清代中期の男色を描いた白話小説、陳森の『品花宝鑑』（1852?）⁷⁷の翻案作品である。原作『品花宝鑑』は「相公」（伝統劇の俳優）と「恩客」（お得意）の恋愛物語、いわゆる「才子佳人」の系譜に沿った作品であった。呉はそれを翻案し、「相公」の「書僮」（付き人）という原作『品花宝鑑』に存在していないキャラクターを語り手にし、その視点から、明代以来の白話小説にみられる「勸善懲惡」⁷⁸物語を、現代的なロマンティック・ラブストーリーへ変貌させた⁷⁹。

ここで注目したいのは、『世紀末少年愛読本』の結末である。語り手の付き人は、比丘になってチベットへ行き、のちに師に「今生の縁法は尚東方に在り」と指摘され、35歳を機に国境を越え、「東瀛の彼岸に着き、雪が舞うなか高野山金剛峰寺の山門を叩いた」⁸⁰。仏法を求めるなら、語り手は遥々チベットから日本へ行く必要などない。原作『品花宝鑑』にないこの設定については、呉継文が『世紀末少年愛読本』後半の執筆中に、『天河撩乱』の創作に取り組んでいたという事実をあわせて考慮すべきだろう⁸¹。『世紀末少年愛読本』の結末と『天河撩乱』の冒頭の共通点は、まさに中国から日本への移動が描かれていることである。日本という地は、『世紀末少年愛読本』では一種現実社会からかけ離れた場所となっているが、『天河撩乱』では小説における主要な舞台になっているのだ。二作とも登場している日本の表象は、呉の作品を解読するために重要なキーワードかもしれない。

2.2.3.『天河撩乱』の成立

『世紀末少年愛読本』に続き、1998年に出版された長編小説『天河撩乱』の物語を簡単に紹介しよう。1995年春、30代後半でHIV（ヒト免疫不全ウイルス）と思われる「凶悪なるウイルス」⁸²に罹った主人公・傅時澄は、東京で入院している重病の伯母・傅成蹊の見舞に行く。小説は、伯母の自死と海葬式によって幕が降りる。物語の中核をなすエピソードは、第三人称による主人公時澄の回想と伯母から聞いた過去の話であ

⁷⁷ この年代は魯迅「第二十六篇 清之狎邪小説」『中国小説史略』（1925）、『魯迅全集 第九卷』（北京、人民文学出版社、1981）、256頁より引用。年代の問題はいくつの説があるが、いずれも清代中期である。

⁷⁸ 魯迅、前掲文、258頁。

⁷⁹ 『世紀末少年愛読本』における日本の作家・須永朝彦の影響は、拙稿「從東亞少年愛到台灣同志：呉継文《世紀末少年愛讀本》與須永朝彦」『臺灣學誌』18号（台北市、国立台湾師範大学台湾文学系、2019.4.）、43-64頁が詳しい。

⁸⁰ 呉継文『世紀末少年愛読本』（台北、時報文化、1999二版〔1996〕）、334頁。作者本人によると、1996年に出版された初版は印刷のミスが多く、1999年の二版で修正された。

⁸¹ ここは『世紀末少年愛読本』の初版（台北、時報文化、1996）の「後記」、354頁を参照。1999年発売の第二版の後記は大幅に書き直され、引用箇所は削除された。

⁸² 『天河撩乱』、39頁。

る。また、スウェーデン人の地理学者で探検家のスヴェン・ヘディンによるロブ・ノール湖の調査報告『さまよえる湖』の翻訳が挿入されており、「湖」を探す過程は、主人公時澄と成蹊の命の旅を例えたものだと考えられる。

本書の表紙に、「『世紀末少年愛読本』に続く、呉継文の最新半自伝体長編の力作である」⁸³というキャッチフレーズがある。呉継文は1994年12月10日に中国時報の「人間副刊」にて「記憶・邊緣・迷路」⁸⁴というエッセイを發表し、自分の同性愛への欲望や70年代の日本における学生運動、赤軍派関係者との関係を告白し、当時の台湾文壇に衝撃を与えた。のちに呉はこのエッセイが『天河撩乱』の起点だと語っている⁸⁵。エッセイの内容は鵜呑みにできない⁸⁶が、この「赤軍派関係者」は「川上鴻史」という名前で『天河撩乱』にも登場している。

作者の呉継文は日本現代文学の翻訳者でもあるので、日本の作品から受けている影響も所々見られる。出版当時に、呉継文は王開平の取材に対し、『天河撩乱』の物語の構造はイギリスの日系作家カズオ・イシグロの小説 *The Remains of the Day* (1989、邦訳『日の名残り』) からヒントを得たと言っている⁸⁷。王開平も、『天河撩乱』における伯母・成蹊の人物像は、呉継文が翻訳した吉本ばなな『哀しい予感』(1988、呉継文による中国語訳『哀愁的預感』は1996)の中で、主人公の叔母だと自称していた主人公の姉のことを想起させると指摘している⁸⁸。また筆者が個人的にインタビューを行った際、呉継文は、作中における東京についての描写は、日本戦後の社会体制やコマーシャルリズムに対して批判する姿勢を取っているエッセイスト・写真家藤原新也(1944-)の散文集『東京漂流』(1983)に影響を受けた、と話してくれた⁸⁹。

『天河撩乱』に関する先行研究や評論は、欲望の虚しさ、エイズの身体性、血縁家族の崩壊と台湾白色テロ時期の歴史との関連性に主眼を置いたものが多い⁹⁰。一方、東京

⁸³ 原文：「継《世紀末少年愛読本》之後，呉継文最新半自伝体長篇力作。」呉継文『天河撩乱』表紙。

⁸⁴ のち楊澤編『七〇年代：懺情録』(台北、時報文化、1994)、95-102頁に収録。

⁸⁵ 王開平「主題人物 呉継文 行雲人消息」『聯合報』1998年12月07日、48版。徐淑卿「呉継文：迷離故事挑戰真実本身」、『中国時報』1998年12月31日、43版。

⁸⁶ たとえば、幼い頃から日本へ移住しているというのは明らかに虚構である。

⁸⁷ 王開平、前掲文。

⁸⁸ 王開平、前掲文。ただし成蹊が性転換者でありニューハーフバーで仕事をするという点から見れば、『哀しい予感』の主人公の姉よりも、むしろ吉本ばなな「キッチン」とその続編「満月 キッチン2」(いずれも『キッチン』(東京、福武書店、1988)所収)の男性主人公の性転換者の「母」の方が近いであろう。王開平が『哀しい予感』の主人公の姉を想起したのは、おそらく呉継文が訳した『キッチン』の中国語訳(『廚房』、台北、時報出版、1999)が、この取材の後の1999年に出版されたためである。

⁸⁹ 2014年3月、台北市にて筆者が呉継文に個人的に行ったインタビューによる。

⁹⁰ 例えば王徳威「驚起卻回頭」『中国時報』1998年11月26日、42版(のち『眾聲喧嘩以後』(台北、麦田、2001)、108-110頁所収)、王浩威主講・王妙如整理「心理與文学—個人與家的拔河」『聯合文学』16卷3期(2000)、125-127頁、Carlos Rojas(2001)“The Ruins of Representation in the Fiction of Wu Jiwen”, in *Journal of Modern*

に関する描写は実体験に基づいていると考えられているのみで、先行研究ではほとんど究明されていない。この研究の空白を埋めるべく、『天河撩乱』において、作者はいかに東京を描き、さらに描かれた東京がいかに登場人物に影響を与えているか、次章で検討したい。

2.3. 『天河撩乱』における東京

2.3.1. 登場人物の東京での変化について

東京という大都会で、『天河撩乱』の登場人物たちは様々な経験をした。ここでは二人の主要人物のそれぞれの経歴を整理したうえで、東京との関わりを確認していきたい。

まず主人公・傅時澄は 1950 年代前半⁹¹に台湾・南投⁹²にある歯医者之家に生まれた。一見したところ幸せそうな一家であるが、実は多くの言われざる秘密が存在した。10 歳になると、彼は理由を知らされず父とともに家族から離れ、東京に着く。そのとき初めて伯母・成蹊と会い、二ヶ月同居した。高校時代には早稲田大学の院生で、赤軍派に参加していた川上鴻史に出会う。鴻史から赤軍派や社会運動の話を聞き、文学や歴史書を読むように勧められ、さらに性的関係により同性愛の欲望も啓蒙された。その後二人は別れ、時澄も台湾へ帰るが、帰国する前に伯母に彼女が性転換者であることを告知される。そして台湾へ帰郷したあとには、彼はまた援助交際により金銭を受け取るなど、波瀾万丈の道を歩き、そのうちに「史上一番残酷なウィルス」に感染してしまう。伯母危篤の知らせを受け東京へ行くと、その伯母から実は自分が「伯母」の双子の弟（つまり伯父）と自分の母の不倫の末に生まれた子であることを知らされる。その後時澄は一旦台湾へ帰るが、伯母が自死したため再び東京へと向かう。東京では鴻史と再会し、伯母の骨灰を東京湾に散骨した。

Literature in Chinese (現代中文文学学報) Vol. 5.1, Hong Kong: Centre for Humanities Research, Lingnan University, Kuo-wen Hsu (徐国文) (2006) “Unbinding Family History, Queer Bodies and Death: Reading Transgender and AIDS in Tian Ho Liao Luan”, in *Textual Politics of Minor Queers: Reading Lolita, Our Lady of the Flowers and Tian Ho Liao Luan*, Taoyuan County: National Central University (国立中央大学英美語文学系碩士論文), pp. 66-96、唐毓麗「病患的意義：談《天河撩乱》及《丁莊夢》的家族／国族紀事與身体」『興大人文学報』49 期（台中市、国立中興大学文学院、2012）、145-180 頁など。

⁹¹ 主人公・時澄が自殺未遂で入院するのは 19 歳（『天河撩乱』287 頁）のときである。退院後は「はじめてのマークシート方式」（『天河撩乱』187 頁）のセンター試験（「聯考」。1973 年）を受けている（管美蓉『大学入学考試制度與教育控制：台湾地區的歷史考察(1949-2001)』（台北市、国立政治大学歷史学研究所博士論文、2004）、86-87 頁に参照）。従って時澄は 1953 年前後に生まれたと推測できる。因みに作者の呉繼文は 1955 年生まれである。

⁹² 「台湾中部で海から一番遠い町」（『天河撩乱』24 頁）。作者の呉繼文も南投県の出身である。

いっぽう伯母・成蹊は一家の「長男」として日本統治期の南投に生まれたと考えられる。台湾で大学を卒業し、軍隊を退役したあと、京都大学へ進学したが自主的に退学した。その後は大阪市浪速区のニューハーフバーで働くが、化粧と異性装だけでは男の容姿を隠せないため、十分な稼ぎが得られなかった。そうしたなか「ブルーボーイ」のドラッグクィーンの来日ショー（1963 年末）を見て、モロッコで性転換手術が受けられると知る。しかし大阪や神戸で4年近く働いたものの、それほど貯金することは出来なかった⁹³。のちに東京の歌舞伎町にあるバー「雪姫」に職を移し、店主の好意により薬代を先払いしてもらい、経口薬で外見も女性らしくすると、収入も増加する。そのうち高知県選出の三世国会議員・室生演吉と出会い、好意を抱かれる。演吉の協力によって成蹊はモロッコ行を実現し、ようやく女として生まれ変わったが、一生台湾へ帰ることはなかった。物語の終盤で成蹊はガンに罹り、時澄に家族と自分の秘密を語ったのちに自死する。

主要人物である二人はともに台湾に生まれ、家族を離れて、東京で性的啓蒙（同性愛への目覚め／経口薬の服用による性別移行）を受け、自由奔放な恋を経験している。この二人だけではなく、ストーリー全体を確認すると、主要人物が東京へ来た経緯およびその後の変化に関して、以下の共通点が見られる。

まずは、家庭と社会における前近代的秩序からの逃避である。時澄は息苦しい、「神経質に他人の肯定や好意を失うのを恐れる」⁹⁴家族から逃れ、成蹊は自分の男性性から逃れ、時澄の父は息子を兄（時澄の実父）から守り、家族のスキャンダルから逃げていく。

彼らは故郷では前近代的な秩序を守ろうとしているが、意識するにせよしないにせよその秩序から一度逃れると、東京に出て、同じく主流社会の周縁者として互いに寄り添うことになる。不倫の子としての時澄と性転換者としての成蹊、妻に浮気された時澄の父と女一人で商売をする離婚歴を持つ女性翠鸞、仲間を除名された鴻史と家族からの疎外感を抱く時澄、家柄にプレッシャーを感じる演吉と成蹊など、すべてにこのような関係が読み取れよう。つまり、東京は秩序から逃げられるところであり、愛情が生まれうるところでもあった。

前述の人物たちは東京で得た新しい知識や体験によって人生を大きく変化させることになる。時澄は暖かく幸せそうに見える家庭から自立できるようになり、さらに鴻史によって文学や歴史、社会運動に対する関心や同性への欲望を啓発された。成蹊は東京で

⁹³ ここで問題となるのは、もし成蹊がブルーボーイに影響を受け、また大阪や神戸で4年近く働いてから東京へ移ったのだとしたら、1960年代半ばに時澄と父が東京に着いた時、彼女はまだ関西にいたはずであるという点である。この時間的な食い違いは読解を難しくさせている。

⁹⁴ 『天河療乱』、46 頁。原文「神経質地唯恐失去别人的肯定和疼愛」。

経済的支援を得てようやく女性として生まれ変わった。見合い結婚をした時澄の父は、東京で翠鸞と自由恋愛し交際するようになった。台湾生まれの室生演吉は東京で成蹊と出会い、成蹊に語ってもらった台湾の景色から「虚構の郷愁」を感じ、また性転換者成蹊に「体の神秘」を感じた。以上の「新しい知識や体験」は、本来であればほとんどタブーだったものである。

2.3.2.東京の風景描写

登場人物にとって、東京はそれぞれの故郷（台湾／新潟／高知）という前近代的な場所との対極的位置にあると考えられよう。以下、東京における屋外の景色、および室内空間を見ていきたい。

作品の冒頭で、自身も病気を抱えている時澄は、母から伯母が危篤の状態にあると知らされ、旅先の寧波から上海経由で東京に向かう。伯母が入院している東京都中央区築地にある国立がん研究センターの景色と匂いは、次のように描かれている。

健康な人でも、生活のためにこのようなゴミ、排泄物、廃水、生ゴミ、動物の死体の悪臭の中で駆け回っていれば、病気にならないわけがないだろう。病気になって入院すると、また化学薬品や患者食の異臭に囲まれる。だがそこには重症患者が吸い込んでいる、救急病棟と集中治療室特有の血痕、吐瀉物、恐怖の涙、ドアの前の納棺師の体臭が混ざっている空気はまだ含まれていないのだ。敏感な人なら、あちこちブラブラしている暗い影を帯びた死神の腐敗した匂いをもかぐことが出来るだろう⁹⁵。

このように東京の湾岸部については不潔感、死に関わるイメージが見られる。類似の描写は、小学生だった時澄が、伯母が住んでいる港区芝浦で見た景色にも描かれている。

彼女が住んでいるところはもっとおかしかった。港区は東京の中心部にあるのに、芝浦はただの倉庫エリアでしかない。ここには国内外の様々な貨物が

⁹⁵ 『天河撩乱』、13 頁。原文「人健康的時候，為生活奔波於這種由垃圾、排泄物、廢水、污水、動物死屍所發出的惡臭之間，怎能不生病？等生病了住院，又要被化学藥品和醫院伙食的異味包圍；這還不包括重症患者所要呼吸的，急診室和加護病房特有的摻和了血跡、嘔吐物、恐懼的淚水、門口收屍人體味的空氣。敏感的人還會嗅聞到正在四處閒蕩的死神帶著冷涼黯影的腐敗氣息。

積み上がっていて、また屠畜場、水産加工工場、汚水処理場や泥臭い運河の水道もある⁹⁶。

夜になると、疎らな電柱や、あちこち走り回っている野良猫と野良犬、そして狐火しか見えず、ゴーストタウンのようになる。また遠いところから微かな潮の音が、たまにはモーター、汽笛、クレーンの悶々たる響きも聞こえる。時澄は雨の日も好きだった。車輪が路面の水溜りを重く走ると、千羽の水鳥が同時に啼き、または百万匹の蜉蝣が同時に羽化して飛び立つように聞こえる。それに起こされた水蒸気は車のライト、電柱の光や路面の反射光のなかでひんやりと燃える⁹⁷。

ここで描写される海辺は、大都会での生産活動により残された廃棄物や不潔物が見られる、これら进行处理する忌まわしい場所である。人間に捨てられた野良猫と野良犬の姿も、「モーター、汽笛、クレーンの悶々たる響き」も、都会に疎外されるもの、アウトサイダー的なものである。「百万匹の蜉蝣が同時に羽化して飛び立つ」という比喻も、（羽化して間も無く死ぬ蜉蝣の）死を想起させる。

芝浦に関する描写は、明らかに藤原新也の散文集『東京漂流』の影響が見られる。「豚は夜運べ」は、1979年前後、港区芝浦四丁目に在住していた藤原が見た景色を記録したものである。以下その一節を引用したい。

日曜日の芝浦はゴーストタウンのようだ。人も車も閑散としている。わずかな店屋もすべて閉めきっている。...（中略）...灰色のコンクリートの壁に足音を響かせながら大通りに出ると、品川のほうに向けて窓のないのっぺりとした建物が連なり、車も人影も見えなかった。私は生態系の途切れて死の色になった海の底を歩いているような気がした⁹⁸。

このような芝浦においては、下水処理場や屠場のある無機質な風景、濁った運河や河川が放つ臭い、豚を運ぶ自動車のブレーキ音や豚の喉笛、キツネ火に見える廃物を燃や

⁹⁶ 『天河撩乱』、36頁。原文「她住的地區更奇怪，港區在東京屬於中心地帶，可是芝浦根本是個倉庫區，堆棧著來自國內外的各色貨物，還有屠宰場、水產加工場、污水處理場，以及混濁發臭的運河水道。」

⁹⁷ 『天河撩乱』、41頁。原文「到了晚上，只見稀稀落落的路燈，四竄的野貓野狗與野火，像是鬼城；也可以聽見自遠方傳來的隱約潮音，間中時而夾雜著馬達、汽笛和起重機的悶響。時澄也喜歡下雨的日子，聽負重的車輪狠狠軋過積水路面轟然有如千隻水鳥同時鳴叫、百萬蜉蝣一起羽化飛升；被激起的水氣在車燈、街燈和路面反光中冷冷燃燒。」

⁹⁸ 藤原新也「豚は夜運べ」『東京漂流』（東京・情報センター出版局、1983）、30頁。

す火などの描写が見られる⁹⁹。引用した『天河撩乱』の箇所は、まさに藤原のこのような描写を踏まえていると言えよう。

また、伯母が反抗期の時澄と、海辺の丸太置き場で話す場面もある。ここでも「周りは少し腐った匂いがするので、伯母さんの身の上の柑橘系の香水は更に濃くなった」

¹⁰⁰、「高潮のせいで、海の藻の臭みはいつそう強くなった」¹⁰¹、「港の水面にはいつも油污れが浮いている」¹⁰²等の描写が見られる。海辺の景色には、やはり都会の廃棄物が集中した不潔感が感じ取れる。

次に、時澄が中学生の時に隅田川から船に乗り、船から蔵前国技館（現・台東区蔵前水の館）を眺める描写を見てみよう。都会の中の「蒸し暑い空気」が「海から」の潮風に吹き飛ばされ、海で直径が300メートルもある巨大な花火が見られるという描写において、海の開放感は都会の閉鎖性と対比的に描かれている¹⁰³。ただし中学生の時澄は、蔵前国技館の「複雑な工法で交差する幾何学的配列になっている鋼梁を見て、少し目眩がした」と述べており、近代性的な都市空間が苦手なようである。冒頭では成人になった時澄が東京の「道しるべ、広告看板、街路樹すらも厳密に綺麗に整理されている」町の景観に対し、「人々は隠れるところなくなる」¹⁰⁴という感想を持っており、つまり、東京の清潔感、都会感を感じさせる街並みで、彼はくつろぐことが出来ていないのだ。

また、伯母の葬式の後、東京湾で散骨するときの描写を見てみよう。

その日は風や波があまりなかったが、出発してから半時間後、船体の揺れが段々強まってきた。彼らは東京湾の広い水域の中心に入り、往来する船はまだ多かったが、港付近ほど密集していなかった。カモメの群れは船の上空に飛び回っていたり、近くの海面に頻繁に飛んだり降りたりしていて、薄い灰色の背中とほかの部位の純白の組み合わせはほぼ完璧だと言える。西に沈んでいく太陽が、大東京の濁る褐色の煙を通して、疲れている光を、火気が全

⁹⁹ 藤原新也「豚は夜運べ」『東京漂流』、8-25頁。

¹⁰⁰ 『天河撩乱』、64頁。

¹⁰¹ 『天河撩乱』、67頁。

¹⁰² 『天河撩乱』、68頁。

¹⁰³ 『天河撩乱』、21頁。原文「那時，近晚的潮風從海上吹來，把溽暑的氣悶吹得老遠。他們從淺草吾妻橋下的隅田川渡船口出發，準備到東京灣邊上的濱離宮恩賜公園看夏日最後一場煙火。據說壓軸的煙火開花直徑有三百公尺。（中略）那時渡船正穿過厩橋下方，前面不遠處可以看見藏前国技館的黑色屋頂。時澄抬頭看著以複雜的工法交叉呈幾何排列的鋼樑，覺得有些暈眩。」

¹⁰⁴ 『天河撩乱』、38頁。原文「此地連路標、廣告招牌、行道樹都處理得嚴整而乾淨俐落，使得人無所遁形…」

くなく青緑色の水面に敷き、ぼんやりと船や人々の体に映っていて、一種の慰めのようなものとなった¹⁰⁵。

整備された町中の圧迫的、封鎖的なイメージや「目眩」がするような建物などの描写に対して、荒涼とした東京湾では「慰め」が感じられるのであり、湾岸の町の生の営みによる臭みのある、封鎖的なイメージと、河口や東京湾の開放的なイメージは対極的図式であるように見える。

それでは前述の室外の空間に対し、室内空間はいかに描かれたのだろうか。以下二つの場面をあげて比較したい。まずは伯母・成蹊の部屋である。

（筆者注：伯母さんが）住んでいる部屋もおかしかった。リビングにはカウンターがあるだけでなく、なんとジュークボックスとスロットマシーンもある。また、リビングのソファや寝室のベッドなど、すべて紫色だったりピンクだったりして、どの部屋にでもランプソケット、シャンデリア、ロウソクなどが様々ある。壁に沢山の映画のポスターやアイドルの写真が飾ってあったが、服をあまり着ていない人もいて、時澄は盗み見ることにしか出来なかった。全体的には、時澄はこの二文字しか思い付かなかった：下品¹⁰⁶。

また、成蹊がママとして働いているニューハーフバーには、以下の描写がある。

彼らはビジネスビルの二階に上がったが、ドアの看板はまさにロダンの「地獄の門」を縮小したもので、一尺平方の黒ずんだブロンズの板に、若干表情が歪んだ姿が優美な人体が浮き彫られている。その真ん中に蛍光色で店の名前：ピーコックブルーの「ANTI-SUTTEE」と、銀色で「不貞」という文字が書いてある。（中略）店の中は寒色がメインだが、照明にかなり拘っているので、全体的にはやはり暖かみがあり、いい雰囲気である。カウンター席の

¹⁰⁵ 『天河撩乱』、277 頁。「那天看不出有什麼風浪，但開行約半個鐘頭後，船身漸漸有較大的晃搖。他們駛進東京灣寬闊水域的中央，往來船舶仍多，但不再像港區那樣密集。成群的鷗鳥或在船隻上空盤旋，或在附近的海面頻繁起降，淺灰色的背部和其它部位的純白搭配近乎完美。西斜的太陽透過大東京地區灰褐的煙霧，將它疲憊的光焰毫無火氣地鋪陳在藍綠色的水面，曖曖折射在船隻和每一個人身上，彷彿一種安慰。」

¹⁰⁶ 『天河撩乱』、36 頁。「人住的房子也邪門，客廳除了設有吧台，竟然還擺了一架自動點唱機和一台吃角子老虎；另外，不管客廳的沙發、臥室的床組，都是一大堆紫色、粉紅色，每個房間座燈、掛燈、吊燈、蠟燭琳琅滿目，牆上裱掛了許多電影海報、明星特寫有些人衣服穿得好少，教時澄只敢偷瞄。整體印象，時澄只想到兩個字：低級。」

ハイチェアのほか、テーブルは十一、二しかなく、暗色系のソファによって分けられている¹⁰⁷。

ほかには、中学生の時澄と成蹊が一緒に行ったフレンチレストランについての描写¹⁰⁸や、台湾に帰る前に時澄と成蹊が訪れた夜の水族館についての描写¹⁰⁹などがあるが、いずれも極めて人工的、かつデカダンスで、色鮮やかな光景を想起させる。室内の鮮やかな色彩を描くことで、前述の町の無機質さ、不潔感はさらに対比的に、立体的に見られることになる。また、このような室内空間の中には、欲望を自分が支配できる空間の中でほしいままにする伯母・成蹊の退廃的な精神性が見られ、時澄も寧ろこのような空間においてのみ、ようやくくつろぐことが出来るようである。

2.3.3. 「東京」はどうやって語られるのか

前述のように、登場人物たちは東京に来ることで秩序から逃げ出し、新たな体験や知識を通じて、己の欲望に目覚め、さらにアウトサイダー同士で寄り添うようになる。このような変化が起こる場所・東京は、外見が近代化的である一方で、裏側には芝浦の河口で見られるような廃棄物、不潔物を抱えている。そして河口を出ると、開放的な海がある。登場人物たちは故郷にいられず、東京の汚い裏側に身を置きながら、自分が把握できる空間（＝部屋）でほしいままに色鮮やかな生活を送る。

『東京漂流』からの影響は、前述の芝浦に関わる描写だけではない。『東京漂流』は、作者が「生産と拡大と能率のために無駄であったり邪魔であると考えられる、世界存在の構成要素を汚物異物としてとらえ、排除する性向」を「宿命として持っている」¹¹⁰現代コマーシャルイズムに反発し、故意に汚物や異物、あるいは社会的事件の裏側に筆先やカメラの焦点を当てることで、資本主義で作り上げられた都市・東京（そして「日本」という国）の裏側を補完するという作品である。『天河撩乱』はまさにこれと共鳴

¹⁰⁷ 『天河撩乱』、97 頁。「他們走上一棟商用大樓的二樓。門口的店招好像羅丹「地獄門」的縮小版，一尺見方泛黑的青銅板上，浮雕著若干表情扭曲但姿態優美的人體，中間鑲嵌螢光色的店名：孔雀藍'ANTI-SUTTEE'和銀灰「不貞」等字樣。（中略）店裡的布置以冷色調為主，但照明非常考究，所以整體感覺還是溫暖而舒適。除了吧台的一排高腳椅外，總共才十一、二張桌子，用深色系的沙發組區隔開來」

¹⁰⁸ 『天河撩乱』、49 頁。「他們趕在下班的人潮之前到達，先去新宿三越旁邊的法國餐廳，吃了巧克力蛋糕和南瓜布丁；要不是馬上就到晚餐時間，時澄直想把每一種甜點都嘗遍。看看菜單上以羅馬字打印的各式料理名稱，不算華麗但講究的歐陸式裝潢，聽軟趴趴的香頌，當地一口南瓜布丁濃郁而獨特的氣味同時襲上鼻咽和味蕾，時澄終於有一種來到了異國的實感。」

¹⁰⁹ 『天河撩乱』、107 頁。「水族館是一棟蒙古包形狀的玻璃穹頂建築，約莫十層樓高，遠望好像在夜色覆蓋中發出深藍幽光的大氣泡。當他們走進玻璃屋大門，立刻嗅聞到一股有如自深海湧起的氣息。楠將照明打開，這才看到環繞著他們的，是一座超級甜甜圈般圓筒形的透明水族箱，有如科幻影片裡面的幽浮一樣從他們四周的黑暗中浮現。」

¹¹⁰ 藤原新也「ニンゲンは犬に食われるほど自由だ」『東京漂流』、377-378 頁。

し、社会に排除される登場人物たちを大都会で不可視化されている場所において生かし、個人、家族の「秘密」を猟奇的に語ることで、台湾の歴史の裏側を補完しようとしている。

小説のタイトルの「天河」に対応して、小説の中では『さまよえる湖』のロプ・ノールに流れ込むタリム川と、東京湾に流れ込む隅田川¹¹¹が描かれる。小説の最初に出てくる詩句において、天の川が流れ込む夜空には「何も見えなかった」¹¹²。『さまよえる湖』からの引用の中では、タリム川流域の古き城は、（探検当時は）廃墟とマミーしかなく、「さまよえる湖」も最終的に地図の上から消えてしまう。物語の主幹における芝浦の河口の廃墟に近い描写も、物語の最後に成蹊の骨灰が東京湾に散骨されることも、人の命、欲望や文明などはやがては死と無に帰るのだということを象徴しているのだろう¹¹³。

時澄と伯母だけではなく、新潟出身の川上鴻史、高知出身の国会議員・室生演吉、叔母の店の「ニューハーフ」従業員など、『天河撩乱』において東京で登場する人物たちは、保守的な故郷の環境に圧迫され、アジアの中心都市・東京へ移動せざるを得ないのである。東京という目新しいものと汚物の廃墟を併せ持つ近代的都市で、アウトサイダーたちがアウトサイダーとしてのアイデンティティを確立した。もちろん、これはセクシュアル・マイノリティや性的労働者などの被差別者の国際流動の様態を示しているかもしれない。

2.4. 結びに—なぜ東京を語るのか

台湾の戒厳令は1987年によりやく解かれた。それ以後の創作について、赤松美和子は文学賞や文学キャンプ等の文脈を整理し、以下のように示唆している。

戒厳令期の文学教育を受けて育った作家たちが戒厳令解除後に真っ先に発表した作品は、中華民国という「大きな物語」の終焉に対して「私」個人の記憶を語る「小さな物語」ではなかった。そうではなく、中華民国という「大きな物語」に対抗しつつ、本土派、外省人第二世代、女性などそれぞれの立

¹¹¹ 小説に描かれた隅田川だけでなく、時澄が入っていた学習院と早稲田大学の間に流れる神田川もまた隅田川の支流である。

¹¹² 「私は何かを見つめようとしたが、何も見えなかった。天河は撩乱なり……」『天河撩乱』、中表紙。原文は「我欲凝視事物，但一無所見；天河撩亂……／I want to look at things, but always see through them: galaxy's in ecstacies……」とある。英語部分の文法が間違っているのは、すでにCarlos Rojas、前掲文で指摘されている。

¹¹³ Carlos Rojasも前掲書において、『世紀末少年愛読本』と『天河撩乱』には共通して廃墟の景観と「欲望の廃墟（原文：The ruins of desire）」が見られることを指摘している。

場から「私たち」という集団的アイデンティティを作り上げようとする「大きな『台湾』物語」であったのだ¹¹⁴。

ただし、このような「私たち」が「大きな『台湾』物語」を語るブームの中で、大手の出版社の副編集長でもあった呉継文はかなり警戒していたと考えられる。前述のエッセイ「記憶・邊緣・迷路」というタイトルが示すように、同性愛者である呉の（疑わしい）「記憶」は「邊緣＝周縁」的なものであり、個人的なものにしかなり得ない。つまり最初から「私たち」の共有できるものにはなり得ないものである。

さらに、同性愛者としての「記憶」が語られても、そのまま既存の保守的秩序に編入されるという危険も考えられる。黄道明によると、実際「同志」による社会運動は90年代に入ると、売春者などと一線を画し、「良家子弟」的な優等生的な立場を示そうとし、保守的秩序に編入される傾向があったという¹¹⁵。

作者呉継文は「半自伝体」小説『天河撩乱』において、事実と想像を交えて語ることで、「記憶・邊緣・迷路」に見られるゲイだけでなく、私生児、性転換者、エイズ患者、不倫する人、風俗業の従業者など社会に排除されている人々をも一緒に描いている。これは、旧秩序に受け入れられない様々な性の様相を共に解放することにより、連帯する力で既存秩序に異議を申し立てようとするものである。

小説『天河撩乱』が、様々な周縁的な「記憶」を紡いできたのは、実体験を小説の中に織り込むためのみならず、戒厳令の圧迫から解放された台湾の「記憶」や「歴史」、そしてアイデンティティを共有することの困難を暗示していると考えられる。

前述の曾論文では、「東方への転向」の一つの要素として「アジアと海洋への視野の展開」という点が挙げられた。しかし『天河撩乱』は「展開」という外向的なものであるというよりも、むしろ複数の疎外されてきた、忌まわしい「小さな物語」を語ることで、台湾という「大きな物語」を内向的に補完しつつ疑問を投げかけたものだと考えられる。台湾社会において排除されている「同志」（という様々な性のマイノリティの当事者）と彼女／彼らの周縁にある記憶を、アジア最大級の都市の暗い一角に生きさせるというのも、台湾という「大きな物語」に対して疑問を示す一つの手法であるかもしれない。

¹¹⁴ 赤松美和子『台湾文学と文学キャンプ』（東京・東方書店、2012）、128頁。

¹¹⁵ 黄道明『酷兒政治與台湾現代「性」』（桃園縣中壢市・中央大学出版中心、2012）、168-171頁。

第3章：日本語の「台湾同志文学」の誕生：李琴峰『独り舞』論

3.1 はじめに

台湾人作家李琴峰の日本語小説『独り舞』は、台湾人レズビアンを主人公とした小説で、2017年5月に群像新人文学賞の優秀作とされ、日本語の非母語話者である台湾人作家の小説として注目を集めている。作中では台湾のレズビアン小説家・邱妙津やその友人である頼香吟など様々なテキストが言及され、中には日本語に翻訳されていない中国語圏の作品までが登場する。本論は、小説中で言及された邱妙津に関する言説を中心に、『独り舞』から看取されるレズビアンたちの「連帯」と、この小説が日本で出版された意味について考察したい。

3.2. 李琴峰『独り舞』について

2017年4月20日、『群像』が主催した第60回「群像新人文学賞」の結果が発表された。当選作はなく、優秀作には上原智美の小説「天袋」と李琴峰の小説「独舞」が並んだ。この二作の掲載はその2週後の5月6日に発売の『群像』2017年6月号であった。2018年3月末、加筆修正を加えた後、『独り舞』と改題し、講談社により単行本として出版された¹¹⁶。

1989年台湾生まれの李琴峰は、中学在学時より日本語を独学し、台湾の大学で日本語を専攻したあと、2013年来日した。早稲田大学大学院日本語教育研究科修了後、一時期会社員として働いたが、現在はフリーランスで執筆、翻訳活動をしている¹¹⁷。中学在学時より中国語で小説を創作していたと語っているほか、「峰月」という雅号での漢詩創作もインターネット上で確認できる。日本語で書かれたデビュー作で日本の文学賞に入賞したことで、大いに注目を集めた。

小説のあらすじは以下の通りである。1989年頃¹¹⁸台湾・彰化県に生まれた趙迎梅は、小学生の頃より自分がある女の子を好きだということを意識していたが、その女の子が不慮の死を遂げ、大きな絶望を感じる。高校在学時にはレズビアンを標的とした無差別

¹¹⁶ 李琴峰『独り舞』（東京：講談社、2018）。なお、受賞時のタイトルは「独舞」（『群像』2017年6月号）であり、タイトルを含めて改稿が行われたが、本稿は基本的に講談社単行本に基づいて作成した。

¹¹⁷ 李の経歴については、「第六十回群像新人文学賞発表」『群像』2017年6月号、223頁、および、李琴峰「透明な膜を隔てながら」『すばる』2017年9月号、250-251頁、さらに筆者による李へのインタビューに基づき作成したものである。

¹¹⁸ 作中の主人公・迎梅／紀恵は小学校5年生に上がったばかりの頃、（台湾中部の）地震で被災する（『独り舞』13頁）。これは1999年9月21日に発生した南投県集集鎮の921大震災だと考えられる（明記されるのは『独り舞』19頁）。このことから、迎梅／紀恵は1989年前後に生まれたことが推測できる。作者李琴峰も1989年生まれであり、李の他の経歴から鑑みるに、主人公は作者の等身大の描写であることがうかがえる。

レイプの被害者となって精神疾患を患い、抗うつ剤などの治療を受けて、小説を構想しながらなんとか台湾大学日本語学科を卒業した。昔の「災難」（＝トラウマ）を忘れるために、彼女は大学在学中に「紀恵」と改名し、さらに渡日後は日本の会社で就職してみるものの、常に絶望感に苛まれている。その後、周囲に隠していた性的アイデンティティや、自身がレイプの被害者であることが周囲に知られ、彼女は自死を決意する。自死の前にアメリカ、中国、オーストラリアに旅に出るが、そこで出会った人々の影響で、生きる意欲を持つようになる。しかし実際に現実の人間関係や仕事の状況をどのように回復させるのがわからないまま、物語が終わる。物語は終始、レイプ被害のトラウマの回復（とその可能性／不可能性）と、レズビアンとして異国の日本で生きることを巡って展開される。

3.3.中国語圏の作品の引用や言及について

3.3.1. 邱妙津を考える：「拉子の時代では考えられなかった」

「独舞」の特色の一つは、台湾を中心とする中国語圏作家や作品への言及である。特に物語で常に意識されているのは、若くして自死し、その作品が台湾レズビアン小説のカノンとなった作家・邱妙津（1969-1995）と、その友人である作家・賴香吟（1969-）である。

もし丹辰に恋をしていなければ、文学を書くことも無かつただろう。文学に縁が無ければ、邱妙津に触れることも無かつただろう。そうすれば、邱妙津の好きな村上春樹や太宰治を介し、日本語に興味を持つことも無ければ、日本に渡って生活することも無かつたかもしれない。¹¹⁹

邱妙津の作品は主人公・紀恵と日本文学および日本での生活の架け橋として描かれている。しかし邱妙津と東京の関係はこれだけではなかった。語り手はまた次のように述べている。

「ともかく彼女（注：紀恵）は曾て邱妙津が一度訪れた東京に来ている。邱妙津に出会ったのは中学生の頃だったが、気づいたら邱妙津が自ら命を閉じた二十六歳という峠を超えていた。一九九五年のパリで、冷たいナイフを心臓に垂直に突き刺し、暖かい鮮血で染める直前まで、彼女は東京にいる親友・賴香吟と電話していたそう。遺稿の整理と出版を頼んだ後に電話が切れた。」¹²⁰

¹¹⁹ 李琴峰『独り舞』、24 頁。

¹²⁰ 李琴峰『独り舞』、25 頁。

ここから分かるのは、語り手が意識的に主人公・紀恵と邱妙津の生い立ちを重ねようとしていることだ。紀恵は彰化県の出身で、名門公立女子高を経て台湾大学に進学し、さらに邱妙津と同じように東京を訪れ、邱とあまり変わらない年で自死を遂げようとする。これら全ては小説の中で予定されていた悲劇の準備であつたと言えよう。また、繰り返して言及される邱妙津の名作『鱷魚手記』（『ある鰐の手記』）¹²¹および『蒙馬特遺書』（『モンマルトルの遺書』）¹²²は、いずれも主人公の自死で物語が終結する。なお邱妙津の自死については、死後に遺稿の出版を頼まれた頼香吟の証言があり¹²³、台湾文壇ではよく知られた事実となっている。

しかし、主人公がレイプされる直前、当時（高校時代）の恋人・小雪が語ったように、この物語は「悲劇で終わらない『鰐の手記』（ママ）」¹²⁴であつた。この発言は物語の終盤で小雪たちが自殺寸前の主人公を救うことになる伏線であることは理解できるのだが、では物語はなぜ「悲劇で終わらない」のだろうか。これについては『独り舞』で数回に渡り言及された邱妙津と頼香吟について考えなければならない。

恋人の小雪と戯れていた主人公の高校時代、台中女中（＝国立台中女子高級中学¹²⁵）のトイレの扉には、「拉研社」（＝レズビアン研究社）という非公式学生サークルのチラシが貼ってあつた。語り手は「そんなサークルの宣伝を堂々とトイレの扉に貼り付けるのは、やはり邱妙津、そして拉子の時代では考えられなかったことだろう」¹²⁶と感嘆する。

そして、（おそらく 2015 年頃の）東京レインボー・プライドに参加した主人公と友達のソフィアの間にも、興味深い会話がある。社会運動に熱心で、台湾での左翼系書店の経営も手伝っているソフィアは、中山可穂の『白い薔薇の淵まで』¹²⁷についての「邱妙津が生きてたらこんな小説を書いてただろう」という友人のコメントに同意しながら、以下の発言をした。

¹²¹ 邱妙津『鱷魚手記』（台北市、時報文化、1994）。邦訳に垂水千恵訳『ある鰐の手記』。

¹²² 邱妙津『蒙馬特遺書』（台北市、聯合文学、1996）。2006 年には、欠けていた「第十五書」と「第十九書」を入れた新版『蒙馬特遺書』（新北市：印刻、2006）があるが、物語の大筋は変わらない。なお本論文は印刻出版の新版を参照している。

¹²³ 頼香吟「序：那樣的荒涼是更需要強悍的」邱妙津『邱妙津日記』上冊（新北市、印刻、2007）、9 頁。

¹²⁴ 李琴峰『独り舞』、56 頁。

¹²⁵ 2017 年から、台中市の直轄市制移行により、「台中市立台中女子高級中学」となった。

¹²⁶ 「拉研社」の部分は単行本『独り舞』では削除された。李琴峰「独舞」『群像』2017 年 6 月号、150 頁。

¹²⁷ 中山可穂『白い薔薇の淵まで』（東京、集英社、2001）、文庫版は（東京、集英社、2003）。なお後述の「フェミニズム運動にもゲイ・パレードにも興味はない」というのは、文庫版のあとがきから引用したものである。中山可穂「文庫版あとがき」『白い薔薇の淵まで』、236 頁を参照すること。

でも、邱妙津なら絶対『フェミニズム運動にもゲイ・パレードにも興味はない』なんてわざわざ書くことはしないと思う。小説を書くことで政治とは決して切り離せないということを、邱妙津はよくわかっていた。もしプライドパレードが発足した二〇〇三年まで生きていたら、きっと彼女はセクマイ運動の旗振り役になってたとおもう。¹²⁸

「もし邱妙津が生きていたら…」という言説は、まず邱妙津が死んだ 20 年後の現在でも、台湾のレズビアン・コミュニティ（乃至 LGBT コミュニティ）において彼女が依然として重要視されていることの証左である¹²⁹。また学校描写が多い「独舞」は、朱天心、邱妙津などを中心とするエリート・レズビアン叙事の影響が残っている¹³⁰。もちろん、邱妙津自身も民進党系の雑誌社に入社したことがあり、垂水千恵が指摘したように、『ある鰐の手記』を書いたこと自体、民主化運動という大きな（政治的）文脈と無関係ではない¹³¹。

さらに『独り舞』の時代背景を確認してみると、まず 2004 年には、学校内教育における両性の平等を規定する「両性平等教育法」が、性的指向、性的気質などにも平等に扱う「性別平等教育法」となった。それは 2000 年に性的差別を背景に起きたいじめで命を落とした葉永鋐変死事件が影響している¹³²。主人公たちの高校時代（2005 年前後）¹³³には、新たな法律の実行等の社会背景により社会と大学キャンパスの雰囲気がある程度オープンになっていたと推察できる。

また、台湾のプライドパレードの参加者人数は年々増加し、2010 年以後は毎年数万人に上った。さらに小説でも言及されている 2014 年の「太陽花學運（ひまわり学生運動）」後は、社会運動と LGBT 運動の連携が一層強化されたことも、前述の引用文からうかがえる¹³⁴。主人公はパレードを楽しみつつも、「ソフィアは『こんな上辺だけの連

¹²⁸ 李琴峰『独り舞』、62 頁。

¹²⁹ 林佩苓『依違於中心與邊陲之間：臺灣當代菁英女同志小説研究』（台北市、秀威資訊科技、2015）、13 頁。

¹³⁰ キャンパスのエリート・レズビアン的小説に関しては、林佩苓の前掲書で詳しく論じられている。

¹³¹ 垂水千恵「解説」邱妙津著、垂水千恵訳『ある鰐の手記』、269-270 頁。

¹³² 「性別平等教育法」の成立や葉永鋐変死事件については、拙稿「性的マイノリティ運動戒厳令解除以後の道のり」赤松美和子・若松大祐編『台湾を知るための 60 章』、173-174 頁を参照。

¹³³ 二人の対話に出ている F. I. R. 「刺鳥」を収録する『無限』アルバムが発売されたのは、2005 年である。

¹³⁴ 王立柔「318 運動 你看見同志了嗎？」ニュースサイト『風傳媒』2014. 4. 6.、<http://www.storm.mg/article/29595>、最終閲覧：2019. 12. 1.。ちなみに、「ひまわり学生運動」自体に言及する小説は、台湾にはまだ少なく、2019 年末現在、管見の限りでは黄崇凱の短編小説「你讀過《漢聲小百科》嗎？」『文藝春秋』（台北、衛城、2017）しかない。

帯と、カーニバルのようなパレードだけが、社会運動の存在意義ではない』とでも言うだろう」¹³⁵という発言している。これは政治性や他の社会問題に距離を置こうとする日本の LGBT 運動をやや批判しようとする意図があるだろう。

この小説における邱妙津小説の引用は、いずれも日本では翻訳されていない『モンマルトルの遺書』のものである。第5章には、「こんなにも他人に世界に多くを与えられるのに、少しでも今より苦しまずに生きることすら叶わない自分自身が不憫で仕方が無い」¹³⁶とあるが、これは『モンマルトルの遺書』冒頭の「見證」の引用である¹³⁷。この引用から、主人公・紀恵が『モンマルトルの遺書』の主人公、そして自死した邱妙津と同調していることがわかる。

また、第6章に高校時代の小雪が読み上げた「我祝福你幸福健康（あなたが幸福で健康でありますように）」¹³⁸は、注に「『モンマルトルの遺書』の締めの一文」¹³⁹と書いてある。しかしこれは実際には邱妙津自身の創作ではなく、ギリシア映画監督テオドロス・アンゲロプロス（Θόδωρος Αγγελόπουλος／Theodoros Angelopoulos、1935-2012）の映画『このとり、たちずさんで』（*To Μετέωρο βήμα του πελαργού／The Suspended Step of the Stork*、1991、中国語訳は「鶴鳥踟躕」）のセリフにある詩の最初と最後の一句（同じ文言）である。もともとは、戦火に見舞われたギリシアとアルバニアの国境で流浪する主人公の心境を語るものであった。邱妙津はこの引用で、一人でパリに流離う（自身がモデルの）主人公 Zoe の心境を表そうとしている。小雪のこの発言の直前には、主人公が「噢，你也在這裡嗎？（あら、あなたもここにいたのね）」¹⁴⁰と張愛玲の「愛」¹⁴¹を引用している。「愛」では、主人公の女性が愛する人とこのたった一言しか交わさず、様々な不運に見舞われ年老いる。李琴峰が「我祝福你幸福健康」と「噢，你也在這裡嗎？」を引用したのは、おそらく主人公が結果的には小雪と一緒にいられなくなるという「不幸」な結末を仄めかしているであろう。

3.3.2.生存者の癒し：頼香吟の作品との関連性

この作品においても一つ重要なのは、頼香吟の作品との関連性である。ただし頼香吟の作品は日本語に翻訳されておらず、日本の読者にはなかなか読み取れない部分であろう。前述のように、邱妙津は自死する前に遺稿や遺物の処理を当時東京にいた頼香吟

¹³⁵ 李琴峰『独り舞』、66頁。

¹³⁶ 李琴峰『独り舞』、25頁。

¹³⁷ 邱妙津『蒙馬特遺書』（印刻新版）、10頁。

¹³⁸ 李琴峰『独り舞』、33頁。

¹³⁹ 邱妙津『蒙馬特遺書』（印刻新版）、187頁。

¹⁴⁰ 李琴峰『独り舞』、33頁。

¹⁴¹ 張愛玲「愛」『流言』（上海：五洲書報社、1944）、81頁。

に託している。頼香吟自身は文学賞を受賞しており、数冊の小説集を出している小説家だが、現在に至るまで邱妙津との関係が注目されている。

邱妙津の自死の17年後の2012年、頼香吟は長編小説『其後それから』¹⁴²を上梓した。主人公「我」は留学先のパリで自殺した親友「五月」を偲ぶ。「五月」はパリ留学中に「手記」という小説を出版したが、26歳の時に自殺した。「我」はショックを受け、東京の大学での博士課程への進学を諦めた。遺物と遺稿を頼まれた「我」は、「五月」の代わりに「遺書」という小説を出版すると同時に「五月」の日記も出版する。しかし遺稿などを処理することで強いストレスにさらされ、精神的に追い詰められる中、追い打ちをかけるように父親が亡くなる。「我」は精神科医に通いながら、自分自身のために小説を完成しなければならなくなったのだ。

小説の内容は私小説の匂いが濃く、頼香吟本人が長年、邱妙津の死後に頼まれた遺稿や遺物を処理していた際の心境に重なり合うものと考えられる。2007年末、邱妙津の遺稿の最後の部分、すなわち大学時代から自殺するまでの日記の手稿が、ようやく頼香吟の編集により出版された¹⁴³。つまりこの小説は、邱妙津の遺稿整理が一段落したからこそ書かれたものであると考えられる。

頼香吟の作品に関して、「独舞」の最後に、以下の引用文がある。

頼香吟が言った。「書くことで治療されることは無い。完治しそうになって初めて書けるようになるのだ。書くことは、完治寸前にある深呼吸なのだ。」¹⁴⁴

この引用文は『其後それから』の「後記：生手的天真」に書かれたものである。ただしその少し前に「ある物書きの同業者が言ったことの方が確実であろう：」¹⁴⁵とあるため、厳密に言えば当初頼香吟本人の言葉ではなかったらしい。とは言え、『其後それから』を直接引用したことから、その影響も大きいと考えられる。

『其後それから』と「独舞」は構造的に二つの類似点がある。一つは、両作の主人公（「我」／紀恵）が共通して精神科医に通い、さらに場面において両方とも一部、日記体という（一見）プライベートな文体を使っていること。その狙いは、日記体を使用することによって、読者に主人公の精神的苦痛を一層感じさせることになると考えられる。

¹⁴² 頼香吟『其後それから』（新北市：印刻、2012）。書名はそのまま。

¹⁴³ 邱妙津『邱妙津日記』（上、下冊）（新北市：印刻、2007）。奥付に「編者 頼香吟」とある。

¹⁴⁴ 李琴峰『独り舞』、183頁。

¹⁴⁵ 頼香吟『其後それから』、248頁。原文：「某個寫作同業說得比較準確：」

もう一つは、小説の中で、この小説を書く心境を述べるというメタフィクションの性質である。『其後それから』では、数回にわたって小説を書く作者自身の発話があった。例えば、

「本章はあえて軽い語調で語り始め、あの不愉快なブランクになった診察の過程、そして台北を離れた後の生活を簡単に書くつもりであった。が、五月に関する描写に思いかけず途中で入りこんでしまったが、それは全部私が言及したいと思っではいなかったものであった。五月の偶像化とか、五月の最期の出来事とか、それから顧城の話とか、どれも話したいわけではなかったのに、すべて書いてしまったのだ。」¹⁴⁶

「独舞」では、最後に、「彼女は十年ぶりに小説を書いてみたかった」¹⁴⁷とある。これを「独舞」という小説の語り手が「彼女＝紀恵」と重なる瞬間とみなすことができれば、「独舞」もメタフィクションの性質を持つと考えられる。

しかし、この二つの効果は実際二律背反的な効果を読者もたらす。「日記体」の採用は、読者と語り手の距離を縮めはしたが、メタフィクションという手段の採用は、むしろ読者の小説と（語り手、あるいは小説作者としての）現実との距離に対する認識を混乱させたのである。

『其後それから』では、作者も「五月」のモデルも有名な作家であり、小説や自殺の話も周知されているので、読者は多少ゴシップ的な観点から読むと考えて間違いないだろう。たとえ「独舞」を虚構作品として読んだとしても、私小説的色彩の強い邱妙津と頼香吟の作品だけでなく、私小説作家を主人公とする中山可穂『白い薔薇の淵まで』が言及され、さらに実在する団体や社会事件が大量に扱われているので、「レズビアン」や「レイプ被害」の場面にスポットライトを当てられ、最終的に実話でなくても猟奇的に読まれている可能性は高い。何れにせよ、前述の手法から、「書くことで治療される」よりも、「読まれる」ことにより何かの目的が完成されることにこそ、この二つの小説の主眼があると考えられる。

また、頼香吟は2015年11月に、雑誌に短篇小説「文青之死：A Fond Farewell」といを発表した。この作品はのちに短編集『文青之死』（2016）に収録された。「文芸青年」だった主人公たちが、才能がありながら夭折した Elliott Smith（1969-2003）、Amy Winehouse（1983-2011）等の「the 27 club」（27歳で変死したアーティストたち）のミュージシャンを偲びながら、自分は40代になり、離婚や失業など中年の危機に陥り途方

¹⁴⁶ 頼香吟『其後それから』、130頁。

¹⁴⁷ 李琴峰『独り舞』、220頁。

に暮れる物語である¹⁴⁸。前述のミュージシャンたちの死は、おそらく読者に邱妙津を想起させるしかけであろう。しかし今回、主人公たちは手を取り合い「清白な命が腐敗するまで」、子供達のために「Fight」することに決めるのである¹⁴⁹。「独舞」の最後に、主人公が自殺せず、旅先のオーストラリアで再会した小雪たちの助言で生きて行くことを決めたという結末は、頼香吟のこのような作品を下敷きにした可能性が高いと思われる。

3.3.3.中国語圏の他のテキスト引用について

前述のように、本作は邱妙津の自死に関する語りを中心に物語を展開したが、物語の構造はむしろ頼香吟『其後それから』に近い。しかし、中国語圏の他のテキスト引用にもたいへん力を入れている。

まず作中に出ている流行歌から見てみよう。第3章の新宿二丁目のレズビアンバーで、主人公の友人・しょっちゃんがカラオケで、松たか子「ありのままで」（2013）を歌ったあと、主人公はあえて店内の人がほとんど知らない台湾のバンドF.I.R.「刺鳥」（2005）をリクエストした¹⁵⁰。この曲はまさに主人公の高校時代のヒット曲であった。第6章の高校時代の回想では、当時の恋人・小雪が、「刺鳥」は一生に一度美しい歌を歌うために、長い木の棘をめがけて自ら飛込み、棘に刺されて死ぬ直前に苦痛のあまり美しい声で歌う鳥のことだ、と説明している¹⁵¹。このようなロマンチックな伝説は、のちに第8章で主人公がレイプされるシーンで、「何が茨の鳥よ。何が世界で一番美しい歌声よ」¹⁵²という箇所ですべて再び提起される。男性の性器に「刺される」ことでこの伝説の皮肉さを説くという作者の意図が読み取れる一方、邱妙津が精神的に追いつめられてナイフで自分の心臓を「刺した」ことも思い出される。主人公（そして邱妙津）の自死は、美や芸術（「美しい歌声」）のためというより、運命に操られて精神的な負担を負えなくなったことの象徴とも読み取れよう。

また、日本での唯一の恋人・薫との描写を中心とした第11章では、台湾のテレビドラマ『還珠格格』（1997、邦訳『還珠姫』、原作は瓊瑤）第一シーズンのテーマソング・動力火車「等」（1997）の歌詞を引用している¹⁵³。主人公は歌詞にあるような自由自在な生活に憧れていたと語るが、『還珠格格』はそもそも清代の皇室を背景とした封建的異性愛者のファンタジーであり、また動力火車はパイワン族の男性二人のユニットであ

¹⁴⁸ 頼香吟「文青之死：A Fond Farewell」、初出は『印刻文学生活誌』2015年11月号、本稿は同氏の短編集『文青之死』（新北市：印刻、2016）、199-256頁より引用。

¹⁴⁹ 頼香吟「文青之死：A fond Farewell」『文青之死』、256頁。

¹⁵⁰ 李琴峰『独り舞』、18-19頁。

¹⁵¹ 李琴峰『独り舞』、36-39頁。

¹⁵² 李琴峰『独り舞』、58頁。

¹⁵³ 李琴峰『独り舞』、88頁。

ることから、この歌詞で想起されるのは陽気な（異性愛者）男性の生活と考えられる（実際主人公・紀恵がこの曲で曹操「短歌行」を想起したのは、まさにその証左であろう）。その意味でこの場面は、異性愛者の世界で肩身の狭い思いをしながら生きる主人公の生活の逆説的な存在であると考えられる（そしてその失敗も約束されたようなものである）。男性的な颯爽とした生き方に憧れを持つ点は、自らを「男役」と想像する邱妙津に俄かに重ねられているかもしれない。

一方、大学時代の日記に出てくるのは、タイトルだけが言及された中国作家余華の名作『活著』（1992）¹⁵⁴と、台湾作家林文月のエッセイ集『京都一年』の2007年新版の序文である。前者の主人公・徐福貴は激動の中国近代史を経験し、家族は全員非業の死を遂げる。これはおそらく主人公・紀恵の絶望を象徴するものであろう。また、林文月『京都一年』は作者が1970年に京都で訪問学者となった時の滞在記だが、「独舞」で言及されたのはエッセイ集の内容ではなく、亡くなった日本の友人を偲ぶ「序文」の一節であり¹⁵⁵、やはり「死」というキーワードと繋がっている。一方ここで主人公が、海外で地元の女性と一生の親友になったという林の描写を提起するのは、台湾で「独舞」していた李にとって、トラウマを想起させる台湾を離れ、憧れていた海外で新しい友人を作ろうとする期待が看取できる。

3.4. 『独り舞』の背景を考える

次は、『独り舞』（そして改題される前の「独舞」）が創作された背景について考えてみたい。

『独り舞』という作品における「レイプ」と「レズビアン」という二つのキーワードは、実は様々な共時性を持つ話題である。まず、恰も「独舞」の受賞が公表された一週間後の4月27日に、台湾の若手女性作家・林奕含氏が自殺した。彼女は2017年2月上旬に、『房思琪の初恋の樂園』¹⁵⁶という長編小説を上梓したばかりであった。この作品は著名作家駱以軍など文壇やジェンダー運動界の著名人の推薦を得て、4月末の時点ですでに第5刷という異例のヒット作となっていた。文学好きの女子高生・房思琪が、進学塾の国文の教員に言葉たくみに言いくるめられて、長期間繰り返しレイプされ、最終的に精神を病み精神病院に入る物語である。表紙には「実話」の改作とあるうえに、作者の林奕含が「容姿端麗の才女」でありながら、長期間精神疾患に悩んでいたことが報じられたため、物語が本人の実体験ではないかという問い合わせが殺到した。林自身は

¹⁵⁴ 余華『活著』、初出は『收穫』1992年6月号、本稿は『余華作品集』第3巻（北京：中国社会科学出版社）、1995年版による。

¹⁵⁵ 林文月「新新版序兼懷悦子」『京都一年』（台北、三民、修訂二版2007〔1971〕）。

¹⁵⁶ 林奕含『房思琪の初恋樂園』（台北市、遊擊文化、2017）。日本語訳は泉京鹿訳『房思琪の初恋の樂園』（東京、白水社、2019）。

それを否定し、作中の女の子たちの苦痛に「共感して欲しい」¹⁵⁷と、インタビューなどで繰り返し説明していた。林の死後、彼女の両親が『房思琪の初恋の樂園』は娘の実体験を改編したものであることを公表した。その後、林と「交際したことがある」進学塾の教員が暴露されたが、レイプに関しては証拠がなく不起訴処分となった。このことは、現在に至るまで「#MeToo」運動の中で言及され続けている。後述のように、「独舞」は文学少女が文学を執筆して自分を救おうとする物語でもあるが、『房思琪の初恋の樂園』はその逆で、「文学に叛かれて」¹⁵⁸文学的言語をたくみに操る男に悲劇に追い込まれたのである。

また、加筆された『独り舞』が出版された2018年3月の前後にも、セクハラやレイプの被害者（主に女性）が挺身して加害者を摘発する「#MeToo」運動が世界中に展開されている。日本でも、ジャーナリストの伊藤詩織氏が政権に近い記者にレイプされたことを公開したり¹⁵⁹、世界的知られている写真家荒木経惟の「ミューズ」と言われていたモデル・KaoRi氏が、十数年に渡りセクハラなどの不利益を受けてきたことを自ら公表したりした¹⁶⁰ことで、遅まきながら、ようやく注目を集め始めた。「独舞」の受賞から上梓までの約一年間で、世界中が女性のレイプやセクハラ問題に注目をしており、「独舞」もこの問題について、文学の立場から問題提起をしたと言えよう。

三橋順子によると、レズビアンの問題に関してはここ数年日本でLGBTをはじめとする性的マイノリティが注目を集めたばかりだという。さらに三橋は、「LGBTブーム」に先鞭をつけたのは2012年の『週刊ダイヤモンド』と『東洋経済』¹⁶¹の特集であり、LGBTという言葉が爆発的に使用されるようになったのは2015年以後のことであるという¹⁶²。つまりLGBTは今日的话题なのである。さらにいうと、『群像』2017年6月号が発売された5月6日は、「東京レインボープライド」のパレードの日でもあったのだが、「独舞」もその一年か二年前のパレードについて描いたのであった。またその二週間後の5月24日に、台湾の司法院大法官会議は釈字748号憲法解釈を公表し、台湾の現

¹⁵⁷ 女人迷編輯 Abby「我的痛苦不能和解 專訪林奕含：「已經插入的，不會被抽出來」」ウェブサイト「女人迷」2017.3.16.、<https://womany.net/read/article/13052>、最終閲覧2019.12.3.。当ページは林氏死後に追思するために編集されたことがあると見られる。

¹⁵⁸ 林奕含『房思琪の初恋樂園』、222頁。原文は「是文學辜負了她們」。

¹⁵⁹ 伊藤詩織『Black Box』（東京、文芸春秋社、2017）

¹⁶⁰ KaoRi「その知識、本当に正しいですか?」、2018.4.1.、https://note.mu/kaori_la_danse/n/nb0b7c2a59b65、最終閲覧は2019.12.3.。

¹⁶¹ 共に2012年7月号。

¹⁶² 宇田川しい「LGBTブームの課題とは? 三橋順子さんが指摘する光と影「人権より先に経済的側面が注目された」」、HUFFPOST 日本版 2017.5.3.、https://www.huffingtonpost.jp/2017/04/25/junko-mitsuhashi_n_16222104.html 最終閲覧は2019.12.3.。

行民法における婚姻に関する条文は、同性間の婚姻関係を守ることができないため、憲法違反と宣告され、2年以内に現行法を修正するよう命じたのであった¹⁶³。

それ以外に、この作品が注目を受けたのは、「群像新人小説賞」優秀作の入賞であった。審査委員の一人である野崎歓が述べたように、小説の中の「随所に散見する日本語の不器用さ、不自然さについては、どの委員もむしろポジティブにとらえておられた」¹⁶⁴。非母語話者の作家の日本語の表現はマイナスとして考えられがちだが、それが逆にその作品をより豊かなものにしているのである。同じく審査委員の多和田葉子はドイツ語と日本語を用いる多言語創作者だが、その審査所見ではリービ英雄と楊逸、そして三年前の第57回で中国語漢字に日本語のカナを振った異色作品『吾輩ハ猫ニナル』¹⁶⁵で受賞した横山悠太に言及している¹⁶⁶。これは、同賞がいわゆる「新しい日本語」の表現を求めていることを裏付けている。さらに2015年の東山彰良『流』¹⁶⁷の直木賞受賞や、2016年の温又柔エッセイ集『台湾生まれ 日本語育ち』¹⁶⁸の日本エッセイクラブ賞受賞など、台湾出身者が台湾に関わる作品を書き、文壇に影響を与えていることもその背景となっている。

以上述べた「独舞」の執筆中や修正中に同時に発生した以上の出来事、そして受賞の背景から、LGBT、性暴力、そして越境者などの話題は、アジアないし世界中で共時性を持ち、文学作品はこのような「連帯」において様々な問題を共有できることがわかる。このような「連帯」への希求は、中山可穂のような「ゲイ・パレード」に興味を持たない日本のレズビアン小説の作者より、いかにも台湾「同志文学」的であることが看取できる。

3.5.結びに：「連帯」、そして日本語の「台湾同志文学」の誕生

「独舞」の物語が最終的には「悲劇に終わらない」のは、主人公が自殺の直前の旅で出逢った人々から生きる意欲をもらったことや、さらに旧友小雪や小竹たちによってその自殺が阻止されたことが影響している。レズビアンたちは文学作品を共有することで連帯し、最終的に主人公は再び「文学に救われた」のである。よって、小説の中で何回も引用された文学作品、その作品の中に見られるイシューの間の政治的連帯、そして国境を越えた人と人との連帯は、この小説の主眼であろうと考えられる。

¹⁶³ 中華民国司法院ウェブサイトを参照。その内容についての説明は、鈴木賢、前掲文に詳しい。

¹⁶⁴ 野崎歓「選評」『群像』2017年6月号、231頁

¹⁶⁵ 横山悠太『吾輩ハ猫ニナル』（東京、講談社、2014）

¹⁶⁶ 多和田葉子「選評」『群像』2017年6月号、227頁

¹⁶⁷ 東山彰良『流』（東京、講談社、2015）

¹⁶⁸ 温又柔『台湾生まれ 日本語育ち』（東京、白水社、2016）

本章は、「独舞」の中の文学作品ないし歌詞などの引用に焦点を当て、物語との関連性を論じてきた。邱妙津の作品とその自死事件を中心に語りが展開されているが、物語の全体的な構造はむしろ賴香吟の『其後それから』を中心とする作品群に近い。その意味でこの小説は、当初から自殺者ではなく生存者の語りであり、主人公を「死なせない」語りとして書かれたことがわかる。

特筆すべきことは、『独り舞』で引用された中国語圏のテキストは、邱妙津『ある鰐の手記』、余華『生きる』、瓊瑤『還珠姫』を除けば、日本語の翻訳が無いということである。テキストの性質から考えると、おそらく今後の翻訳も難しいだろうから、日本の読者の多くは読むことができないだろう。しかし、作者・李琴峰が小説の中で引用し言及することによって 1990 年代以後台湾で興起したレズビアンないし LGBT に関する言説が、初めて国境を越え、作品の連帯が可能となったのだ。性的マイノリティの問題だけでなく、外国での言語や国籍のディアスポラの問題、レイプの被害などの問題も、日本の読者と共有することができる。つまり、李琴峰は台湾同志文学に関連するテキストを引用することにより、中国語圏の作者と日本の読者の間の連帯を可能にし、そして小説の中で複数の問題に言及することにより、イシュー、イズムが異なる人々の間の連帯をも可能にした。作中のレズビアン達の連帯と同様、このようなテキストの直接および間接の引用による連帯により、小説は現実社会で様々な問題で苦しむ人々を向き合えるようになってきたのである。

李琴峰は「独舞」でデビュー後、2017 年の年末には「ディアスポラ・オブ・アジア」と「流光」を発表した。前者は中国語を共有する若者のさすらうアイデンティティを語り¹⁶⁹、後者は世の中からやや乖離した BDSM（同意に基づいて虐待行為を模擬する性的プレイ）の世界を描いている¹⁷⁰。さらに、2019 年に発表した「星月夜（ほしつきよる）」は、中国人が日本で受けている差別や、中国新疆ウイグル自治区におけるジェノサイドをテーマにしている¹⁷¹。主人公が日本在住の 20 代後半の台湾人レズビアン女性であるという点において、「独舞」の主人公や作者本人と共通する問題意識を持っていることは明らかである。日本語で書かれたものとは言え、目指すのはむしろ台湾の政治性の高い「同志文学」であろう。「同志文学」の文脈が、どのように日本（語）文学に受容されるかは、今後の李の作品の焦点の一つであると考えられる。

¹⁶⁹ 李琴峰「ディアスポラ・オブ・アジア」『三田文学』2017 秋季号。

¹⁷⁰ 李琴峰「流光」『群像』2017 年 11 月号。

¹⁷¹ 李琴峰「星月夜（ほしつきよる）」『すばる』2019 年 12 月号。

第4章 マレーシア華人系「同志文学」を考える：楊邦尼「毒藥」の「当事者性」論争を手掛かりに¹⁷²

4.1.まえがき：「同志文学」における主体性の複雑さ

「同志文学」とは何か、という質問に対して、未だに明確な答えは出されていない。それは、「同志」（つまり性的マイノリティの当事者）が書くものなのか、「同志」を書くものなのか。前者であれば作品の外部要素にまでは届かず、後者であれば、書かれた「同志」たちはただの他者に過ぎず、主体性や能動性は失われてしまう。

このような問題に直面し、三木直大は、朱偉誠『同志文学小説選』の序文と紀大偉『正面與背影：台湾同志文学簡史』を引用しながら「同志文学史の政治学」を論じ、「同志文学」というカテゴリーは書き手と読み手の共犯関係にあること、あるいは紀大偉の言うような「多様な主体性」から生み出されるものであることを指摘した¹⁷³。

しかし、90年代に勃興したのは「同志文学」だけではない。女性、本土派、外省人第二世代、さらに原住民¹⁷⁴、マレーシア華人系（以下「馬華」）などのマイノリティの当事者の文学も、戒厳令の解除や文学賞ブームの影響で数多く書かれるようになった。言論統制が緩くなった「中華民国」の国境内では、「中華民国」という「大きな物語」に対抗し、マイノリティの人々が個人の立場から「大きな『台湾』物語」¹⁷⁵に参加することになった。しかしこれらの人々が衝突しないわけがない。またこれらの文学作品は、「中華民国」、台湾文壇の内部だけではなく、外国の文壇から影響を受ける可能性、そして外国の文壇に影響を与える可能性もある。「同志文学」に関して言えば、「同志」概念そのものの中国語圏における広がりによって、今後「台湾に限定した同志文学」を研究することの意味がますます問われていくことになる、¹⁷⁶と三須祐介は指摘する。

一方、台湾以外のアジアや華人圏社会は、未だに性的マイノリティに対して厳しい環境にある。台湾の同志文学は他の中国語圏の地域に影響を与える可能性についても考慮しなければならない。

本章では、マレーシアの華人作家楊邦尼の作品における複雑な当事者性の問題を中心に、マイノリティ文学における当事者性の問題及びその読みの（不）可能性について考

¹⁷² 本章の内容の一部は、すでに論者は速水信介というペンネームで「重服那方〈毒藥〉：七年之後再回首」（『季風帯』6号〔クアラルンプール：三三出版社〕、2017年12月）として発表されしている。

¹⁷³ 三木直大「阮慶岳短編小説の構造と「台湾同志文学史」の政治学」『アジア社会文化研究』16号（東広島市、アジア社会文化研究会、2015）、67頁。

¹⁷⁴ 日本語で「先住民族」と称されたが、本論文では当事者が社会運動を起こし、台湾現地の法律（中華民国憲法増修条文）の修正まで勝ち取った「原住民」という用語を使う。

¹⁷⁵ 赤松美和子『台湾文学と文学キャンプ』、128頁を参照。

¹⁷⁶ 三須祐介「前衛としての台湾文学—1990年代文化論再考—国際シンポジウム参加記」『日本台湾学会ニュースレター』32号（2017.3.）、15頁。

えていきたい。特にこの論争は、「同志」文学や HIV（ヒト免疫不全ウイルス）文学における人権問題や存在意義を問い掛けるだけでなく、マレーシア華人系文学（以下「馬華文学」）の作者の内的矛盾や、「華人」主体と「同性愛者」主体の葛藤の問題などにも関わっている。さらに、輻輳するマイノリティの主体性はいかに影響しあっているのか、また社会の主流にある文化や文壇にとってどのような存在であるのかについても考えていきたい。

4.2. 「毒薬」論争、あるいは「神話はもはや」事件

4.2.1. 楊邦尼について

ここでまず、楊邦尼を紹介しよう。楊邦尼、本名楊徳祥（ローマ字表記：Leung Teuk-seung）¹⁷⁷は、1972 年、マレーシア西部のジョホール州・クライ（マレー語表記：Kulai、現地中国語表記：古来、以下同）に生まれた。祖先は中国広東省大埔の客家人である。ジョホールバル（Johor Bahru、新山）の「独中」（中国語で教育を行う私立中学・高校）寛柔中学（Foon Yew High School）卒業後、1990 年代に台湾に留学し、国立僑生大学先修班¹⁷⁸を経て、国立台湾大学中国文学系に入学、この時に文化評論誌『島嶼辺縁』に接し、さらに台湾の大学構内における最初のゲイ・サークル「男同性戀問題研究社 Gay Chat」に参加した。台湾の同性愛研究の最初の論集『同性戀邦聯』¹⁷⁹の執筆者の一人でもある¹⁸⁰。帰国後、南京大学中国文学系のシンガポール「海外班」で文学修士号を得た。「独中」で中国語を教えたこともあるが、現在は進学塾などで英語を教えている。国立台湾大学に留学していた時期に中国文学系の雑誌『新潮』に投稿したこともあったが、本格的にマレーシアの新聞や雑誌に投稿するようになったのは、30 歳以後、つまり 2000 年代以後のことである¹⁸¹。著書に散文集『古來河那邊』（2013）¹⁸²、『浮沉簡史——城市，晃蕩，與友愛』（2015）¹⁸³、詩集『刪情詩：在我手中微軟勃起』（2017）¹⁸⁴などがある。

¹⁷⁷ 「楊」は客家語や広東語のローマ字表記では本来「Yeung」とされる。だが楊によると、祖先が戸籍を登録するときに発音を間違えられたため、今なお一家のパスポート等公式文書では「Leung」と表記されているという。因みに Facebook などの SNS では、Benny Leung という名前を使用している。

¹⁷⁸ 「国立僑生大学先修班」は、1955 年に「僑生」（中華系の外国籍学生や海外に住んでいた中華民国籍を持つ学生）のために設置され、修了以後は学生を各大学に分配する一年制の短期学校のことである。2006 年、「国立僑生大学先修班」は国立台湾師範大学に吸収合併され、「国立台湾師範大学僑生先修部」となった。

¹⁷⁹ 國立台灣大學男同性戀研究社編『同性戀邦聯』（台北、號角、1994）。

¹⁸⁰ 楊邦尼「想我大學的同志社團 Gay Chat」『號外』437 号（2013. 12.）

¹⁸¹ 楊邦尼に関する詳しい事実は、著書の著者紹介と、2017 年 3 月に本人に対してのインタビューから編集したものである。また彼のブログ「寫在邊緣」も参照している。

¹⁸² 楊邦尼『古來河那邊』（セランゴール州、大将出版社、2013）

¹⁸³ 楊邦尼『浮沉簡史——城市，晃蕩，與友愛』（セランゴール州、大将出版社、2015）

¹⁸⁴ 楊邦尼『刪情詩：在我手中微軟勃起』（クアラルンプール、三三出版社、2017）

2009 年、楊はゲイの HIV 感染者の服薬体験に基づいて「毒薬」を創作し、マレーシア最大の華文文学賞である第十回「花蹤文学獎」に参加、決選まで残ったが最終的に落選した¹⁸⁵。加筆と修正後、2010 年に「中國時報文学獎」の散文賞を受賞している。「毒薬」はのち『九十九年散文選』（2011）と¹⁸⁶『與島漂流：馬華當代散文選 2000-2012』（2013）¹⁸⁷に収録されたが、前述した散文集などには収録されていない。

4.2. 「神話はもはや」事件

しかし、楊邦尼の名前が台湾の文壇で広く知られたのは、おそらく「毒薬」という作品の受賞自体ではなく、これにまつわる当事者論争、すなわち「神話はもはや（神話不再）事件」である。

それは2012年10月7日、「毒薬」受賞の二年後のことであった。当時の審査委員で、同じくマレーシア出身の作家鍾怡雯（Chong Yee-Voon、1969-、マレーシア西部のペラ州イボ市出身、現台湾・元智大学中国語文学系主任）は、聯合報の副刊に「神話不再」という散文を発表して、台湾の文学賞の「怪現象」を指摘し、以下のように記した。

2 年前の出来事だが、やはり吐き出さないことにはおさまらない。某新聞の文学賞の散文賞の最終候補に残ったうちの二篇は、特異な自伝体散文で「虚構」の疑いがあった。四人の審査委員の意見が異なったので、主催側は単刀直入に電話で作者に「事実」かどうか尋ねることにした。先住民族の題材で作品を書いた作者は虚構であることを誠実に認め、当然ながらそれが原因で落選した。もう一人の自分のエイズの「完治史」を書いた作者は、自身の経験であると大言を吐いて恥じなかった。そのため、彼が受賞したのである。それはマレーシアの同郷者だった。この作品はいくつかの文学賞を彷徨してきたため、まさにこの瞬間を待っていた。賞金は二十万元であった。その年は新聞社の六十周年記念で、賞金はとりわけ高かったのだ。¹⁸⁸

¹⁸⁵ この時の最終審査の記録は、『花蹤文匯』第10号（セランゴール州、星洲日報、2011.8.）で読める。

¹⁸⁶ 宇文正主編『九十九年散文選』（台北、九歌出版社、2011）。

¹⁸⁷ 林春美、陳湘琳編『與島漂流：馬華當代散文選 2000-2012』（セランゴール州、有人出版社、2013）

¹⁸⁸ 以下の引用は全て鍾怡雯「神話不再」『聯合報』2012.10.7.、D3版から。原文：「兩年前的，不吐不快。某報的散文決審，其中兩篇題材特殊的自傳體散文有『虛構』之疑。四位評審各執一辭，於是主辦單位決定單刀直入，當下去電詢問兩位作者所寫是否『屬實』。寫原住民題材的作者老實承認，純屬虛構。他理所當然落選了。另一位寫自身愛滋病『痊癒史』的作者大言不慚，此乃自身經歷。於是他得獎了。得獎的是馬來西亞同鄉。這篇散文流浪過幾個文學獎，等待的不外乎這一刻，二十萬。那年是報社慶祝六十年，獎金特別高。」

鍾怡雯は、「嘘をついて大賞を取った」この「マレーシアの同郷者」を批判し、「マレーシアの文壇はそう大きくなく、面子は決まりきっているが、誰かがエイズに感染したことなんて聞いたことはない。」¹⁸⁹と主張した。また、作品自体については、他人事を語るように感情を欠いているうえに、「ただの堅苦しいエイズの資料の羅列」であるという技巧面の問題があるとしている。さらには、エイズが全快することはありません、エイズの病状を周囲に隠し続けることも不可能であること¹⁹⁰、エイズのカクテル療法¹⁹¹の発明者で台湾系アメリカ人の何大一（デイビッド・ホー、David Ho, 1952-）の名前を書き間違えていることなども指摘されている。こうしたことから、鍾はこの散文が「虚構」であると判断し、この「マレーシアの同郷者」は「エイズを利用し、同志を利用し、そして読者や審査委員の同情心も利用した」¹⁹²と批判した。さらに鍾は、このように同情心を利用して賞金を狙う作品が急増したことに憤慨し、「やはり私たちの年代の、まだ光輝いたような文学賞がなつかしい。でもおそらくその神話はもはや存在しないのだ。」¹⁹³と締めくくった。

鍾の告発から一週間後の2012年10月14日、楊邦尼による「鍾怡雯の『神話はもはや』（鍾怡雯的〈神話不再〉）」という文章が、同じく聯合報の副刊に掲載された。その中で、楊邦尼は自分がその「マレーシアの同郷者」であると自ら告白し、反論を加えている。楊は、個人がHIVの感染者であるかどうかは公に討論されるべきことではないことや、「毒薬」は「花蹤文学獎」の次に「時報文学獎」に応募したにすぎないのであるから「いくつかの文学賞を彷徨した」というのは事実ではないことを記している。さらに、鍾怡雯の彼に対する誹謗中傷に抗議し、HIVやエイズについての鍾の知識が正確でないことも指摘した。また、2010年の審査会議の時に、彼は当初自分が感染者であるかどうかについて明言しなかったが、その後文学賞のスタッフに電話で尋ねられたので承認せざるをえなかったことについても述べている¹⁹⁴。

さらにその三日後の2012年10月17日、聯合報の副刊は鍾怡雯の「誠信」という短い返信を掲載した。鍾怡雯は、「楊と親交の深いマレーシア詩人やメディアの主任や同志作家」の三人に聞いたとして、楊邦尼の電話での告白に対し、「真実はただ一つであり、弁解の余地はない」と憤慨を表明した¹⁹⁵。

鍾のこのような発言は結局、台湾の「同志運動」界と若手文壇の反感を買うことになった。例えば、ゲイであると公表している詩人羅毓嘉（1985-）は、鍾の「誠信」が掲載さ

¹⁸⁹ 原文：「馬來西亞的寫作圈子那麼小，來來去去就那些人，我可沒聽說誰得了愛滋。」

¹⁹⁰ 「今は外見からは分からない治ったなんて、可能だろうか？エイズなのに。」原文：「治癒得外表完全看不出，可能嗎？愛滋病耶。」

¹⁹¹ 複数の薬物を使用する「HAART療法」を指している。「カクテル療法」（原文：雞尾酒療法）は俗称。

¹⁹² 原文：「這位作者消費了愛滋病，也消費同志，同時也利用了讀者或評審的同情心。」

¹⁹³ 原文：「我還比較懷念我們那時代，還戴著光環的文學獎。只怕神話不再。」

¹⁹⁴ 楊邦尼「鍾怡雯的〈神話不再〉」『聯合報』2012. 10. 14.、D3版。

¹⁹⁵ 鍾怡雯「誠信」『聯合報』2012. 10. 17.、D3版。

れた同日にブログで鍾を批判した。羅は文学賞が「真実であるかどうか」を基準として受賞の可否を決めることこそ鍾怡雯自身が批判した「怪現象」であり、HIV／エイズ患者は現実の社会でカミングアウトすることができないため、文学の虚構性は唯一の救いであると述べている¹⁹⁶。文芸評論ブロガー唐小宇（1986-）はさらに、一番自由なメディアであるべき文学作品が他人のプライバシーの告白を強要するものに成り下がったとして、文学賞の主催側と審査委員の鍾怡雯を批判した¹⁹⁷。また、HIV／エイズに関する知識の錯誤（発病しなければ患者と一般人の外見が変わらないことや、HIV の治療は「完治がなくウイルス量を低くコントロールすることなど）も批判の焦点になっていた¹⁹⁸。

2012 年の論争で鍾怡雯が批判したのは、一見すると散文というジャンルにおける当事者性の問題のようだが、その言論からは同性愛者、HIV 感染者、エイズ患者の人権問題と、馬華文学、同志文学、原住民文学などのマイノリティに関する文学ジャンルの当事者性とその存在の意義、そして「文学賞」のメカニズムに関わる問題が浮かび上がっている。

4.3. 「同志文学」としての「毒藥」

ここで『中国時報』に掲載された楊邦尼「毒藥」を簡単に紹介したい。「毒藥」は三千字余りの散文である。冒頭で魯迅「藥」（1919）の一節を引用し、その後「一、毒」「二、藥」「三、毒藥」と三節に分かれている。ただ「意識の流れ」に従って書かれているため時系列順には並んでいない。大まかに言えば、「一、毒」と「三、毒藥」には主に「現在」について、「二、藥」には回想が書かれている。「一、毒」は「私（原文：我）」が HIV 感染者ということ告白するもので、他人との性的交渉で感染したと見られるが、薬物治療はすでに始まっており、ウイルス量は測定できないほど下降している。体調は投薬のおかげで安定しているが、めまい、体の発熱等の副作用に悩まされている。「二、藥」では「私」が初めて服薬したときの副作用の苦しさを回想する。同居する両親には病状を知らせたくなかったために、その苦痛は生理的なもののみならず

¹⁹⁶ 最初は2012年10月17日に、ブログで「必須多談，因為事涉愛滋」というタイトルで掲載されたが、のちタイトルを変えて雑誌に登載された（「文學不該「社會盲」 談散文創作的紀實與虛構」『人籟論辨月刊』98期（台北、中華利氏學社）、2012.11.、4-5頁）。散文集『棄子圍城』にも収録されている（羅毓嘉「允許魍魎現身」『棄子圍城』（台北、宝瓶文化、2013）、290-294頁）。

¹⁹⁷ 唐小宇「面對這樣的問題，當事人該如何回答？」
http://kaorikuraki.blogspot.jp/2012/10/blog-post_25.html（2014.10.25.、最終閲覧：2019.12.4.）

¹⁹⁸ 例えば翟翹（1987-）は、鍾怡雯が指摘している文学賞の怪現象の存在を認めているものの、HIV 感染者とエイズ患者（発症者）を混同しているなど、彼女が言い張っている散文の真実は「エイズに対するデタラメな認識」に基づくものではないかと批判している。翟翹「愛滋的可能」『聯合報』、2010.10.12.、D3版に参照。

精神的負担となつてのしかかった。「私」は親友 H に、副作用の苦しみから自殺を考えていることを吐露し、発病直後に H と一緒に病院に行った体験を思い出す。「三、毒薬」では、時間軸が現在に戻されている。「私」はようやく勇気を持って、治療薬の副作用と治療する薬物の薬名を羅列し、治療方法の進歩について述べ、さらに一旦薬を飲み始めたら、死ぬまで毎日定刻に飲まなければならないことも述べる。「私」はスポーツを始め、腹筋が「見え隠れする」（若隠若現）までトレーニングして、体の中のウイルスと「子と手を執りて、子と偕に老いん」（執子之手，與子偕老¹⁹⁹）と「決意」する。

「一、毒」の二段落目にはこのような文がある。

私が何回病院に出入りしたのかはもうとうに忘れた。ひっそりと、こっそりと、ばれたら死ぬから、知り合いに会ってしまうのが怖い。あら、あなたも病院に来たの、病気なの、薬をもらうの、何の病気なの、と。否、私は荒人と巫女の真似をしていて、道連れのない旅人で、一人なのだ。誰かに会ってしまったとしても、透明人間であるはずだ。（下線は筆者による）

ここの「荒人」とは、女性作家朱天文（1956-）の長編小説『荒人手記』（1994）²⁰⁰を意識して書いたものだと考えられる。『荒人手記』の主人公は、一人称のゲイで、自分がかつて愛した台日ハーフの男性を偲んでおり、その男性はすでにエイズで亡くなっている。作中の「荒人」とはゲイを指している。また、「巫女（原文：女巫）」、「道連れのない旅人（原文：不結伴的旅行者）」という言葉も、同じく朱天文の長編小説『巫言』（2008）よりの引用であり、「巫人」は「小説家」を、「道連れのない旅人」は作中に登場する末期ガンの患者を指している。

「毒薬」は文章の風格においても朱天文の『荒人手記』の影響が強く見られ、『荒人手記』を念頭に置いて創作したものといってもよいほどである。例えば「三、毒薬」で、薬の副作用と薬の名称を羅列する一節は、以下のようにになっている。ここで少々長いが引用しておきたい。

経口薬を飲み始めた数年後、私はようやく怯えながら薬についている英語の説明書を読むことができるようになった。開けられたパンドラのブラックボックスには、ギッシリとした英語の魔法が並ぶ。作戦の図譜を発掘するように一字一句で薬の効果を読む。震えながら読んでいてわかったのは、これは

¹⁹⁹ 『詩経・邶風・擊鼓』より引用。

²⁰⁰ 朱天文『荒人手記』（台北市、時報、1994）。以下の引用は1997年の2版による。

私が一つ一つ経験してきた神経系の症状なのだ。最もよくあるのは不眠症、無気力、注意欠陥、連続して襲ってきた悪夢である。副作用は次から次へと続き、知らない英単語がたくさん出てきて、一々辞書を引くと、発疹、目眩、吐き気、頭痛、倦怠感、アレルギー、認知失調、混淆、マヒ、眩暈、肝炎、不安、欲求不満、妄想、興奮、妄語、狂気、感情波動、酩酊、幻視、精神異常、精神衰弱、執着、痙攣、痒み、腹痛、かすみ目、光アレルギー反応、皮膚炎、肺炎、自殺傾向。私は読みに耐えられずに、立ち上がって、陽気をひと口でも吸おうと。

私はウイルスの生態を想像する。開発されていく薬はウイルスのいかにもずるい変化を追いかけて行く。言葉を変えると、ウイルスは薬を抗っているのだ。ほらその薬名も、くるくる回って、まるで早口ことばのようだ。

^{ピラセプト} 維樂命、^{ストクリット} 施多寧、^{コンビビル} 雙汰滋、^{ゼリット} 賽瑞特、^{クリキシパン} 佳息患、^{レトロビル} 立妥威、硬いカプセルの
^{サキナビル} 沙奎那維。

このような羅列は、『荒人手記』の「紅緑色譜表」などの大量な名詞の羅列を想起させる。その一節を引用する。

恐竜になったおれの目に唯一入ってくるのは、色彩研究の論文で、中国の詩歌における赤と緑二色の視覚イメージに関するものだけだ。

おれはいつもそれを持ち歩いてお経のようにくりかえして暗誦した。実はこの論文はほとんど網羅的な色彩元素周期表に近い。それには赤と緑に関するいくつかの色彩系統の、さまざまな名称が羅列されている。日本人が書いた中国色彩総覧だけ見ても、マンセル表色系に従って明るい順に並べられ、明度が同じものは彩度の高いもの順になっていて、赤は一四〇種類もある。ち

よっと見てみると、色彩譜の七・五Rの赤には、^{ルンホン} 潤紅、^{タンツァンホアホン} 淡蔵花紅、^{チチアホン} 指甲紅、^{クチアホン} 穀鞘紅、^{タンタオホン} 淡桃紅、^{タンインスホン} 淡罌粟紅、^{ピンクオホン} 蘋果紅、^{チアホン} 頰紅、^{クアランホン} 瓜瓢紅、^{ティエシュイホン} 鉄水紅、^{ツァオメイホン} 草莓紅、^{チュホン} 曲紅、^{ファルオホン} 法螺紅、^{クイホン} 桂紅、^{リウホアホン} 榴花紅、^{コンホン} 汞紅、^{ボンシアホン} 烹蝦紅、^{イエンチホン} 胭脂紅、^{シエアオホン} 蟹螯紅。

緑色の色彩譜の一〇GYの緑には、^{アイベイリュ} 艾背緑、^{チアリンシュイリュ} 嘉陵水緑、^{ネンホリュ} 嫩荷緑、^{ファンチニャンリュ} 紡織娘緑、^{ジュイリュ} 水緑、^{シウチウリュ} 綉球緑、^{タンランリュ} 螳螂緑、^{ワントウリュ} 豌豆緑、^{ユスイリュ} 玉髓緑、^{チンツァイリュ} 青菜緑、^{バリリュ} 巴黎緑、^{チンメイリュ} 青梅緑、^{インシリュ} 螢石緑、^{ヤンリュ} 秧緑、^{ウオチユリュ} 萵苣緑、^{トウリュ} 豆緑、^{リウリリュ} 琉璃緑、^{ツァオリュ} 藻緑、^{ツォツァンリュ} 柞蠶緑、^{マイランリュ} 麦浪緑、^{シヨタンリュ} 蛇膽緑、^{チントウリュ} 青豆緑、^{タンホイリュ} 淡灰緑、^{シエンリウリュ} 深琉璃緑、^{フビンリュ} 浮萍緑、^{ツァオリュ} 草緑、^{ツァンリュ} 紫杉緑。

文字のロジックを避け記号性さえ捨てると、文字は万華鏡のなかの碎片となって、華やかな景観をなす。おれはそのなかに入って我をわすれ、純粹な色彩感覚の花園でハエが複眼でものを見るように飛びまわった。²⁰¹

このような文字の羅列は、物語を推進するというよりも、むしろ「文字の論理から逃げ」ているものであり、これは施淑の言葉を借りれば「感官の知覚で生活のなかの事件を生命力にあふれているかけらに分解し、また再編成して、織り込んで、一般の経験や観念以外の人のライフ・スタイルに継ぎ接ぎする」²⁰²のものであろう。このような「経文」のような宗教めいた部分を「魔法」として模倣しても、「一般」の人は解説なくては簡単に理解できないが、これは同性愛者や HIV 感染者の経験が「一般」人の経験から離れている、ということのメタファーとして考えてもよからう。

『荒人手記』は台湾の「同志文学」のカノンとも言える作品で、作者の朱天文はゲイではないものの愛読されてきた。台湾の国内外を問わず、その文章風格を模倣する者は多い。楊の散文は所々で『荒人手記』を想起させ、文章風格も似ていて、台湾「同志文学」の影響がうかがえる。

面白いのは、『荒人手記』の主人公は同性愛者であるものの、実は中国から日本に流亡していた哲学者胡蘭成（1906-1981）を記念する作品でもあることだ。戦前に南京の汪精衛政権に勤めていたことで「漢奸」とされた胡蘭成は、日本の神道と中国の天人概念との間には共通点があると主張したが、共産中国や国民党の台湾では失われた「中国文化」を、流亡先の日本で探し当てたと言えるであろう。『荒人手記』もまた日本が舞台であり、日本が「荒人」の悟りの場所となっている。一方、中華系のアイデンティティを持つマレーシア華人の「私」も、おそらくマレーシアにおける先行文学作品からは、自分のゲイとして、HIV 感染者としての苦痛を語る手法を見つけられず、台湾同志文学作品のカノンから、同性愛者を表現する方法を学び、それで表現したのではないか。異国において自分が追い求めた世界を発見すると言う点において二作は類似している。

4.4.馬華文学として読む「毒藥」

「毒藥」はその内容から、主人公がゲイであることが看取できるが、マレーシアに関する描写はほとんどない。前述の通り、朱天文『荒人手記』の作風を模倣した文字は、台湾的文章であり、マレーシアで書かれたものとは思われない可能性が高い。特に文学

²⁰¹ 朱天文『荒人手記』（台北市、時報二版、1997 [1994]）、89 頁。日本語訳は、池上貞子訳『荒人手記』（東京、国書刊行会、2006）、105-106 頁による。なお一部の明らかに誤植であるフリガナは論者が修正した。

²⁰² 「有關《荒人手記》的部分」（第一回「時報文学百万文学獎」の審査會議の記録の抜粋）、朱天文『荒人手記』（台北市、時報二版、1997 [1994]）所収、222 頁。

賞に参加した作品として読めば、おそらく作者ゲイで HIV 感染者であるという背景しか読み取れないであろう。

この文章がマレーシアで書かれたものが分かる部分は二つしかない。一つは、HIV の治療に関する箇所である。HIV の治療や予防に力を入れ、度々政策などに進言している台湾の内科医羅一鈞氏²⁰³は自分のブログで「毒薬」をシェアし、感染症専門内科医として注をほどこし、「毒薬」の HIV 治療薬の中国語名は、いずれも台湾の薬名とは異なっていることを指摘している。また「長い長い処方箋が出され、（論者注：病院内の薬局で）整理券を取り、薬をもらう順番を待ち、そのあと指定された（論者注：外部の）薬局で管制されている恥ずかしい薬を買いに行く。」²⁰⁴という場面については、病院内の指定薬局で直接薬をもらうことになっている台湾の事情とは異なっているという²⁰⁵。このようなマニアックな知識は、おそらく文学賞の審査委員は持っていないだろう。

もう一つは、副作用に苦しんでいる場面についてである。「私」は寒気がして、「ここは常夏の半島なのに、自家のベッドの中で凍死するなんて、なんてデタラメなんだ」²⁰⁶と心境を綴っている。「常夏の半島」という言葉は、台湾の人なら屏東県の恒春半島を想起するであろうが、マレーシア華人にとってはマレーシア西部を指す言葉として使われる²⁰⁷。思うに「毒薬」は最初、台湾の中国時報文学賞ではなく、マレーシアの「花蹤文学賞」に投稿されたので、現地マレーシアをイメージして用いられたのであろう。

創作年代と背景から考えると、2009 年の台湾はすでに性的マイノリティに対して比較的寛容になっていた。2003 年から始まった「台湾同志遊行（台湾プライドパレード）」は、毎年数万人が参加するようになり、2004 年から教育現場で適用されていた「両性平等教育法」も、性的指向などにも配慮した「性別平等教育法」に変更され、当事者によるパートナーシップや同性婚の法制化の推進なども始まっていた²⁰⁸。

一方、マレーシアは性的マイノリティに対して保守的な姿勢を崩していない。同性婚やパートナーシップはおろか、旧植民地時代から残されてきたマレーシア現行刑法 377 条（いわゆる「ソドミー法」）は「自然の秩序に反する」性行為として「男性器を他人

²⁰³ 1977-、当時は国立台湾大学附設医院の内科医、2019 年現在は台湾行政院疾病管制署副署長。

²⁰⁴ 原文：「開處藥方一長串，拿號碼等領藥，再到指定西藥店買管制不得見光的藥。」

²⁰⁵ 羅一鈞のブログ「心之谷」「《時報文學獎散文首獎》毒藥【楊邦尼】」
http://heartvalley.blogspot.jp/2010/10/blog-post_15.html（2010.10.15.、最終閲覧：2019.12.4.）。ここでは、「悲哀や死亡を語らない」というところが評価されている。

²⁰⁶ 原文：「這裏是長年炎夏半島，我怎可凍死在自家床上太荒唐」

²⁰⁷ 例えば同じくマレーシア半島部出身の鍾怡雯も、自分の「自伝体散文集」を、『野半島』（台北：聯合文学、2007）と命名した。

²⁰⁸ 台湾の性的マイノリティ運動の動向は、劉靈均「性的マイノリティ運動 戒嚴令解除以後の道のり」『台湾を知るための60章』を参照。なお、戒嚴令解除以後の性的マイノリティに関連する法律の動向については、鈴木賢「台湾における性的マイノリティ「制度化」の進展と展望」『比較法研究』78号、236-246頁（比較法学会、2017.1.31.）に詳しい。

の肛門または口腔の中への挿入」などの行為を違法としているので、男性同性愛者の性行為は合意があっても重い処罰の対象となっている。またイスラーム法であるシャリーアの中においても違法とされている²⁰⁹ので、ゲイであることをカミングアウトすることは危険を伴う行為である。アンワル・ビン・イブラヒム（Anwar bin Ibrahim、1947-）元副首相がある男性とのアナルセックスを告発され、再逮捕されたのは2008年のことである（2018年に「全面的赦免」を受けた）。差別的な法律の下では社会の空気はさらに厳しいものだと考えられる。また湯炳超によると、マレーシアでは同性愛者は21世紀に入ってからようやくメディアに現れるようになったが、やはり迫害の対象であり²¹⁰、華人系の性的マイノリティの当事者は、華人として、性的マイノリティの当事者として、二重の圧迫を受けている²¹¹。

また、これまでの馬華文学にも「同志文学」と考えられる作品はあったが、許通元によると、質的に、また量的に向上し、題材も多様的になってくるのは21世紀に入ってからだという²¹²。『與島漂流：馬華當代散文選 2000-2012』を編纂した林春美²¹³も、マレーシア華人の散文に同志／エイズなどのセンシティブな題材は極めて稀で、むしろ小説にそうしたものがみられるとして、「毒薬」の特異性を指摘する²¹⁴。つまりマレーシアは、同性愛者としての経験を自由に発言できるような環境ではなかったし、HIV感染者としての経験もまた公にしにくいと考えられる。馬華文学研究の華人大学院生が「同志文学」研究を進めようとして、大学教員に阻止されたことも報告されている²¹⁵。

「毒薬」は「マレーシア文学」としての特徴は稀薄であり、あえて台湾の同志文学の影響をアピールしたものだ。他の楊邦尼作品を見ると、「邊城三疊」²¹⁶では、ジョホールバルを描いてはいるものの、構造や描写には朱天心「古都」（1996）に影響を受けた

²⁰⁹ マレーシアの性的マイノリティの当事者に関わる法的問題は、クウオン・キ・ジュン「マレーシアー同性婚に関する法的および政治的制約」『福岡大學法學論叢』61巻3号（福岡市、福岡大学研究推進部、2016.12.）、835-856頁に詳しい。

²¹⁰ 湯炳超『論馬來西亞華人男同志的處境』（桃園市中壢区、元智大学中国語文学系修士論文、2015）を参照。23頁の「馬來西亞性別人權事件表（マレーシアにおけるジェンダー人権事件リスト）」では1980年代以来の性的マイノリティに関わる事件が整理されている。ちなみにこの表にはこの「神話はもはや」事件が見られないことと、鍾怡雯は湯炳超の指導教官の一人であることを付記しておきたい。

²¹¹ 湯炳超、前掲書。またマレーシア華人ゲイの当事者としての葛藤は、キリスト教牧師でジャーナリストの歐陽文風の自伝『現在是以後了嗎』（簡体字版はクアラルンプール・3nity、2006〔論者未見〕、繁体字版は台北・基本書房、2014）が詳しい。

²¹² 許通元「假設這是馬華同志小説史」『有志一同：馬華同志小説選』（クアラルンプール、有人出版社）、246頁。

²¹³ Lim Choon Bee、ペナン出身、2019年現在はプトラマレーシア大学外国文学科副教授。作家でもある。

²¹⁴ 林春美「序：與島漂流」林春美、陳湘琳主編、前掲書、8頁。

²¹⁵ 張斯翔『論馬華同志小説與同志文化』（台北市、國立台灣大學中國文學研究所碩士論文、2012）、2頁。

²¹⁶ 楊邦尼「邊城三疊」『浮沉簡史一城市，晃蕩，與友愛』、6-13頁。

レズビアン的な感情が描かれる。また愛する台湾人の男性への思いを込めた詩集『刪情詩：在我手中微軟勃起』の書末に付された「鳴謝」の引用作家の表には、「馬華」詩人木焱²¹⁷と映画監督蔡明亮（ツァイ・ミンリャン）²¹⁸を除けば、台湾、中国文学や西洋文学の作家ばかりが並んでいる。同性との恋は全て台湾で発生し、また台湾のテキストを借りて書かれているため、同性愛者として「半島」すなわちマレーシアで生活する潤いのなさや辛さも窺える²¹⁹。台湾の「同志」ディスクールを借用してマレーシアの「同志」ディスクールに新しい風をもたらそうとする意図も読み取れる。

4.5.誰の「神話はもはや」：文学賞の中の虚構と真実

「神話はもはや」の論争に戻ろう。鍾怡雯が言う現象は、同じく馬華作家の黄錦樹²²⁰も指摘している。黄錦樹は「神話はもはや」の約半年後、「「文心」凋零？」という評論を発表した。この文章の冒頭で黄は散文作家吳柳蓓（1978-）を名指しで批判した。すでに四冊もの散文集を出版している彼女の作品は、「散文」とされながら、語り手は時にタクシーの運転手の娘となり、時にはインドネシアの「外籍新娘（国際花嫁）」の娘となっており、内容のほとんどはあきらかに虚構であるためである。黄はさらに「神話はもはや」事件についても言及し、他の例も挙げて、散文は小説ではないので、虚構は許されないと述べた。文章の最後では、もし散文を虚構できるものだと解釈したら、各文学賞は散文賞をやめて「エッセイ叙情散文（原文：山寨抒情散文）」を設ければいいのだと揶揄している²²¹（ただ、その後若手小説家の林韋地に、匿名のエッセイ賞の選評で真実性を追求できるわけがないと批判された²²²）。つまり、著名な小説家兼評論家である黄錦樹は、散文の機能は小説の機能は異なると考えており、散文は必ず事実に即さねばならないとしているのである。

約2週間後、詩人唐捐²²³は、このような問題は文学賞の匿名性がもたらす弊害にあるとしながらも、語り手は本当の自分ではなくても差し支えない、散文作者は「本人の自我を以てその他人の自我に入る（原文：以本我入他我）」のでも構わないと主張してい

²¹⁷ 本名林志遠、1976-、ジョホールバル出身、国立台湾大学卒。現在台湾在住。

²¹⁸ Tsai Ming-liang、1957-、サラワク州クチン市出身。

²¹⁹ 楊邦尼『刪情詩：在我手中微軟勃起』、144-146 頁に参照。『刪情詩』で見られる台湾の影響は、速水信介「詩評：楊邦尼《刪情詩：在我手中微軟勃起》」『季風帶』4号（クアラルンプール、三三出版社）、69-71 頁では論じられている。

²²⁰ Ng Kim Chew、1967-、ジョホール州出身、国立暨南大学中国文学系教授。

²²¹ 黄錦樹「「文心」凋零？—抒情散文的倫理界線」『中国時報』2013.5.20.、E4 版。

²²² 林韋地「回望神話（下）」『中國報』、2016 年 3 月 15 日。

²²³ 本名劉正忠、1968-、当時は国立清華大学中国文学系教授、2019 年現在は国立台湾大学中国文学系教授。

る。このような文脈から見れば、散文は必ず「真実」に即すべきなのか、事実であるべきかについては、立場は必ずしも一致していない²²⁴。

一方、鍾怡雯が語る「神話」がいかなるものなのかについても、考えなければならぬ。鍾怡雯の夫陳大為²²⁵は、以下のように述べている。

1990年代は台湾最後の「文学賞黄金期」であった。21世紀に入り、国際化（翻訳著作）した読書市場や消費文化の読書趣味、氾濫する文学賞の生態（そして低下していく受賞作のレベル）などの影響により、文学賞はその重要性を損ねている。20世紀末の、最後の黄金時期には、林幸謙と鍾怡雯は散文で、陳大為は新詩で、黃錦樹は小説で賞を得て、四人が同時に興起したのである。²²⁶

つまり、「神話はもはや」と嘆く鍾怡雯も、「エッセイ情散文」賞を設けようと揶揄する黃錦樹も、文学賞が「氾濫している」と評価する陳大為も、文学賞受賞で有名になった作家であるが、彼らはいずれも、現在文学賞のレベルが低下していると考えているのだ。陳大為の統計によると、1981年から2011年間、マレーシア華人が「重要」な散文賞を計43回受賞している。そのうち1991年から2001年の間に鍾怡雯が19回、1997年から1999年の間に陳大為が5回受賞しており²²⁷、夫婦合わせて24回という受賞回数は全体の半分以上を超えている²²⁸。また前述の三人は、その後かなり頻繁に文学賞の審査委員となっている。さらに言えば、鍾怡雯はマレーシア華人散文を研究しており、夫の陳大為もまた馬華文学史を書いている。夫婦は学術的な連携が強く、互いに互いの研究や論文を引用し合っている。つまり、少なくともマレーシア華人作家の神話は、その数人の受賞から始まり、またこの数人が文学賞の審査委員となることによって「文学賞」のテイストを確定し、さらにこの数人の研究を手法としてその「神話」が事実化されたものと言ってもよい。

²²⁴ 唐捐「他辨體，我破體——跟散文的「文心凋零」之說唱個反調」『中国時報』2013.6.6.、E4版。

²²⁵ Chan Tah Wei、1969-、ペラ州イボ市出身、2019年現在は国立台北大学中国文学系教授。

²²⁶ 陳大為『最年輕的麒麟——馬華文學在台灣（1963-2012）』（台南市、国立台湾文学館、2012）、156頁。

²²⁷ 陳大為、前掲書、254-256頁。

²²⁸ 約56%。計算は論者による。しかし注意すべきなのは、前述のように、陳は文学賞が「氾濫していく」と考えているので、このリストは「公信力と競争力を持つ賞」しか統計していない。よって陳大為本人の主観的な見方によって「実質の知名度と影響力を持たない」ものは削除されている。詳しい説明は、陳大為、前掲書251-253頁を参照。ちなみに楊邦尼「毒藥」の受賞はリストに入っている。

しかし、鍾怡雯の散文に対する考えは、黃錦樹のように固定したものではないらしい。1997年、鍾は散文「給時間的戰帖」によって「聯合報文学獎」の散文大賞を獲得した。これは彼女が初めてとった散文大賞であったが、その年のうちにさらに散文「垂釣睡眠」で「時報文學獎」の散文大賞を得た。このダブル受賞で彼女は文壇の注目の的となっている²²⁹。勿論この前にも鍾は他の散文賞の副賞などを受賞していたが、面白いのは「聯合報文学獎」の謝辞である。

大学時代にはいくつかの詩を作りました。修士論文は小説について書きましたが、私は終始散文の創作に力を入れています。散文を書くのは誠に楽しいことで、生活の重心でもあります。これは私が初めて聯合報文学獎に参加したのですが、虚構の散文で参加したのです。私は散文において直接的に真実の生命の経歴を漏らす手法を好みません（私の一部の旧作は確かにそういう風に誤解されがちですが）。偶に私は記憶の映像のかけらを何枚か混ぜ、彼らを自分で糸を吐かせ、繭を作らせ、その文字を拾って文章にします。散文はまさにこのように楽しいものなのです。²³⁰

つまり、鍾怡雯の文学者としての出世は、まさに「虚構の散文」によるものだったのだ。しかもかねてよりこのような手法をとっており、そのこと自体を誇りに思っていると言うのである。当時の審査委員はすでに「散文の名家」とされていた周芬伶、焦桐、簡嫜、痾弦、楊牧の五人であり、五人の評判の基準から見ると、周芬伶、焦桐は「芸術手法」を重視し、簡嫜、痾弦は「感動」や「共鳴」を強調し、楊牧は技巧が大事だが、やりすぎると失敗すると述べている²³¹。審査の過程で、楊牧は終始鍾を評価していないが、他の四人はその芸術性や文字の流暢さを高く評価している²³²。この過程を調査して看取できるのは、これらの散文や詩の名家たちは、審査する際に文章の内容の真実性を疑っていないこと、芸術性や共鳴を大事にしていること、そして鍾が「虚構」であることを告白しても、受賞が取り消されたりはしていないことである。

「虚構」であることを告白しながらも「散文名家」であり続けている鍾の、前述の受賞作やそののちの作品は、やはり楊邦尼「毒藥」と同様、作家の出身地マレーシアについてほとんど描かれていない。マレーシア華人としての実体験に基づいて散文を書くかどうかはともかくとして、台湾の文学賞に応募する際は「マレーシア華人」としての

²²⁹ 陳大為、前掲書、159頁。

²³⁰ 鍾怡雯「得獎感言 生活的重心」『聯合報』1997.4.25.、41版。下線は論者による。

²³¹ 楊蔚齡（記録）「散文，生命的印記 第十九屆聯合報文學獎散文決選紀要（上）」『聯合報』1997.4.25.、41版。

²³² 楊蔚齡（記録）「散文，生命的印記 第十九屆聯合報文學獎散文決選紀要（下）」『聯合報』1997.4.27.、41版。

アイデンティティは二の次で、「芸術性」を高めた方が「共鳴」が得られやすいと考えられる。

鍾が作中ではっきりと散文の真実性を強調し始めたのは、2007年に出版された「自伝体散文集」の『野半島』においてである。「自伝体」という言葉を使ったのは、おそらく今までの散文と明確に区別しようとする意図があったからであろう。『野半島』に収録された作品の中で、鍾はようやくマレーシアの言葉や熱帯雨林の風景を書き入れるようになった。ここで鍾が「告白」したのは、彼女にトラウマをもたらした家族の悲惨な歴史である。つまり、散文の中で「虚構」の心境を書いてきた鍾は、文学賞を多数獲得して「散文名家」となった後、ようやく「実体験」に目を向けたとも言えよう。この事実から見れば、マレーシア華人系文学と「同志」文学は、マイノリティ文学の共通性を共有していることもわかる。しかし、彼女もやはり、「散文」は虚構できるもの、という神話を作ってしまった張本人の一人なのではないか。

4.6.結びに：「神話」とは何か

4.6.1.「神話」における複雑なコンテキスト

なぜマレーシアの作家楊邦尼の「毒薬」は台湾で受賞した2年後に批判的になったのか。このことを考えるためには、「同志文学」と「馬華文学」が、「文学賞」という賞金レースの場でいかに交差して、新たな問題を生じたかを検討しなければならない。本章ではまず「毒薬」をめぐる論争を紹介した。次に「毒薬」のテキストを分析し、朱天文作品の引用や模倣があることや、そして台湾人にとってマレーシア的な要素がほとんど書かれていないことを明らかにした。次にマレーシアにおける性的マイノリティが受けた法律的社会的の圧迫、そして性的マイノリティに対する理解や、彼らを描いた文学作品（特に散文作品）の欠如、ひいては性的マイノリティ文学に関する研究すらも制限される現状について確認した。また、楊邦尼を批判するマレーシア華人作家鍾怡雯および鍾に関連する人事は、台湾の文学のテイストやマレーシア文学の研究のあり方も独断的に規定しており、台湾の文壇に強く影響を与えていることを確認し、さらに「散文の名家」鍾怡雯もかつて「虚構」散文に拠って賞を得ていたことを指摘した。

2007年前後まで散文が「虚構」である可能性を否定しなかった鍾が、2010年以後「審査委員の同情心を利用する」ことで「嘘で大賞を取った」等と楊邦尼を批判したのである。なぜその言葉がそのまま自分に帰ってくること意識が向けられていないのだろうか。鍾への個人批判（HIV／エイズに対する知識の不足、HIV感染者への無配慮など）はさておき、楊邦尼が同性愛者であることや、HIV感染者であることが、仮に全部嘘であっても、このような批判が生じる原因自体を、台湾の「同志文学」と「馬華文学」の文脈から考えなければならないだろう。

4.6.2. 「同志文学」の視点：「感動ポルノ」に成り下がるマイノリティ文学

「同志文学」は自分の性的マイノリティとしての当事者性を主張して、マジョリティに異議を申すという機能を有している。しかし、作者が当事者であるかどうかという問題は、やはり読者の好奇心を惹起するものである。それはまた、作者のアウティングの問題に関わってくる。実際、1976年に『孽子』の連載を始めた白先勇は、1988年まではゲイであることをカミングアウトしていないし²³³、また『荒人手記』も主人公は男性であり、明らかに女性作家朱天文の実体験ではないと考えられる。これらの作品は、現実性よりも、むしろ芸術面において評価されてきた。たとえこれらの小説作品でも、マイノリティの当事者がある程度の実体験に基づかないといけないという「当事者性」を要求してしまうと、このような文学作品の価値は直ちに打ち消しとされなければならないだろう。三木直大の言い方を借りると、小説作品が「同志小説」として読まれるのは、作品の存在だけでなく、書き手と読み手の「共犯関係」により始めて成立するものであるが、散文作品でもこのような共犯関係が必要とされているということになる。特に、小説であれ散文であれ、「同性愛者」、「エイズ患者」、「先住民族」、「国際結婚によって生まれた子ども」など、自分のアイデンティティを公にすることの難しいマイノリティの当事者こそ、このような「当事者性」が曖昧である「共犯関係」を利用してはじめて社会に声が届くのである。

鍾怡雯が楊邦尼を批判する原因は、彼が「虚構」の散文で「同情心」を騙しとっている嫌いがあると考えたからだ。ここで浮上した「同情心」という言葉はとても示唆的である。つまり、2010年の鍾にとって、文学賞という世界の中で、マイノリティ（「同志」や「原住民」など）を書くものは、読み手の同情心を誘うものだと考えられていることがわかる。マイノリティ文学は、マジョリティへ理解を要請するものではなく、文学賞の審査委員にその不幸を見せつけることで、その「同情心」を煽る（騙しとる）とされている。鍾が、「今では外見からそうとわからないくらい治るなんて可能だろうか？エイズなのに。」と発言したのは、もちろんHIV／エイズに対しての知識の欠如によるものだが、その背景となったのは、おそらく文学賞におけるマイノリティのディスコースが持つ危険性であろう。楊が「他人事を語るように感情がかけていること」、さらに「治る」こと（しかもウイルスと「手を執りて」）は、「感動」や「説得力」や「共鳴」が足りない、ということになるのだ。

不幸なことに、そもそも1990年代の台湾におけるマイノリティ文学の発展は、文学賞が大きな役割を担っていた。その後一種の競技と化した文学賞は、主流社会の評者に感

²³³ 第1章で言及したように、白がカミングアウトしたのは、『PLAYBOY 国際中文版』、1988年7月号のインタビューで。

動させるための「感動ポルノ」（マジョリティの人々に感動させ、まるでポルノを見たように興奮させるもの）に成り下がった可能性が高い。このような「健常者が「かわいそうな人たち」として同情することを好む姿勢」²³⁴は、マジョリティの同情心を満足させるため、マイノリティの当事者に「努力する」ことや「苦痛を感じる」ことの演出を強要しなければならない。そうすると、マイノリティ文学は異議申し立ての機能が喪失し、むしろマイノリティの当事者の不幸を利用して、マイノリティの当事者へのステレオタイプ、そして主流社会のイデオロギーをさらに強固にするものに成り下がった。

4.6.3.馬華文学の視点：台湾を忘れない作家と祖国を忘れた作家

馬華文学の文脈から見ると、マレーシアは開放的になりつつある台湾とは異なり、とりわけ 2000 年以後は、「同志」に関する言説や社会的雰囲気はより保守化しつつあるのが現状である。そのため楊邦尼は創作に際し、台湾の同志文学でエイズ患者に関わる作品『荒人手記』を引用したり模倣したりしたのである。それは単に表現の借用であるだけではない。同性愛者に対して比較的自由的な空気を台湾で感じたので、マレーシア帰国後も、台湾の文学から材料を借用していると考えられる。

一方、1990 年代以後の文学賞を総覧めにしてきた鍾怡雯が文学賞の審査委員や研究者となって以後、自らが築いた「神話」が自分が認めていないマレーシア在住作家によって壊されようとしていることに憤慨を感じ、新聞紙で公開処刑のように当人プライバシーを公開（つまりアウトティング）し、しかもほとんど問題視されていない²³⁵。鍾怡雯は、自分の祖国・マレーシアは性的マイノリティに保守的で、マレーシアでは性的マイノリティや HIV 感染者の当事者が自らについて書くことが困難であること、楊のプライバシーが暴露される、同性愛者として逮捕される可能性があることを知っている上で「告発」した。作家兼研究者の「神話」派閥の恐ろしさと、その評価の硬直化の問題も顕在化している。

4.6.4.「同志文学」と「馬華文学」の交差点：「当事者性」と文学賞の功罪

「同志文学」は 1990 年代に文学賞の肯定を受けたことにより台湾現代文学史の表舞台に一気にかけ上がった。「馬華文学」もまた、1990 年代に台湾の文学賞の肯定により台湾現代文学における重要性が再確認されたとも言える。しかし、楊邦尼「毒菓」の一件でわかったのは、文学賞はこのような社会の中のマイナーな存在を可視化する一方、カノンの確立やテイストの単一化、さらに作家や研究者の人間関係が固定されることによ

²³⁴ 岩下恭士「「感動ポルノ」は要らない」『毎日新聞』東京版、2016. 9. 17.
(<http://mainichi.jp/articles/20160917/ddl/k13/070/006000c>、最終閲覧
2019. 12. 4.)。

²³⁵ 林韋地、前掲文。

り、そのステレオタイプをさらに強固してしまう可能性があることだ。結局、「当事者性」を強調すればするほど、「当事者」が客体となってしまう、その表現意志が逆に不在となってしまう。「マレーシア在住の華人作家が描くゲイで HIV 感染者の散文作品」を評価するのに、結局作家本人も、マレーシアにおける同性愛者や HIV 感染者も、さらに台湾の同性愛者や HIV 感染者も、必要ではない「当事者性」を追求することにより、人格も人権も損われてしまうという矛盾した状況が発生するのである。

「同志文学」も他のマイノリティ文学も、書き手と聞き手双方の暗黙の了解、あるいは「共犯関係」を存在させなければならない。しかしもし当事者へのステレオタイプが固定化することで人権的、人格的損害が発生したら、マイノリティ文学の言説の意義が失われてしまう。もともとマイノリティ文学には、ダイバーシティの表現が期待されているのに、逆にダイバーシティを表現できなくなり、主流社会の価値観をさらに強化するものになってしまうのだ。おそらくこのような問題は、同志文学や馬華文学だけではなく、従来「文学賞」によって主流社会や文壇の評価を得てきた女性文学、原住民文学などのジャンルや、これから評価されると考えられる外国籍労働者の文学²³⁶等に起こりうるものである。このような問題も、今後の台湾のマイノリティ文学を読んでゆく際に重要になってくるであろう。

²³⁶ 新住民文学の評価と文学賞について、赤松美和子「新移民の文学が描き始めた新たな台湾の民主化」『東亜』597号、2017.3、100-107頁に詳しい。

終章：ハブとしての「台湾同志文学」

5.1.台湾同志文学の「起源」における大きな空白：同志文学の中の「日本」

1990年代に勃興した台湾「同志文学」の起源はどこにあるのか。繰り返しになるが、これまでの「通説」では、1987年の戒厳令解除以後、欧米のフェミニズム、ゲイ・リブ、クィア理論などがアカデミズム経由で台湾に輸入され、台湾の思想界や文壇に影響を与えたことから、「同志」運動の勃興と歩みを共にしながらブームになったとされている。また序章で既に言及したように近年は、中国文化からの影響も注目されつつある²³⁷。

しかし他方では、植民地として台湾を半世紀に渡り占領し、終戦後も絶えず最新の文化的コンテンツを台湾にもたらし続けてきた日本は、何故か「同志文学」における「日本」に関する研究は、長きにわたり欠席したままである。これはおそらく、台湾の「同志文学」研究者のほとんどが中国文学科あるいは外国文学科（英米文学科）の出身者であり、日本語能力が限られているというアカデミズムの事情に加えて、1990年代以降アジア各国にて女性や性的マイノリティの解放が進んでいる中で日本だけがかえって保守になりつつあることから、日本に関わる研究が台湾の研究者の関心の範囲内には入らなくなっているということが関係している²³⁸。

本論文の第1章から第3章において検討したように、個別の小説の「日本」に関わる部分を分析してみると、同志文学における「日本」の意義がはっきりと浮かび上がってきた。歴史的な文脈から見ると、台湾は戦前も終戦後も一貫して日本の文化的影響の傘下であり、特に水商売やエンターテインメントなど性的文化に関連する領域において、このような傾向はより強いものとなっている。そして「同志文学」という性的文化に関わる文学ジャンルもまた、当然その影響を受けている。

また、戦後の政治的状況から考えてみれば、1990年代までのアジア諸国において、性的マイノリティや性的解放についてのオープンな言説が存在した国は、おそらく日本のみであった。そのため本論文が論じてきたように、台湾の創作者が「同志」に関わるコンテンツを引用や借用を試みた際には、結果的に、日本の影が無意識の内に様々な場所で散見されることとなった。第1章から第3章までの白先勇、呉繼文、李琴峰のみならず、第4章の楊邦尼がモチーフとしている朱天文も、日本を小説の舞台にしたり、作品の中で日本の文芸作品を頻繁に言及したりしている作家である。

²³⁷ 許維賢、前引書。Sang、前引書。

²³⁸ 拙稿「從東亞少年愛到台灣同志：吳繼文《世紀末少年愛讀本》與須永朝彦」『臺灣學誌』18号、54頁。

つまり、本論文における「同志文学」の中の「日本」の発見は、台湾の「同志文学」における文化的起源を補完し得るものであると言える。

5.2.台湾「同志文学」の「輸出」と戦略的位置

第3章と第4章においては、台湾同志文学が台湾の国境と海を越えて、日本とマレーシアの文学に与えた影響を明らかにした。

第3章で論じた李琴峰や序章で言及した小佐野弾などは、台湾の同志運動や同志文学に影響を受けつつ日本の文壇で画期的な作品を呈し、2010年代後半の日本文壇におけるジェンダー問題への注目に対する追い風となった。また、李琴峰のような翻訳家の側面も持つ作家や、本論文では論じきれなかったが、台湾のゲイの劇作家・林孟寰の劇作を積極的に日本語に翻訳して上演する演出家の山崎理恵子（E-RUN）²³⁹などは、台湾の同志文学を日本の読者／観客と共有するだけでなく、台湾と日本が共有する歴史と性的マイノリティ運動の関係性に対する積極的な再考を促している。

また、第2章、第4章は両方ゲイのHIVに関わる。『天河撩乱』ではHIV患者の国際的移動を描き、「毒薬」が頻繁に引用している朱天文の『荒人手記』は、台日両国にルーツを持つゲイのエイズ感染者の死をテーマにしている作品である。HIV／エイズは今でも台湾の「同志文学」を含めて、アジアのゲイ文学においてとても重要な要素である。台湾在住のオープンリーゲイの日本の歌人小佐野弾は、2017年に出版した第一歌集『メタリック』で、友人のHIV感染者のために複数の歌を詠んだ。HIV／エイズというフィルターを通して、「同志文学」は、日本列島から台湾を経由してマレー半島まで議論を共有し、この長い空間を地政学的につなげた。

昨今の台湾は、同性婚の法制化などに伴い、性的マイノリティにフレンドリーな国として知られるようになり、その中で日本は相対的に後進国的な位置づけをなされることが多くなってきている。しかし本論文で論じた「同志文学」関連作品を含めて、台湾の性的マイノリティ関連コンテンツは実は日本と様々な関係性を持っており、これからは盛んな交流が予想される。日本の文壇ないし社会運動界は、このような作品から、台湾の同志文学のように文学で社会の不平等を変えるためのヒントを得られるかもしれない。

他方で、第4章で論じた楊邦尼の作品のように、台湾の「同志文学」は同じく中国語を使う世界各地の中華系の人々にも影響を与えている。マレーシアやシンガポールなど

²³⁹ 2018年、山崎が代表を務めている劇団「亜細亜の骨」は、林孟寰の作品「同棲時間：Brotherhood」を東京で上演し、また2019年には同じく東京で林の旧作「野良犬之家」（原作2014）を上演した。山崎は台本の翻訳からドラマトゥルクに至るまでを担当した、これらの公演における中心人物である。「同棲時間：Brotherhood」に関しては、台本『同棲時間：Brotherhood』（東京、亜細亜の骨〔私家版〕、2018）と同公演のパンフレットが確認できる。

東南アジアの華人系コミュニティ、そして中華人民共和国は比較的に保守的で、性的マイノリティの当事者はまだ台湾ほどの自由な空気を享受できていない。しかし楊邦尼の作品を論じることで見えてきたのは、中国語で書かれた「同志文学」の作品が、台湾以外の中国語圏にも影響を与えることができるということである。但し当然のことながらこれらの当地の「同志文学」にも、自らの地域やコミュニティの特性をも有していることを忘れてはならないのであり、各地における新たな発展もまた注目に値するものであろう。

「台湾同志文学」は、地域的に近く交流が盛んな日本や東南アジア、中華人民共和国を含む中国語圏において、発信力のあるジャンルである。このような戦略的位置は性的マイノリティの当事者にとって有益であるだけでなく、日本統治期には日本文学の一部とされ、戦後に至っては中国文学あるいは中国語圏文学の一支流であると見なされてきた台湾文学が自らの存在意義を確立するためにも、非常に有益なものだと考えられる。

5.3.終わりに：ハブとしての「台湾」、「同志」、「文学」

近現代の台湾の歴史とは、長きにわたる植民地の歴史でもあった。地理的、歴史的な要素のために、台湾では様々な文化が交差している。近代以降の台湾の文化は、その内部には様々なエスニシティが存在し、外部には中国（中華民国／中華人民共和国）、日本（戦前の大日本帝国／戦後の日本国）、アメリカの文化が帝国主義の勢いでその影響力を及ぼそうとし、その影響力を誇ってきた。こうした複雑な文化を共存させるために、台湾の文化はこれらのものを吸収しながらも、自ら特有の文化を構築しなければならない。

性的マイノリティの人々が結成する（あるいは、結成せざるを得ない）「同志」とは、もともと社会に疎外された人々のことであったはずだ。しかしこの論文で論じてきたように、台湾の「同志運動」、および「同志文学」などそれと共生する文化は、実際には台湾や東アジアの歴史、そして他の社会問題とその当事者などと絡みながら、積極的に問題意識を共有している。その結果、著者と読者たちは国境、立場やイシューやイデオロギの相違を超えて、問題意識を共有することにより連帯する可能性を誕生させた。そのことは、「同志文学」の作品を読めば、十分に理解されるだろう。

「台湾文学」自体がよく「中国文学」ないし「中国語圏文学」などの小さい子分類にされがちであり、さらに「台湾同志文学」は弱小な国／地域の中の弱小な人々のための社会運動から派生して形成されたものと考えられているので、国境や文化を超えることは一見簡単なことではない。しかし本論文が論じてきたように、「同志文学」というジャンルは意欲的に様々な歴史と文化を、そしてフェミニズム、階級問題、言語問題、マレーシア華人、エイズ、在日外国人のスティグマなどの問題を読者と著者が共有してき

た歴史を持ち、昨今に至っては既に強い発信力をもつジャンルとなっている。まさに「台湾」と「同志」という生存自体が危うく、自立せざるを得ない要素が共存しているために、結果として他の地域やジャンルとの地政学的、イシュー的、イズムの連帯が可能になったのである。この点を踏まえれば、「台湾同志文学」とは台湾の世界貿易における地理的位置と同じく、ハブ的な存在であると言ってもよいだろう。

忘れてはならないのは、2020年現在の台湾の国際情勢は非常に危険な状態であり、さらに世界中の性的マイノリティの当事者を取り巻く環境も、まだまだ前途多難であるということである。しかしおそらくはこのような状態が続いているからこそ、ハブとしての「台湾同志文学」は今日まで強く自己を主張することができたのであり、これからもそうすることができるだろう。

参考資料

1.日本語資料

- 『GREEN LETTER』14号（東京、アドニス経済研究所、1975）
- 「第六十回群像新人文文学賞発表」『群像』2017年6月号
- 赤松美和子『台湾文学と文学キャンプ』（東京、東方書店、2012）
- 赤松美和子「新移民の文学が描き始めた新たな台湾の民主化」『東亜』597号、2017.3
- 伊藤詩織『Black Box』（東京、文芸春秋社、2017）
- 小笠原淳「白先勇『孽子』と台北——移ろいゆく都市の記憶」緒形康編『アジア・ディアスポラと植民地近代 歴史・文学・思想を架橋する』（東京、勉誠出版、2013）
- 小佐野弾『車軸』（東京、集英社、2019）
- 温又柔『台湾生まれ 日本語育ち』（東京、白水社、2016）
- 貴志俊彦『東アジア流行歌アワー』（東京、岩波書店、2013）
- 邱妙津著、垂水千恵訳『ある鰐の手記』（東京、作品社、2008）
- クワン・キ・ジュン「マレーシアー同性婚に関する法的および政治的制約」『福岡大学学論叢』61巻3号（福岡市、福岡大学研究推進部、2016.12.）
- 黄英哲「歴史、記憶とディスクール——朱天心『古都』論」松浦恒雄、垂水千恵、廖炳惠、黄英哲編『越境するテキスト——東アジア文化、文学の新しい試み』（東京、研文出版、2008）
- 吳継文著、佐藤普美子訳「天河撩乱：薔薇は復活の過去形」許佑生ほか著、池上貞子ほか訳、白水紀子編『台湾セクシュアル・マイノリティ文学3 新郎新“夫”（ほか全六篇）』（東京、作品社、2009）
- 朱天心著、清水賢一郎訳「古都」『古都』（東京、国書刊行会、2000）
- 鈴木賢「台湾における性的マイノリティ「制度化」の進展と展望」『比較法研究』78号、236-246頁（比較法学会、2017.1.31.）
- 鈴木賢「判例時評 アジアで一番乗り、台湾で同性婚実現へ：台湾司法院大法官第748号解釈を読み解く」『法律時報』89巻9号、2017.8.
- 垂水千恵「解説」邱妙津著、垂水千恵訳『ある鰐の手記』（東京、作品社、2008）
- 垂水千恵「邱妙津作品における「鰐」という表象の源泉をめぐって—台湾現代文学における日本文学の「引用」—」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』20号（2012）
- 垂水千恵「紀大偉は如何に大島渚を受容したか—儀式を中心として—」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』21号（2013）
- 多和田葉子「選評」『群像』2017年6月号、227頁

張文菁「郷愁から憧憬へ——瓊瑤作品に見る臺灣民衆の意識轉換」『中國文學研究』33号（東京、早稻田大學中國文學會、2007.12.）

中山可穂「文庫版あとがき」『白い薔薇の淵まで』（東京、集英社、2003 [2001]）

野崎歓「選評」『群像』2017年6月号

白先勇著、陳正靚訳『孽子』（東京、国書刊行会、2006）

東山彰良『流』（東京、講談社、2015）

弘末和也「同性婚を支持した台湾司法院判断の分析」『函館短期大学紀要』44号、2017.10.

藤原新也『東京漂流』（東京・情報センター出版局、1983）

三木直大「阮慶岳短編小説の構造と「台湾同志文学史」の政治学」『アジア社会文化研究』16号（東広島市、アジア社会文化研究会、2015）

三須祐介「前衛としての台湾文学—1990年代文化論再考—国際シンポジウム参加記」『日本台湾学会ニュースレター』32号（2017.3.）

横山悠太『吾輩ハ猫ニナル』（東京、講談社、2014）

吉本ばなな『キッチン』（東京、福武書店、1988）

李琴峰「独舞」『群像』2017年6月号

李琴峰「透明な膜を隔てながら」『すばる』2017年9月号

李琴峰「流光」『群像』2017年11月号

李琴峰「ディアスポラ・オブ・アジア」『三田文学』2017秋季号

李琴峰『独り舞』（東京：講談社、2018）

李琴峰「星月夜（ほしつきよる）」『すばる』2019年12月号

劉靈均「性的マイノリティ運動 戒厳令解除以後の道のり」赤松美和子・若松大祐編『台湾を知るための60章』（東京、明石書店、2016）

林奕含著、泉京鹿訳『房思琪の初恋の樂園』（東京、白水社、2019）

林孟寰著、山崎理恵子訳『同棲時間：Brotherhood』（東京、亜細亜の骨〔私家版〕、2018）

2.中国語資料

王開平「主題人物 吳繼文 行雲人消息」『聯合報』1998年12月07日、48版

白先勇『台北人』（台北し、晨鐘、1971、第15版1976）

白先勇『孽子』初版（台北市、遠景出版、1983）

白先勇『孽子』允晨文化増修一版（台北市、允晨文化、1990）

石計生『時代盛行曲：紀露霞與台灣歌謠年代』（台北、唐山、2014）

邱妙津『鱷魚手記』（台北市、時報文化、1994）

- 邱妙津『蒙馬特遺書』（新北市、印刻、2006 [1996]）
- 朱天文『荒人手記』（台北市、時報二版、1997 [1994]）
- 朱偉誠「另類經典 臺灣同志文學（小說）史論」朱偉誠主編『臺灣同志小說選』（台北市、二魚文化、2005）
- 李白著、王琦注『李太白全集』中冊（北京、中華書局、1977）
- 李屏瑤『向光植物』（桃園市、逗點文創結社、2016）
- 李爽學「人妖之間：從張鷟的〈遊仙窟〉看白先勇的《孽子》」『三看白先勇』（台北、允晨文化、2008）
- 余華『活著』（北京、中国社会科学出版社、1995 [1992]）
- 吳繼文「記憶・邊緣・迷路」楊澤編『七〇年代：懺情錄』（台北・時報文化、1994）
- 吳繼文『世紀末少年愛讀本』初版（台北、時報文化、1996）
- 吳繼文『世紀末少年愛讀本』二版（台北、時報文化、1999 二版 [1996]）
- 林文月「新新版序兼懷悅子」『京都一年』（台北、三民、修訂二版 2007 [1971]）
- 林奕含『房思琪的初戀樂園』（台北市、遊擊文化、2017）
- 林春美「序：與島漂流」林春美、陳湘琳編『與島漂流：馬華當代散文選 2000-2012』（セランゴール州、有人出版社、2013）
- 林韋地「回望神話」『中國報』、2016 年 3 月 9 日
- 林佩苓『依違於中心與邊陲之間：臺灣當代菁英女同志小說研究』（台北市、秀威資訊科技、2015）
- 紀大偉『正面與背影——台灣同志文學簡史』（台南市、国立台湾文学館、2010）
- 紀大偉『同志文學史：台灣的發明』（台北、聯經、2017）
- 張斯翔『論馬華同志小說與同志文化』（台北市、國立台灣大學中國文學研究所碩士論文、2012）、2 頁
- 張愛玲「愛」『流言』（上海、五洲書報社、1944）
- 唐捐「他辨體，我破體——跟散文的「文心凋零」之說唱個反調」『中国時報』
- 2013.6.6、E4 版
- 唐毓麗「病患的意義：談《天河撩亂》及《丁莊夢》的家族／國族紀事與身體」『興大人文學報』49 期（台中市、国立中興大學文學院、2012）
- 國立台灣大學男同性戀研究社編『同性戀邦聯』（台北、號角、1994）
- 陳大為『最年輕的麒麟——馬華文學在台灣（1963-2012）』（台南市、国立台湾文学館、2012）
- 陳芳明「第十五章 一九六〇年代台灣現代小說的藝術成就」『台灣新文學史』（台北、聯經出版、2011）

- 許維賢『從豔史到性史：同志書寫與近現代中國的男性建構』（桃園市、中央大學出版中心、台北市、遠流、2015）
- 許通元「假設這是馬華同志小說史」『有志一同：馬華同志小說選』（クアラルンプール、有人出版社）
- 速水信介「詩評：楊邦尼《刪情詩：在我手中微軟勃起》」『季風帶』4 号（クアラルンプール、三三出版社）
- 葉慶炳『中國文學史』（台北、台灣學生書局、1987）
- 黃道明『酷兒政治與台灣現代「性」』（桃園縣中壢市・中央大學出版中心、2012）
- 黃崇凱「你讀過《漢聲小百科》嗎？」『文藝春秋』（台北、衛城、2017）
- 黃錦樹「「文心」凋零？——抒情散文的倫理界線」『中國時報』2013.5.20.、E4 版
- 湯炳超『論馬來西亞華人男同志的處境』（桃園市中壢區、元智大學中國語文學系碩士論文、2015）
- 曾秀萍『台灣小說中同志／跨性別書寫的家國想像』（台北市、國立政治大學中國文學系博士學位論文、2012）
- 楊邦尼「毒藥」宇文正主編『九十九年散文選』（台北、九歌出版社、2011）
- 楊邦尼「鍾怡雯的〈神話不再〉」『聯合報』2012.10.14.、D3 版。
- 楊邦尼「想我大學的同志社團 Gay Chat」『號外』437 号(2013.2.)
- 楊邦尼『古來河那邊』（セランゴール州、大將出版社、2013）
- 楊邦尼「毒藥」林春美、陳湘琳編『與島漂流：馬華當代散文選 2000-2012』（セランゴール州、有人出版社、2013）
- 楊邦尼『浮沉簡史——城市，晃蕩，與友愛』（セランゴール州、大將出版社、2015）
- 楊邦尼『刪情詩：在我手中微軟勃起』（クアラルンプール、三三出版社、2017）
- 楊蔚齡（記錄）「散文，生命的印記 第十九屆聯合報文學獎散文決選紀要（上）」『聯合報』1997.4.25.、41 版
- 楊蔚齡（記錄）「散文，生命的印記 第十九屆聯合報文學獎散文決選紀要（下）」『聯合報』1997.4.27.、41 版
- 管美蓉『大學入學考試制度與教育控制：台灣地區的歷史考察(1949-2001)』（台北市、國立政治大學歷史學研究所博士論文、2004）
- 翟翹「愛滋的可能」『聯合報』、2010.10.12.、D3 版
- 蔡克健「訪問白先勇」白先勇『第六隻手指』（香港、華漢文化事業公司、1988）
- 魯迅「唐之傳奇文」『魯迅全集』第九卷（北京、人民文學出版社、1981）
- 魯迅「第二十六篇 清之狎邪小說」『魯迅全集』第九卷
- 歐陽文風『現在是以後了嗎』（台北、基本書房、2014 [2006]）
- 歐陽修・宋祁撰『新唐書』（台北、中華書局、1997 復刻）

劉昀等撰『舊唐書』（台北、中華書局、1997 復刻）

劉靈均「白先勇《孽子》中的日本表象：「同志文學」中的多元文化共存」『中國語文學會 150 回例會紀念學術論文集』（東京都、中國語文學會、2018）

劉靈均「從東亞少年愛到台灣同志：吳繼文《世紀末少年愛讀本》與須永朝彥」『臺灣學誌』18 号（台北市、国立台湾師範大学台湾文学系、2019.4.）

賴香吟「序：那樣的荒涼是更需要強悍的」邱妙津『邱妙津日記』上冊（新北市、印刻、2007）

賴香吟『其後それから』（新北市：印刻、2012）

賴香吟「文青之死：A Fond Farewell」『文青之死』（新北市、印刻、2016）

鍾怡雯「得獎感言 生活的重心」『聯合報』1997.4.25.、41 版

鍾怡雯『野半島』（台北、聯合文學、2007）

鍾怡雯「神話不再」『聯合報』2012.10.7.、D3 版

鍾怡雯「誠信」『聯合報』2012.10.17.、D3 版

羅毓嘉「文學不該「社會盲」 談散文創作的紀實與虛構」『人籟論辨月刊』98 期（台北、中華利氏學社）、2012.11.

羅毓嘉「允許魍魎現身」『棄子圍城』（台北、宝瓶文化、2013）

3.英語資料

Hsu Kuo-wen（徐国文）（2006）“Unbinding Family History, Queer Bodies and Death: Reading Transgender and AIDS in Tian Ho Liao Luan”, in *Textual Politics of Minor Queers: Reading Lolita, Our Lady of the Flowers and Tian Ho Liao Luan*, Taoyuan County: National Central University

Pai Hsien-yung, *Crystal Boys*, Translated by Goldblatt, Howard. San Francisco: Gay Sunshine Press

Rojas, Carlos（2001）“The Ruins of Representation in the Fiction of Wu Jiwen”, in *Journal of Modern Literature in Chinese*（現代中文文学学報）Vol. 5.1, Hong Kong: Centre for Humanities Research, Lingnan University

Sang, Tze-lan D.（2003）, *The Emerging Lesbian: Female Same-Sex Desire in Modern China*, Chicago: University of Chicago Press, 2003

4.インターネット資料

羅一鈞のブログ「心之谷」 「《時報文學獎散文首獎》毒藥【楊邦尼】」

http://heartvalley.blogspot.jp/2010/10/blog-post_15.html（2010.10.15.、最終閲覧：2019.12.4.）

王立柔「318 運動 你看見同志了嗎？」ニュースサイト『風傳媒』、

<http://www.storm.mg/article/29595>、(2014.4.6.最終閲覧：2019.12.1.)

唐小宇「面對這樣的問題，當事人該如何回答？」

http://kaorikuraki.blogspot.jp/2012/10/blog-post_25.html (2014.10.25.、最終閲覧：

2019.12.4.)

女人迷編輯 Abby「我的痛苦不能和解 專訪林奕含：「已經插入的，不會被抽出來」」ウ

ェブサイト「女人迷」<https://womany.net/read/article/13052> (2017.3.16.、最終閲覧

2019.12.3.)

岩下恭士「「感動ポルノ」は要らない」『毎日新聞』東京版

(<http://mainichi.jp/articles/20160917/ddl/k13/070/006000c> (2016.9.17.、最終閲覧

2019.12.4.)

宇田川しい「LGBT ブームの課題とは？ 三橋順子さんが指摘する光と影「人権より先に
経済的側面が注目された」」、HUFFPOST 日本版

https://www.huffingtonpost.jp/2017/04/25/junko-mitsuhashi_n_16222104.html (2017.5.3.、

最終閲覧 2019.12.3.)

KaoRi「その知識、本当に正しいですか？」、

https://note.mu/kaori_la_danse/n/nb0b7c2a59b65 (2018.4.1.、最終閲覧は 2019.12.3)

中華民国司法院ウェブサイト

楊邦尼ブログ「寫在邊緣」(最終閲覧 2020.7.1.)

李琴峰ブログ(最終閲覧 2020.7.1.)

初出一覧

序章

「同志文学」について：戒嚴令解除後の台湾の LGBT 文学

『現代詩手帖』62 巻 5 号、2019. 5.

第一章

白先勇《孽子》中の日本表象：「同志文學」中の多元文化共存（中国語）

『中國語文學會 150 回例會紀念學術論文集』、2018. 12.

第二章

吳繼文『天河撩乱』における「東京」と「同志」

『野草』95 号、2015. 2.

第三章

日本語の「台湾同志文学」の誕生：李琴峰『独り舞』論

『未名』37 号、2019. 3.

第四章

楊邦尼「毒藥」の HIV 感染者「当事者性」論争：台湾「同志文学」と「馬華文学」の交差点

『海港都市研究』15 号、2020. 3.

終章

書き下ろし